

日本への回帰

大学教官有志協議会 編
国民文化研究会

第12集



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会
編

日本への回帰（第十二集）

—第二十一回学生青年合宿教室（佐世保）の記録より—

昨年一年間、国内の政局はロッキード事件によってゆさぶられ続けた。その総決算としての年末の総選挙で、自民党は結党以来始めて過半数を割り、その後無所属議員の入党によって、辛うじて単独政権維持に成功したものの、政情不安は依然として深刻である。一方、共産党は改選前の議席数の半数にも満たぬ大敗北を喫した。昨年六月、「自由と民主主義」の宣言案を採択し、選挙直前には党綱領に背反する「安保廃棄棚上げ論」まで持ち出して、柔軟路線のイメージ定着に躍起となったが、国民の審判は意外にクールであった。これが契機となって、明確にマルクス主義と絶縁した漸進的な革新勢力が結集されれば、硬直した保守政治もあるひは再び活力をとりもどすかも知れない。そのためには、教育や防衛、外交を一貫する「哲学」の奪回が何よりも必要である。「経済」はあくまで当面の重大問題であるが、そのみが国家目標となると、物の豊かさの中で心の飢餓感が深まり、有機体としての国家が、その生命力の衰弱に追ひこまれてゆくことは、日本のみならず、先進工業諸国の現状が雄弁に語ってゐるところである。

昨年五月いはゆる「学テ事件」の最高裁判決が出された。昭和三十六年十月実施の全国中学校一斉学力調査が、教育基本法一〇条の「不当な支配」に当るか否かをめぐる論争の決着である。最高裁の判断は、公許される目的のために必要かつ合理的と認められる行政権力の介入は、

たとへ教育の内容及び方法に關するものであつても、必ずしも、同条の禁止するところではないといふものであつた。公教育における教育内容に、ある程度行政当局が介入し得るといふことは、自明の常識であらう。この自明の道理の正否の究明に、実に十五年の歳月が費されたといふ異常さを凝視せねばなるまい。日教組は「倫理綱領」に驅つた革命路線から一步も後退してゐないし、集団の威圧による教育秩序のなしくづしの崩壊は着実に進んでゐる。

教育問題と共に、國家の運命を左右する防衛問題についても、昨年は重要な判決があつた。すなはち八月五日の、いはゆる「長沼ナイキ裁判」についての控訴審判決である。これは地裁段階で「自衛隊違憲」を打ち出した四十八年九月の福島判決をくつがへして、國側の逆転勝訴となつたが、その判決理由は明確な憲法判断を避けたものであつた。自衛隊法やその設置運営は国会や内閣の統治行為であり、司法審査権の範囲外にあるといふ理由である。やがて上告して争はれることにならうが、國家防衛の機構の存在が、合憲か違憲か國論を二分して争はれるといふ國が世界のどこにあらうか。憲法第九条そのものの当否が、嚴肅に問はれてゐるといふべきであらう。一時の流行語であつた「デタント」といふ言葉も今は誰も使はなくなつた。それは、ソビエトの軍備充實の時間かせぎであつたことは、今や明白となつた。米國の海軍長官が、ソビエトは日本海の制海権を完全に握つたと発言したのは、昨年二月であつた。今年になつて米國の国防長官は、「ソビエトは遂に、第二次世界大戰初頭にドイツ軍が行つたと同様な電撃攻撃を歐州で敢行するに十分な軍事力を持つに至つた」と衝動的な発言をしてゐる。中

国が、あの激烈な権力闘争の中でも、水爆を始めとする長距離ミサイル等の巨大兵器の生産に全力を傾けてゐることは周知の通りである。中ソの対立は深刻であり、当分和解は望めさうにないが、その条文中に明白に「日本」を仮想敵国と明記した「中ソ友好同盟条約」が、一九八〇年まで有効なこともまた事実である。かかる緊張の中で防衛意志そのものまで抹殺するやうな教育が、日夜行はれてゐるのである。

かういふ状態の中で、われわれにとつて、ほとんど唯一の心の救ひであつたのは、昨年十一月十日の御在位五十年の式典の挙行であつた。戦前の二十年は神格天皇の時代だからといふ理由で、式典参加を拒否した首長もあつたが、昭和といふ時代が、今上天皇といふ御人格によつて一貫してをり、戦前と戦後で憲法上の字句の表現こそ違へ、国家生活において果されてゐる天皇の現実的機能は寸毫も變つてはゐないのである。

△よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそぢ▽

かういふ歌をよまれる方を、王者としていただくわれらは、幸ひきはまれりといふべきであらう。

終りに講義要旨の掲載を快く許して下さった、木内、長谷川、村松の三先生に厚く御礼申し上げる次第である。

昭和五十二年三月

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき	1
一、祖国・学問・人生	
祖国と慰霊と―現代日本に見失はれたもの―	
福岡県立三池高等学校教諭 志賀建一郎	5
今上天皇のお歌について―和歌と学問―	
亜細亜大学教授 夜久正雄	19
輪読の意義―黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を中心に―	
福岡県立修猷館高校教諭 小柳陽太郎	43
和歌創作について	
戸田建設(株)勤務 青山直幸	65
時世の行き詰りと大学生の自覚	
国民文化研究会理事長 小田村寅二郎	87
二、講義	
「脱ケインズ経済学」の建設…世界経済調査会理事長 木内信胤	111

日本人の死生観……………文芸評論家 村松 剛……………143
 もっと根本的に考へ直さう―主体性の危機―……………

内外ニュース社長 長谷川 才次……………165

三、青年研究発表

日立造船(株)勤務 高岡 正人……………197

鹿児島市立河頭中学校教諭 小山 さよ子……………209

岡山大学癌研究所 田中 輝和……………221

第二十一回「合宿教室」のあらまし……………

東京工業大学理学部四年 大町 憲朗……………233

(附) 合宿歌集……………273

あとがき……………286

■ 祖国・学問・人生

祖国と慰霊と

—現代日本に見失はれたもの—

福岡県立三池高校 教諭

志賀 建一郎



(九十九島の夕景)

言葉と概念の乱れ

ペリクレスの葬礼演説

「祖国」と「慰霊」と

言葉と概念の乱れ

皆様も既に御覧の通り、この弓張岳からの眺めは実に素晴らしいのですが、先程の夕食の休み時間に、私は窓辺から海のかなたの半島に夕陽が落ちていくのをじっと見てをりまして、何ともしれぬ気持に襲はれました。空は朱色に染まり、見渡す限り広がる沢山の島々は、闇につつまれようとして、さらに、それをめぐる海はまことに静かにないでゐる。古代以来の人々がこの海に小舟を浮べて生活をして来たのでせうが、その情景が、眼に浮ぶやうで、これが祖先より代々受け継がれて来た国土なのだ、しみじみ思はれてなりませんでした。

さて、「祖国と慰霊と」と題して御話しをしていくことになっていますが、私が大学時代以来、特にこの合宿教室を通じて、何を学んできたかを考へて見ますと、それは結局、この二つのことばに集約されるやうな気持がしてなりません。

学生の皆さんはほぼ昭和三十年前後のお生まれでせうが、私も戦後生まれで、ほぼ同世代に属してゐると言へます。私達が育ってきた時代の特徴をここで思ひ浮べてみますと、第一に私達は、日本の国が危いか、将来日本はどうなるだらうかといふ危機感を直接に体験したことがなかったといふことが挙げられるでせう。それに代はって、声高に論じられてきたのは「民主主義の危機」だとか、「軍国主義化への危機」といったものでした。又、経済事情を中心と

して、日本は一貫した上昇、発展の過程を辿り、明日の生活は、必ず今日より良くなるといふ楽天的雰囲気支配して来たことも挙げられます。その中で私達は、まるで当り前のやうに享受してゐるこの日本のすがたが、かつて多くの人達の懸命の努力によつて守られ、受け継がれて来たといふ簡明な事実を殆んど忘れてしまつてゐるのではないでせうか。そこには、何か大切なものが欠落してゐる。それを端的に言へば「祖国」といふ言葉に集約されていくと思ふのです。

さて、この「祖国」と、表題にかかげました「慰霊」といふ二つの言葉は、現代の一般的風潮の中では、ほとんど死語に近いものになつてしまつてゐます。しかし、奇妙なことに、一部では、それが盛んに声高に叫ばれてもゐるのです。その典型的なものは、民主青年同盟の機関紙の題名ですが、これは「祖国と学問のために」となつてゐます。又、毎年、革新政党等による原爆による死者への慰霊祭も行はれてゐます。しかし、民青の使ふ「祖国」といふ言葉には、階級史観によつて裏付けられた特殊の意味づけがなされてをりますし、原爆の慰霊祭は、多くの戦没者の中から殊更に一部の方達だけをとり上げることによつて、反米、反戦運動の一環として、行はれてゐるやうで、共に、本来の意義がねじ曲げられてゐると言へるのです。ここでは、それを批判する前に、もっと大事な点を指摘しておきたいのです。それは、このやうな大切な言葉が、政治的意図でねじ曲げられても、誰もそれに気づくことなく、そのことに全く無

感覚になつてゐるといふことです。ここで使はれてゐる用例の中では「祖国」や「慰霊」といふ言葉がもつてゐる本来の意味は死んでゐる。しかしそのことに誰も心をとめようとはしないのです。この傾向は、マスコミであれ、言論界であれ、そして大学の中であれ、どこにでも見られることです。かうして現代の日本では、言葉がその本来の意味とは無関係に、勝手に用ひられてゐる。例へば現在の日本を風靡してゐる言葉に「民主主義」といふ言葉があります。私は現在高等学校の教師をしてゐますが、教育の世界におきましても、民主主義とか、民主的といふ言葉が、全く無秩序に使用されてゐます。しかし、この言葉は例えば自民党も民主主義なら共産党も、さらにアメリカもソ連も皆、民主主義を標榜してゐることからも明らかかなやうに、現代では殆んど、その正確な意味を失つてゐます。にも拘らず、まるで呪文のやうにこの言葉が用ひ



られてゐるのは何故か。何か、どこかに、根本的におかしいところがあるはずです。では一体どこがおかしいのか。

ここでは、レジメでお渡ししたアテネのペリクレスが行った、「葬礼演説」をよみながらその問題を考へてみたいと、思ひます。

ペリクレスの葬礼演説

ペリクレスとは、古代ギリシャの、都市国家アテネの、将軍です。演説が行なはれたのは、紀元前四三一年の冬で、彼はこの二年後に、亡くなつてゐます。ギリシャは、このペリクレスの「葬礼演説」がなされる五〇年ぐらゐ前に、東方の大帝国ペルシャの大攻撃を受けますが、この時、ギリシャにおける諸ポリスは、一致して、これを撃退してゐます。この後の数十年間のアテネこそが、私達が一般的に言ふ、古代ギリシャのイメージの原形と考へてさしつかへないと思ひます。

政治的には、いはゆる直接民主制が行なはれ、経済的にも非常に豊かでした。文化面でも、演劇がきはめて盛んで、フィディアスをはじめとした多くの芸術家が輩出し、市民が心ゆくまでこれらを味はひ、楽しんでゐた時代でした。そのアテネの全盛時代の、最盛期を現出したの

が、このペリクレスの時代だったので。

ところが、ギリシャには、あと一つの強力な都市国家、スパルタがありました。この二つの都市国家は、つひに両雄並び立つことが出来ず、その他の都市国家が、それぞれ両者に同盟いたしまして、相対立し、ここにペロポネソス戦争が始まります。それが紀元前四三一年で、一年目の戦ひが済んだ冬、その年の戦没者に対する国葬が行はれ、この時、ペリクレスの「葬礼演説」が行なはれたわけです。それでは、ペリクレスの言葉を見ていませう。

「まず私は、わが祖先に讃辞をささげたい。今日この場にあつて、祖先の思ひ出に、最初の位をゆずるのは、われわれの義務であり、この機にふさはしいからである。なぜならば、この土を、わが血脈の祖先らは、古よりつねに住み耕やし、その自由を守る勇徳によって世々今日にいたるまで、子らにゆずり渡してきた。」(『トウーキュデイス戦史』岩波文庫より、以下同じ)

ペリクレスは、国葬の墓地に集った市民の前で、まず最初に「わが祖先に、讃辞をささげた」と、云ふのです。それぞれに悲痛な気持を、抱いてゐる参会者が、心を一つに寄せ合ふ機縁として、彼らの共通の祖先の功績と、その祖先が作り上げて来た彼らの祖国に対して、思ひをこらし、まさにそのおかげで、自分達が今生きてゐるといふことを、確かめようとするのです。

それでは、彼らの祖先は、どのやうな生き方をして来たのか、そしてアテネの国柄といふものはどういふ国柄であつたのか、ペリクレスの言葉にそれらを見て行きませう。

「ともあれ、苛酷な訓練ではなく、自由な氣風により、規律の強要によらず、勇武の氣質によつて、われらは、生命を賭する危機をも肯んずる……（中略）われらは、質朴のうちに美を愛し、柔弱に墮することなく知を愛する。われらは、富を行動の礎とするが、いたずらに富を誇らない。また、身の貧しきをみとめることを、恥とはしないが、貧困を克服する努力を怠るのを、深く恥じる。そして、おのれの家計同様に、国の計にも、よく心をもちい、おのれの生業に、熟達をばげむかたわら、国政のすすむべき道に、充分な判断をもつように心得る。ただわれらのみは、公私兩域の活動に関与せぬものを、閑を樂しむ人とは言わず、ただ無益な人間と見なす。」

ギリシャの直接民主政治といふものは、民主主義の、理想的な姿であるといふことが、しばしば云はれるわけですね。しかし、民主政治といふものは、一人一人が、国家の政治に対してそれをなし遂げるだけの、十分な判断力と、十分に心をくだいていく姿勢がなくては、直接民主制であらうが、何であらうが、出来るわけはないのです。ここにあるやうに、「おのれの生業に熟達をばげむかたわら、国政のすすむべき道に、充分な判断をもつように心得」なければ何一つ達成することは出来ないのです。

ここでは個人の生活と、国民の一人としての生活とが、市民一人一人の心の中で、大きくつながってゐるやうな生き方が大切にされてゐる。このやうな伝統こそが、アテネの政治と文化を支へてきたのだといふことが言へると思ふのです。アテネの直接民主制を、単なる政治の機構として考へてはならない。一つの政治制度が生まれるためには、それを支へる、その国民の生き方といふものがある。それが、ここでは明確に述べられてゐると思ふのです。それがなければ、民主制だとか言つたつて、何の役にも立たないのです。しかし、ペリクレスはそのやうな生き方をしない人を、「閑を楽しむとは言わず、ただ無益な人間と見なす」と、強い言葉で結んでゐます。

ペリクレスはさらにそのやうな生き方、伝統を貫く力として、「自由の氣風」と「勇武の氣質」とを挙げてゐますが、ここには、アテネ市民の武人的性格が良く表現されてゐます。彼は「われらは質朴のうちに美を愛し、柔弱に墮することなく知を愛する」とも述べてゐますが、ここには、芸術と知性を重んじながらも、ともすれば陥り易い、柔弱化への傾向を戒めるなど、実に注意深い人間性への洞察が見られます。これらのことは、彼らアテネ市民の人生観が、極めて現実の人間性に、密着したものであったといふことと、彼らの目ざす人間像が極めて総合的な人格を備へたものであったことを示してゐます。しかも、これらのことは、決して、彼らの単なる理想を述べたものではなく、彼らの具体的な生き方そのものであって、市民全体にと

っても、自明のことであつたと言へるのです。

ならば、その伝統は、現実にどう生き返つて来るのでせうか。ペリクレスの次の言葉を見てみませう。

「しこうして、すでにかれらの功績の主たるものは述べつくされた。なぜなら、私が国にささげた讚美は、ここに眠る人々や、かれらの行動をわからあつた人々の勇徳によって、真の美を得たからである。」

この文章より前の言葉は、すべて、祖先への讚美であつたのですが、それだけで、既にここに弔はうとしてゐる戦死者の功績は、明らかに言ふのです。何故なら、戦死者は勿論のこと、戦ひに参加した人達の勇氣ある行動によって、祖先への讚美が、「真の美を得た」からである——。伝統とは、紙に書かれたものでもなければ、石に刻まれたものでもない。後につづく人々がその道を生きていって、はじめて伝統たり得るのですが、このペリクレスの演説では戦死者への慰霊のポイントが、伝統を受け継いだことへの賞讃であつたことは、まことに注目すべきことと思ひます。ここには、歴史といふものの、真の姿が、表現されてゐるといへるでせう。ペリクレスは次に、遣された人達へ語りかけます。

「諸君は、ただ報国のすすめに満足するだけではなく、われらの国の日々の営みを心にきざみ、これを恋慕うものとならねばならぬ。そしてその偉大さに心をうたれるたびに、胸につ

よく噛みしめてもらいたい。かつて果敢にもおのれの義務をつらぬいて、廉恥の行ないを潔くした勇士らがこの大をなしたのである、と。かれらは身は戦いの巷に倒れようとも、おのが勇徳を国のために惜しむべきではないとして、市民がささげうる最美の寄進をさしのべたのである、と。」

よく味はつてもらひたい文章です。特に前半の、「国の日々の営みを心にきざみ」とか、「恋慕う」とか「胸につよく噛みしめてもらいたい」などといふ言葉に見られる、国家や先人に対する細やかな心づかひを偲ばせるやうな表現に注目していただきたいと思ひます。このやうな表現が、自然に出てくるやうな精神的風土が、アテネには存在してゐたのです。彼らの生き方に於いては、自分が生きることと、祖先のことを思ふことと、そして、国家のためにつくすこととは、一つのものとして、考へられてゐた。だからこそ、一人一人が行政にも、あるひは立法にも、そして裁判にも参加し得るやうな、さういふシステムといふものが、可能であつたのだと思ふのです。

最後にペリクレスは、戦死者の遺族に、深い思ひやりの言葉によってこの演説を終へ、ここに、長きにわたるペロポネソス戦争の最初の年の葬礼の儀式が、とどこほりなく終るのです。

「祖国」と「慰霊」と

このペリクレスの演説の主題は、私が演題としてかかげました「祖国と慰霊」といふことに直接につながってまゐります。その表現の中には、古今東西をつらぬく人間にとつての、最も普遍的なものが息づいてゐるのです。しかし、残念なことに、この翌々年ペリクレスは、当時流行りました疫病によつて、亡くなります。そして戦ひは、アテネに利あらず、最後は、スパルタに破れてしまふわけです。その不利な軍事情勢の中で、動揺するアテネ市民に、とりわけ青年達に正しい生き方を説き続けていったのが、ほかならぬソクラテスなのです。

ソクラテスと言ひますと、皆さんの中にはいはゆる無知の知を説いたとか、その方法は、産婆術であつたとか、哲学者の祖としてのソクラテスの像が描かれてゐるでせう。しかし、現実のソクラテスは、彼の祖国アテネが、まさに滅びつつあることに、誰よりも深く心をいため、それを救ふために命をかけた人であつたのです。

当時アテネでは、ソフィストの詭弁術が横行して、一身の立身出世の爲の弁論術が、青年の心をとらへてゐました。その中であつて彼は、ペリクレスを尊敬し、祖国を、父よりも母よりも、自分よりも、大切にしたいといふことばを残してゐるのですが、祖国を去ることを拒否し、国法に従つて、毒杯を仰いで亡くなったソクラテスの最後は、たしかに祖国に殉じたものと云へるでせう。これらペリクレスにしても、ソクラテスにしても、彼らが生きた現実の姿を直接に偲ぶべきで、それらの現実を遮断して、彼らの主張や行動を、抽象化し一般化して理解

しようとするれば、そこには生きた、血の通った思想を認めることはできない。そこにあるものは単なる、死せる概念にすぎないことになるのです。

歴史を貫く大切なものを守って戦陣に斃れていく人々、そしてその戦死者の霊を祀り、その志をうけついでいく人々、さういふ人々のいのちのつみ重ねが国家といふものがつながついていく基本的な姿ではないか。それはこのギリシャであらうと、日本であらうと何の違ひもないはずです。祖国を恋ひ慕ひ、亡くなった人たちの霊を慰め、そのためには自分の命もまた捧げて悔いない、さういふ志の継承が、古来人間が辿ってきた道なのです。

だが現在の日本ではこのやうな人間本来の生き方を大切にし、祖先の足跡を偲ぶ機縁にはほとんどめぐまれてゐない。民主主義も大事だらうし、自由も結構でせうが、それらを支へ、それらにいのちを与へるもの、それは今までに述べてきたやうな人間本来の生き方であり、国家のあるべき姿だと思ふのです。それは共産党が何と言はうと、蔽然としてゆるぎない事実なのです。ところがその事実を無視し、あるひはことさらに軽視して、民主主義とか自由とかいふスローガンだけが横行してゐるやうな日本の現状は、古今東西の歴史に照らしてみても、どこかいびつであるとしか言ひやうがないと思ふのです。

日本の歴史をしみじみと思ひ起してみること、そして祖国の為に命を捧げた人々の霊にむかつて謙虚に頭を下げる一瞬をもつこと、すべてはそこから始まるのです。そこに漲る情意の

力によって、今の日本を蔽ひつくしてゐる概念の混乱も断ち切ることが出来るに違ひない。

これから四泊五日の合宿が開始されますが、これまでの大学生活の中で欠けてゐたものは何か、そしてまた大学の中に、祖国の生命が蘇る道は何か、そのことについて卒直にそして真剣に語りあっていただきたいと思ひます。

今上天皇のお歌

——和歌と学問——



(九十九島周遊)

亜細亞大学教授・教養部長

夜久正雄

(一) 万葉歌人の国民的自覚―国がらと和歌

(二) 今上天皇のお歌

(三) 皇后さまの「やつがしら絵巻」連作 四十首

(一) 万葉歌人の国民的自覚——国がらと和歌

万葉歌人として有名な山上憶良は、「好去好来の歌」といふ、遣唐使を送り出す壮行の歌の冒頭に、かう詠んでゐます。

神代かみよより 言いひ伝つてけらく そらみつ 倭やまとの国は 皇神すめがみの 厳いづくしき国 言こと霊たまの 幸さきはふ国と
語りつぎ 言いひつがひけり 今の世の 人もことごと 目の前に 見たり知りたり

(以下略)

これはかういふ意味でせう。——神代から言ひ伝へて来たことに「そらみつ大和の国は皇神の厳しき国、言霊の幸はふ国」と語り継ぎ言ひ継ぎつづけて今日に至つたのである。そのことは、現代の人々もことごとく、目の前に見て知つてゐることである——と。

つまり憶良は、日本の国の本質——国がらは、「皇神の厳しき国、言霊の幸はふ国」と信じてゐる、と詠じたのです。

「皇国の厳しき国」とは、皇祖の神々のゆるぎなく臨ませたまふ国である、——つまり天照大御神のお定めになつた国の定めゆるぎない国、——宗教的に言へば、神々をまつる道のだ

えない国、政治的に言へば、天照大御神の御子孫の天皇の統治なさる国といふ意味になりま
す。「言靈の幸はふ国」とは、憶良より一時代前の柿本人麿かきのものひとまろといふ大歌人の歌集にある短歌
「敷島のやまとの国は 言靈のたすくる国ぞ まさきくありこそ」を継承したものですが、こ
れは、まことの歌は人の心一つにし、天地をも動かすといふやうな意味と言へませう。皇祖
の神々をまつる道と和歌の道とは、国の本質として自覚されてゐたのです。これが万葉時代の
国民的自覚と言つてよいでせう。この「道」としての和歌は、明治天皇さまが、

ひろくなり狭くなりつゝ神代よりたえせぬものは敷島の道

とお詠みになられたとほりに、「ひろくなり狭くなりつゝ——」盛んになったり衰へたりして
伝へられ、今日に至つてゐるのであります。

ところが近代日本の大学は、欧米の学問を輸入してそれを金科玉条としましたから、皇神を
あがめることと和歌を学ぶことは、日本の大学から排除されてしまひました。それとともに天
皇を尊敬、敬愛する感情も次第にうすれて来て、大学の中では天皇に対する関心さへ無くなつ
て来てしまつたのです。

「歌がわからない」といふことと「天皇がわからない」といふこととは、ほとんど同じやう

に私には思はれるのです。「歌がわからない」といふことは、歌を詠んだ人の心がわからないといふことです。天皇の詠まれたお歌もわからないといふことになりませう。それでは天皇のお心はわからないといふことになるのです。

昨年、御訪米を終へられた天皇さまが、新聞記者と会見なさって、その模様がテレビで放映されたのですが、その時、新聞記者諸氏の質問を聞いてゐて、もし今上天皇のお歌を読んでたら、ああいふ質問はできないはずだと思ったことが二度や三度ではありませんでした。日本の新聞記者諸君は天皇のお歌を無視して天皇さまとの会見をするのか、——と空恐ろしく思ひました。

日本の国の国がらについて考へ、天皇について考へ、今上天皇について知らうとするなら、まづ天皇さまの直接の御表現であるお歌を読んでもらひたい、——私はそのことを切に願ひするのです。その上で、天皇についての意見をたててほしいと思ひます。

そこで本日の講義の資料として、次の文献を用意してみましたので、まづこれについて説明し、次にお歌の一首一首についての解説を行ひたいと思ひます。

(一)の資料は「今上天皇の御歌」ですが、これは、昨年度の講義の時に解説した御製につづける意味で謹選したもので、戦後はじめての御歌会始の御製（おうたかいはじめ）「松上雪」（しょうじょうのゆき）（昭和二十一年）のお歌から、今年の同じく御歌会始の「坂」（昭和五十一年）の御製まで、新聞発表のお歌と『あけぼ

の集』のお歌とを照合しながら謹選したものです。

資料(二)は「皇后陛下の御歌」、資料(三)は皇后陛下の「やつがしら絵巻」の御歌四十首、資料(四)は「皇太子殿下の御歌」一首で、御製謹解の重要な参考としてあげました。資料(五)は三井甲之先生の『今上天皇御歌解説』の中の一節です。なほ御製「米国大統領の初の訪日」の英訳を付記しました。

(二) 今上天皇のお歌

(さて、講義では以上の資料の説明をしながら、「今上天皇のお歌」について解説をすすめましたが、勿論解説を終ることはできませんで、最後は御製の朗読をもって講義を閉ぢることになりました。そこでこの講義要旨は、資料として提出した謹編の御製集のごく簡単な説明を以てあてさせていただくことにします。かういふ解釈と心持をもって謹編し、朗読したといふ意味であります。)

まづはじめに、戦後のお歌をかかげました。

松上雪 (昭和二十一年)

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

広島 (昭和二十二年)

ああ広島平和の鐘も鳴りはじめたちなほる見えてうれしかりけり

春山 (昭和二十三年)

うらうらとかすむ春べになりぬれど山には雪ののこりて寒し
春たてど山には雪ののこるなり国のすがたもいまはかくこそ

折にふれて (昭和二十三年)

秋ふけてさびしき庭に美しくいろとりどりのあきざくらさく
風さむき霜夜の月を見てぞ思ふかへらぬ人のいかにあるかと

この最後のお歌について、三井甲之先生の遺著『今上天皇御歌解説』(昭和二十七年三月騰写印刷)に、次のやうな解説があります。

「かへらぬ人」は無限の悲痛感を背負ふ未帰還同胞である。「いかにあるか」といふ単純のコトバは極限の傷心事を包含する。「風寒き霜夜の月」も血の滴るやうな風物の肉迫するコトバである。風蕭々兮易水寒。壯士一去不復還。は芝居がかつてをるが、これはそれよりも内心に沁刻せらるゝコトバである。現実の不安のまつただ中の生活の表現である。この現実を耐忍

してこれを如実に「つゆほども理りたがひたる事あらで」のべたのであるから「人の心を和ぐべく」此のカナシキ心に解脱げだつの静寂がやどるのである。正岡子規は臨終に近づきつゝある病床で「一八の花咲き出で、我目には今年ばかりの春行かむとす」と詠んだが、そこに解脱のゆとりがある。「ウエルテルの悲み」を読んで自殺したのもあつたが、作者ゲエテは活動に満ちた八十三歳の長命を保つた。

病苦を回避せず之に直面して随順するが病苦を耐へる方法で、困窮の境遇のうちにも無窮の天地が見出さるゝ。生命は不思議である。臨終病床の辞世の和歌にも不朽の生命の表現は完成せらるゝ。

文中の「つゆほども理りたがひたる事あらで」は田安宗武『国歌八論餘言』の中の言葉である。「自然の景色をのべたれば、人の心を和ぐべく」とつづく。

敗戦の悲痛をお詠みになられた寂寥そのもののかういふお歌を拝誦する時、この陛下に誰が改めて敗戦の御感想をおたづねすることができでせうか。「ああ広島」と絶句される、悲痛極りないお歌を拝誦して、改めて広島原爆についての御感想をうかがふごときは、鈍感といふよりも残忍な行為であるときへ私には思はれるのです。

三井甲之先生は、今日の復興と繁栄とを予知することのできなかつた悲痛な戦後の苦難時代に、右の御歌解説を「永訣の書」として騰写印刷で頒布されたのです。先生は、『明治天皇御

集研究』（昭和三年五月初版）の著書で、私どもにとっては、明治天皇御製に眼を開かせていた
だいた一高昭信会以来の恩師であります。昭和二十八年四月三日に亡くなられました。
次に（平和条約発効の日を迎へて）（昭和二十七年）のお歌五首をかかげました。

風さゆるみ冬は過ぎてまちにまちし八重桜咲く春となりけり

国の春と今こそはなれ霜こほる冬にたへこし民のちからに

花みづきむらさきはしどい咲きにはふわが庭見ても世を思ふなり

冬すぎて菊桜さく春になれど母の姿をえ見ぬかなしき

わが庭にあそぶ鳩見てももふかなたひらぎの世のかくあれかしと

この五首のお歌は昭和二十七年四月二十八日か九日、前年のサンフランシスコ講和条約が発効するのを記念して、独立回復の天皇誕生日に際して新聞に発表されたお歌であります。

『あけぼの集』では「平和条約発効の日を迎へて二首」と題して、右五首の第二首目の「国の春と今こそはなれ」と「わが庭にあそぶ鳩見て」の二首が、二十七年の部の最初にかかげられてをります。そして「わが庭の」のお歌の第四、第五の句は「世の荒波はいかにあらむと」となつてをります。なほ、第四首目の「冬すぎて菊桜さく」のお歌は、『あけぼの集』では昭和二十八年の部の「折にふれて二首」の一首としてかかげられてをります。『あけぼの集』は、

大体、お歌の製作年次順にかかげてあると考へられますので、この点はよくわかりませんが、当時の新聞に右の五首がかかげられたことは事実ですので、独立回復当時の御心境として、この五首を、一種の連作として拝誦することができると思ふのであります。新聞発表の時には特に題は無かったと思はれますが、『あけぼの集』には題がついてゐましたので、その題をとつて、右のやうに記したのであります。

この五首のお歌につきましては、私も『歌人・今上天皇』の中で詳しく書きましたのでくり返しません。最後のお歌の最後の句が新聞発表当時は「たひらぎの世のかくあれかし」とあり、『あけぼの集』に「世の荒波はいかにあらむと」とあるのは、同じお心の表裏をのべられたものであることがよくわかります。国内外の平和をお祈りになるお心は、国内外の動乱を深く御心配になるお心とひとつお心であることがこの二首のお歌を読むとよくわかります。

敗戦、占領軍政下の時代、平和条約発効・独立回復といふ未曾有の時代の御体験は、悲痛な思ひ出として、御心に生きしめられてあることが、次のお歌で拝されます。

八月十五日（昭和三十年）

夢さめて旅寝の床に十とせてふむかし思へばむねせまりくる

一見しただけでは敗戦とかかはりが無く見えるやうな次のお歌も、私には、敗戦の御体験と

切りはなしては拝されません。

赤間神宮ならびに安徳陵に詣でて（昭和三十三年）

水底みなそこに沈み給ひし遠おやつ祖を悲しとぞ思ふ書ふみ見るたびに

桃山御陵（昭和三十七年）

陵みささぎも五十の年をへたるなり祖父おほぢのみこころの忘れかねつも

五十をばへにける年にまのあたり国のさま見ていにしへおもふ
桃山に参りしあさけつくづくとその御代を思ひむねせまりくる

佐渡の宿（昭和三十九年）

ほととぎすゆふべききつつこの島にいにしへ思へば胸せまりくる

明治神宮鎮座五十年祭に明治天皇をしのぶ（昭和三十九年）

おほちのきみのあつき病の枕べに母とはべりしおもひでかなし

孝明天皇陵参拜（昭和四十二年）

百年ももとせのむかししのびてみささぎををろがみをれば春雨はるさめのふる

春ふけて雨のそほふる池みづにかじかなくなりここ泉涌寺せんにゆうじ

ちちふのみや

秩父宮記念館

おとうとをしのぶゆかりのやかたにて秋ふかき日に柔道を見る

星（昭和四十四年）

なりひびく雷雨のやみに彗星のかがやきたりき春の夜空に

昭和五十年の元日の新聞に天皇皇后両陛下の次のお歌がかかげられました。

御製・十一月八日内宮にまゐりて

冬ながら朝暖かししづかなる五十鈴の宮にまうで来つれば

皇后陛下御歌

おだやかに冬たつこの日みともして伊勢の宮居にまうでけるかな

そして、同年「歌会始」の「祭り」のお歌は次のとおりでありました。

御製・祭り

わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々

皇后陛下御歌・祭り

星かげのかがやく宮の朝まだき君はいでます歳旦祭さいたんさいに

伊勢神宮に御参拝になる天皇さまに「みともして」とお詠みになる皇后さま。「神々に世の平らぎをいのる朝々」とおよみになられる天皇さまに対しまつて、「君はいでます歳旦祭に」とお詠みになられる皇后さま。何とも言へないあたたかいお心がお二人の間に通ってをられることが仰がれて、言ひつくしがたい感動をおぼえさせられるのです。

皇太子殿下のその歌会始の時の御歌(資料四)は次のお歌でした。

祭り

神あそびの歌流るるなつげがみか告文みとまきこの御声聞え来新嘗くにいなめの夜

かういふお歌を拝誦すると皇室御一家が、夫婦、親子の肉親の親縁にしたがひながら、お心ひとつに神をまつり世のためにお尽しになられるお姿がしのばれるのであります。資料の(三)として皇后陛下の「やつがしら絵巻」の連作短歌四十首の御歌をかかげたのは、歌としての傑作といふばかりでなく、皇后さまの天皇さまに対するお心、お子さまがたに対するお心が拝され

るからでもあります。また、次のお歌には、天皇さまの皇太子殿下に対しての深い御愛情ととも
もにきびしい御はげましのお心が拝されます。

あきひと

明仁と正田美智子の結婚内約（昭和三十三年）

けふのこの喜びにつけ皇太子につかへしひのみこ医師のいさを思ふ

喜びはさもあらばあれこの先のからき思ひていよよはげまな

また皇后さまの次の御歌には、天皇さまの御心労のほどが、御歌を通じて拝されるのであり
ます。昭和四十四年は東大の安田講堂が学生に占拠され、市街戦まがひの紛争が行なはれた年
であります。御歌がそのことを詠じられたとは言へませんが、また、全く関係が無いとも言ひ
切れないやうに思はれます。

皇后陛下御歌・折にふれて

つぎつぎにおこる禍まがごとをいかにせむ慰めまつらむ言の葉こともなし
みこころを悩ますことのみ多くしてわが言の葉もつきはてにけり

さきに「十一月八日内宮にまるりて」の御製をかかげましたが、『あけぼの集』には、昭和

二十九年の左のお歌がかかげられてをりました。伊勢神宮についてお詠みになられたお歌をかかげます。

伊勢神宮に参拝して (昭和二十九年)

伊勢の宮に詣づる人の日にましてあとをたたぬがうれしかりけり

神嘗祭に皇居の稲穂を伊勢神宮に奉りて 二首 (昭和三十年)

八束穂を内外の宮にささげもてはるかにいのる朝すがすがし

わが庭の初穂ささげて来む年のみのりいのりつ五十鈴の宮に (「田の実」ともあり)

歐洲の旅 四首のうち (昭和四十六年)

外国の旅やすらげくあらしめとけふは来ていのる五十鈴の宮に (伊勢神宮参拝)

式年遷宮 (昭和四十八年)

秋さりてそのふの夜のしづけきに伊勢の大神をはるかをろがむ

米国の旅行を無事に終へて帰国せし報告のため伊勢神宮に参拝して (昭和五十年)
たからかに鶏のなく声ききにつつ豊受の宮を今日しをろがむ

右は五十一年新年新聞発表のお歌ですが、同年の皇后さまの御歌には次のおうたがありません。

アメリカの旅も終りてかれがれにこほろぎのなくころとなりたり

アメリカ御訪問が、天皇后両陛下にとって、いかに大きな国事行為であったかが拝察されるのです。

戦死者をいたませられる御製については昨年の講義でも述べましたので、ここには、靖国神社のお祭りの時の御製を二首かかげます。

靖国神社九十年祭（昭和三十四年）

このそぢへたる宮居の神々の国にささげしいさををぞ思ふ

靖国神社百年祭（昭和四十四年）

国のためのちささげし人々をまつれる宮はももとせへたり

戦死者の祭祀を厳修せられる御心が仰がれます。

以上、多少分類的な見地から、御製を謹選してきましたが、次の御製は、この講義の準備のために御製集を読み返してゐるうちに、御表現のすなほさといふか直接性といふか、自然自由ありのままの御表現に特に驚嘆せしめられたお歌の何首かをかかげたのです。解説については『歌人・今上天皇』『国民同胞』その他に述べたことがありますので御参照いただければ幸いです。

澇沸湖畔（昭和二十九年）

みづうみの面おもてにうつりて小草はむ牛のすがたのうごくともなし

相撲（昭和三十年）

久しくも見ざりし相撲すまひひとびとと手をたたきつつ見るがたのしき

山形県植樹祭 蔵王山麓

人びととしらはた松を植ゑてあれば大森山に雨はふりきぬ（資料「杉」を「松」に訂正）
雨の中鍬を手にして人々と苗木植ゑゆく大森山に

日本航空シテイ・オヴ・サンフランシスコ号に乗りて（昭和三十六年）

空翔けて雲のひまより見る難波ふるき陵みかさきをはるかをろがむ

新幹線 二首（昭和四十年）

四時間にてはや大阪に着きにけり新幹線はすべるがごとし
避け得ずに運転台にあたりたる雀のあとのまどにのこれり

鳥取県植樹祭（昭和四十年）

しづかなる日本海にっぽんかいをながめつつ大山だいせんのみねに松うゑにけり

宍道湖しんぢこ（昭和四十年）

夕風のふきすきむなべに白波のたつみづうみをふりさけてみつ

歐洲の旅 四首（昭和四十六年）

とづくに 外國の旅やすらげくあらしめとけふは来ていのる五十鈴の宮に（伊勢神宮参拜）

とづくに 外國の空の長旅ながたびことなきはたづさはりし人のちからとぞ思ふ

ヨーロッパの空はろばるととびにけりアルプスの峯は雲の上にみて

アラスカの空に聳えて白じろとマッキンレーの山は雪のかがやく

Farewell to honorable Mr, Ford, the
President of the United States of America,
who visited Japan for the first
time as the incumbent President.

On bright morning of November, Mr.
President, you've taken off our land
and soared into the blue deep,

Leaving the warm memory of our
friendly talks,

Oh, these blessed days!

米 国 大 統 領 の 初 の 訪 日 （ 昭 和 四 十 九 年 ）
大 統 領 は 冬 晴 の あ し た に 立 ち ま し め む つ み か は せ し い く 日 を 経 て
に ち へ

この最後のお歌は、下島連亜大教授（トインビー『歴史の研究』の監訳者）によって上のやうに英訳され、小田村寅二郎先生の御尽力によりアメリカ側に伝えられました。当時サンケイ新聞に英詩に翻訳されてフオード大統領に伝えられたと報道された名訳です。今年の天皇誕生日にニューヨーク・タイムズが御製の御発表を願ひしてきたといふことが新聞に報ぜられましたが、そのこととも関係があると思ひます。

御製について、日本の新聞記者諸君よりも海外のジャーナリストの方が関心をよせはじめたのではありますまいか。

御即位五十周年の記念式典に際して、心から御製を拝誦し、長年にわたる御心労をおしのび申上げたいと思ひます。

(三) 皇后さまの「やつがしら絵巻」連作 四十首

次の資料(三)の皇后陛下「やつがしら絵巻」の連作短歌四十首のお歌は、昭和四十八年九月、東京・上野の日本芸術院会館で行はれた「皇后さまの絵と書展——古希をお祝いして」に展示されました絵巻全巻を拝観して、苦心して書き写して参ったものでございます。当時『国民同胞』に掲載させていただきましたのをここに再録させていただきました。孝明天皇の御連作以来の連作大作で、題材と言ひ、御表現と言ひ、現代を代表する不朽の作と思はれます。説明は省略しますが、声に出して読んでください。(私の読み方で、間違ひがあるかも知れませんが、ふり仮名をつけてみました。御参考にしてください。)

皇后陛下「やつがしら絵巻」の御歌

昭和四十二年四月二日、吹上ふきあげのみそのに、日ひの本もとにはなき迷鳥めいちようやつがしらといふを、くし
くもわれのみいでければ

ひるげをへふとながめやる庭さきにおもひもかけぬ瑞鳥ずいちようをみぬ
いただきにかんむり羽のつらなりてさもおもしろき鳥のまひきぬ



「やつがしら絵巻部分」(『皇后さまの絵と書展(目録)』一
朝日新聞発行一から

日の本にはるぬ鳥なりと人はいふわが見いでしをあ
はれと思ふ

大君はわがさけぶこゑにおどろきの御まなざしもて
みいりたまひぬ

ひとめみてやつがしらぞとのたまへる君のみことば
うれしとぞ思ふ

正倉院しょうそういんぎよぶつの御物ごぶつにありとふやつがしらいま目のまへに
餌えをあさるなり

うすいろの冠かんわりばねもおもしろくつらなりたてりこの
やつがしら

めづらしき鳥にわがむねとゞろかせときを忘れてあ
かずながむる

やつがしらなほ日々にくるをたのしみて

よべのとまりいづこなりけむやつがしら西の空より
とびきたりたる

黒白のはねひるがへしやつがしらかし櫪かより黄楊つげにとびうつりゆく

やゝしほし櫪おいきの老木くすえの梢くすえより遠くながめてまたとび立ちぬ

やつがしらけふはいづこと庭の面おもてに目をはしらすがたのしみにして

けふもまたみいでてうれしやつがしらこのまゝこゝにうつりすみてよ

鳥とりずきの宮みやもはせつけそうがんきよつ双眼鏡そうがんきよつを手にして鳥をさがしもとめつ

冠羽かんむりばね立てつおろしついくたびか眼鏡めがねのうちにとらへしといふ

をどるむねおさへてカメラむけしといふ鳥まなぶ人のこゝろやいかに

庭めぐりやうやく見出いでしやつがしら写すまもなくとびたちしといふ

四月五日まで四日ありて、五日目より見えずなりければ

四日にて見うしなひけむやつがしらいづこの里にとびたちにつむ

ここに目めのゆくかぎりさがせどもつひにみいえずわがやつがしら

いづちにかとび立ちにけむやつがしらつゝがなかれと日々いのりつゝ

みそのにははやぶさもをればいかならむやつがしらのうへをわれは気づかふ

ながるせずときけばきくほどこの庭に四日もゐたりしことのうれしさ

北南いづちいきけむやつがしらこゝろなき人の手になかゝりそ
やつがしらうつしゑに姿のこすのみいづちいにけむ影だにもなし

そのまたの日、岡山の植樹祭に旅立つ

やつがしらこゝろのこして旅立ちぬ姫まつ国に木をうゑむとて

岡山に旅立ちにけりみそのふのやつがしらのうへにこゝろのこして

かへりきて庭を見やりけれど

木々はみな若葉となりてみとほしもきかぬみそのにむなく目をやる
朝なあさなあきらめかねてひとわたり庭を見わたすいかにせしかと
けふもまたすがたもとめて庭をみるしらざりしまではしらぬさびしさ
海こえて満州のあたりにかへりけむつぎの年にはまたかへりこよ
つつがなく旅をへにけむやつがしらまたこむ春をたのしみにまつ
つゝがなくながふるさとにかへりけむまたの春まで羽をやすめて
こむとしも姿を見せよやつがしらおそるることなくこの庭にこよ
日の本にまたままひこよやつがしらのみそのふをわするゝことなく

こむ春はつれだちてこよやつがしら心ゆくまでそのにやどれよ
みいでたる桜のもとに札たてゝひとりしのびぬやつがしらのうへ
紙にゑがきはたまたきぬに染めもしてやつがしらのすがたをのちにつたへむ
目にのこるかげをよすがにやつがしら姿をきぬのすそにかゝまし

昭和四十三年の春のころ

こぞきつるやつがしらのうへを思ひつゝ仰ぐみそらに花吹雪まふ
やつがしら今年もこよといのりつゝながむる庭に花吹雪する

まこと迷鳥にや、くしきこの鳥そののちはおとづれくることなくて月日をふ。さはれをり
につけて、はじめ見出でつるあたりに目をやり、去年のかのめでたきすがた思ひいでては
なつかしむこと、いつしかならひとなむなりぬる。

「聖徳太子の信仰思想と

日本文化創業」の輪読

福岡県立修猷館高校教諭

小柳陽太郎



(宿舍の屋根に掲げられた横断幕)

輪読の意義

黒上正一郎先生について

黒上先生のうた

言葉のもつ重さ

聖徳太子の指導精神

世間虚假唯佛是真

太子の御言葉と論語

「輪読」の意義

お話にはいります前に、「輪読」といふことの意義について簡単にふれておきませう。輪読といふことばは、大学などでもお聞きになることがあります。その場合は皆が輪になって一つの書物を読むといふ程度の軽い意味で使はれてゐるやうです。しかし私たちはこの輪読といふことを、明日行はれることになってをります和歌の創作とともに、学問の一番基本をなす非常に大切なものとして考へてをります。和歌の創作が学問の基礎になるといふことについては、後程またお話があらうかと思ひますが、ここでは輪読のもつ意味あひについて申し上げておきます。

輪読の輪といふ字からは只今申し上げましたやうにお互ひに輪をつくつて一つの書物を読んでいくといふ姿を連想しますし、それはそれでいいのですが、ただ輪といふ言葉にはもつと深い意味があるやうに思はれます。先程「青年研究発表」の中で高岡君が聖徳太子の十七条憲法の中の「共に是れ凡夫のみ」といふお言葉について感想をお述べになりましたが、原文ではそのすぐあとに「相共に賢愚なること、みみかね鐔の端なきが如し」といふ言葉がつづいて出てまゐります。人間はお互ひに賢人もゐるだらうし愚人もゐるだらうが、所詮同列にすぎないので、丁度あのみみかね鐔（耳飾りの輪）に端がないやうに、お互ひに円い輪をなして生きていく以外に道はない

とおっしゃってゐるのです。

私は輪読といふ言葉を考へるときには、いつもこの太子の御言葉が思ひうかべられてくるのですが、このやうに輪といふ言葉には単に輪をなして座るといふだけではなく、一人一人の心そのものが輪になつてつながつていくといふ意味がふくめられてゐるのではないでせうか。お互ひに年齢の差もあるし、男女の別もある。所謂能力の差もあるでせう。しかしそれらすべての差をのりこえた世界を実現しなければ本当の学問は出来ないのではないか、といふよりすぐれた古典に接してゐると、おのづからその差が忘れられて、平等の世界が内心に実現されてゆく、端的に言へば心が一つの輪をつくつてゆくのではなからうか。そのやうに心が整へられてくれば、一人で古典に接してゐたときにはわからなかつたさまざまのものが目に見えてくる。それが輪読といふことの真義であらうかと思ふのです。輪読の輪といふ言葉の中には「凡夫としての痛感」がこもつてゐると言つてもいいでせう。

輪読の「読」については「日本への回帰」(第十一集)にふれておきましたのでお読みになつた方もをられると思ひますが、読むといふのは、歩むが「あよむ」、「あ」は足、足で一つ二つと数へてゆくことが「あよむ」であるやうに、ある一つのリズムの中で、それに合はせながら文章なり歌なりをよみますすめてゆくことだと思ひます。リズムといふのはいのちのもつ一つの調べだと言つてもいい。すなわち、その文章や歌を表現した人のいのちに即して読んでい

く、それが読むといふことの意味であらうと思ふのです。又字は違ひますが和歌をつくるときも「よむ」（詠む）といふ。それは心の中に生れてきた調べに即して、それを言葉に表現することだと言っている。いづれにしても、「よむ」といふことはいのちのリズムに言葉をあはせてゆくといふ意味があるやうです。

今日の昼、夜久先生が御講義の最後に、今上天皇の数々の御歌を心をこめてお読みになりました。そのお声に耳を傾けてゐると何か全身に電流が流れたやうなおもひがいたしましたが、それは歌のよみ方が上手だといふやうなことではなく、その御歌をお詠みになった陛下のお気持をお偲びになる夜久先生の御心の強さから生まれたものでせう。一字一字に渾身のおもひをこめてお読みになる夜久先生の御声を聞きながら、歌や文章を「読む」といふことはかういふことなのかとしみじみ感じました。



輸読といふことはこのやうな意味をもつてゐる、いはばそれは「命に至る道」と言つてもいいので、そのことに気付いていただければ、そのやうな書物の読み方が、例へば大学などでいかになほざりにされてゐるか、そして又、この合宿教室で何故輸読といふことを大切にするかといふこともおわかりいただけるのではないかと思ひます。

黒上正一郎先生について

では聖徳太子の御本にはいっていきませんが、その前にこの御本をお書きになつた黒上正一郎先生について簡単に申し上げておきませう。先生のことについてはこの書物の一番最初の「復刊のことば」の中に詳しい御紹介がございますが、概略を申し上げておきますと、先生は明治三十三年九月二十四日、徳島市の素封家の嫡男として御誕生、徳島商業学校卒業後、阿波銀行に御勤務になります。そのかたはら独学で親鸞、日蓮等の経文を学ばれ、さらに聖徳太子の研究に進んでゆかれます。その後さらに、当時の碩学たる藤原猶雪、三井甲之、井上右近氏らについて学問を深められ大正十五年二十七歳の時には東京大学の文学部教育学教室において聖徳太子についての講義をなさつていらつしやいます。

当時はロシア革命をバックにして共産主義運動が非常な勢ひで蔓延し、知識人の殆んどが左

傾化してゐた時代でした。先生はそのやうな左翼理論の嵐の中で、日本人本来のみずみずしい情感を守るべく、その道のしほりを聖徳太子に仰いで、昭和四年に、第一高等学校に昭信会を東京高等師範学校に信和会をおつくりになつて、心魂を傾けて学生を御指導になられるのですが、その翌年昭和五年、数へ年三十一歳の若きで生涯を閉ぢられたのです。

黒上先生の御研究は、いはゆる学術的な、アカデミックな研究といふのではなく、道を求める激しいおもひと、人と人との心を深く結ぶ友情の中に生み出された御研究なのです。当時共産主義運動が荒れ狂つてゐたと申しましたが、彼らの思想の一番の問題点は、階級的なもの見方によって、人と人の心を断ち切つてしまふところにある。彼らも友情を口にしますが、それは同じ階級の、同志の間だけに許されるものであつて、従つてそれは敵に対する激しい憎しみを前提にはじめて成立するものなのです。黒上先生のこの御本の中では共産主義に対する御批判は直接には出てまゐりませんが、このやうな人と人との心を切断するイデオロギーの暴威に対して、人間本来の情感をいかにして守つていくかといふ激しい祈りがこの御本のいたる所に感ぜられます。かくして先生の生涯をかけられた御仕事は、人と人との心の橋をつなぐこと、そこに蘇るいのちを国民生活の中に大きく拡げてゆくことにあつたと言つていいのです。

黒上先生のうた

さういふおもひをこめて書き残されたのがこの御本なのですが、先生はまた数多くの御歌によつてそのおもひを直接に表現してをられます。すなはち先生の御生涯では太子研究と和歌表現が表裏の関係をなして流れてゐる。さういふ意味で先生のよまれたお歌を少しでも紹介させていただきたいと思ひます。一番最初は、大正九年二十一歳の時、先程申しました井上右近先生、この方は当時京都にお住まいになつてゐらっしゃつたのですが、その井上先生にお書きになつたお手紙の中にある歌です。

手紙のはしに

あひまつりしその日よ空はうすぐもり大比叡がねはほのにけむりし
みことばにつなかりを得て一信海にわれも入らむとおもふよろこび
こののぞみわれはもてりと思ふごとわれ生くらくのこちするかも
あゝ一信海われもつながらむと求むるころそのころにこそわれは生くるか
ありともへどなきかとおもふ悲しみよおなじなげきをおもひたまふらむ

一首目では比叡の山がほのかにけむつてゐたあの日、井上先生にお会ひ出来たといふよろこびが「あひまつりしその日よ」といふ、一、二句の中に重く、深く表現されてゐます。二首目の

「みことば」といふのは太子か親鸞の御言葉でせうか、その御言葉の中に撰取されてゆく先生のおよろこびが、一首全体の中にあふれてゐます。いのちはことばによってつながる。あるひはことばによってつながるときにいのちが生まれると言つてもいい。「みことばにつながりを得て」といふところに非常に具体的な命の流れといふべきものが表現されてゐると思ふ。「一信海」といふのは聖徳太子から親鸞を経て、現代の人々の心にまで広く海のやうにひろがる信の世界、「信」といふのは単に信仰といふだけではなく人生の一番奥深いところにある統一的感情とでもいふべきものでせう。その信といふものをお互ひにわかちあふ世界、それを「一信海」と名づけてをられると思ひますが、その世界につながっていくよろこびをおよみになつてをられるのです。

三首目はこの一信海にはいることが出来るといふおもひをたしかめるごとに、自分はいま生きてゐるといふことをしみじみと思ふといふことでせう。四首目ではそのやうな御気持をさらに動的に意志的によんでをられると思ひます。求めてゆくところの中に、その中にはじめて自分のいのちがある。自分のいのちを感じるといふことでせう。

五首目は一寸難解ですが、一信海につながるよろこびを身にしみて思ふのだが、またそれに雲がかかるやうに、あのおどるやうな気持がうすれる時がある。人間ですから、一つの感情をずっと持続することは出来ないので、喜びと悲しみが、波が寄せてはひくやうに交替する。そ

のあるがままの人間としてのかなしみを先生も味はってゐらっしゃるだらうか。さういふ問ひかけの歌ではないかと思ひます。さう思へばこの五首のお歌は激しく高まるかと思ふとまた沈潜してゆく、そして又燃えひろがってゆくといふ生命の動きさながらに表現されてゐるのがおわかりでせう。実はこの手紙を出されたころ先生は御祖父様をなくされて非常に悲痛なおもひをしてをられた。そのやうな御体験も、この御歌の背景になつてゐると思はれますので、「手紙のはしに」といふ、そのお手紙の中の一節をプリントにしておきました。

「先日祖父を失ひ候ひて、そののち遺骨をもちてひとり墓路を納めにと歩きし時ほどかぎりなきもののひびきの身きたることは無之候ひき」——「かぎりなきもののひびき」といふ言葉の中にこめられた切迫した先生の御氣持が偲ばれます——「しみじみと死の問題につきて思はされ申候。親父、師友みなひとたび別れては再びあひ得ぬこの世のことに悲痛動乱の生を味はされ申候」——この世は限りなく悲痛にして動乱に満ちてゐる。そのすがたが、このやうな痛切な体験によつて、動かすことの出来ぬものとして身に迫ってくる。「それにつけても同信海中につながらせて頂き度念じ候」。

先程申しました一信海につながるよろこびといふその背景に、このやうな御体験があつたことにも心をとめていただきたいと思ふのです。

時間がありませんがもう一つだけ連作のお歌をよんでおきませう。これも同じ年の作です。

櫺紅葉はせ

裏山は櫺紅葉して秋深く病みてひさしき窓にあるかも

今朝の空うらうら晴れて裏山の紅葉さやかに目にうつりくる

いただきしこのすりぶみを病み臥せる小床によみて更ふかしつるかも

ほのぼのとあけわたりくれば裏山に今朝はさやけき鳥の声する

裏山に夕ゐる雲のうすひかりしみじみ秋の思ほゆるかも

この連作は三首目でわかるやうに友を偲ぶ歌です。病の床に刷り文をよみながら遙かに友を偲ばれる心と、秋の気配が淡く感じられる周囲の景色に寄せるおもひと、それが一つに溶けあつてすばらしい世界が表現されてゐます。先生の聖徳太子の御研究がこのやうに深い友情と、一信海につながらうとするはげしい求道のおもひと、そのやうな魂の極度の緊張の中から生まれたといふことを御本の輪読にはいります前に知っていただきたく、一寸時間をとりましたが先生の御歌を紹介させていただいた次第です。

言葉のもつ重さ

では本文にはいっていきませんが、このあと各班で輪読の時間が設けられてゐますので、ここ

ではその輪読個所の中でわかりにくい言葉や問題点を少し御説明申し上げるといふことでとめておきたいと思ひます。ここでとりあげる文章は第二編「聖徳太子の信仰思想と国民精神」の中の一節（一〇三頁）です。

○ 『「世間虚假唯佛是真」とは太子自ら宣らせ給ひしところである。御夫人橘大郎女たちばなのおほいらつめはこの御言葉を以つて太子をその薨後に記念しまつられたのである。太子が我が国未曾有の転機に於いて国民文化の根柢を確立し給ひし其の事業は、雄大なる改革指導の精神に基かねば成就せられざりしところである。当代氏族制度の積弊と対照するのみに於いても、憲法拾七条せいじちうの啓示は正にこの御精神を顕彰して余りあるのである。而も世間虚假と示して罪劫ざいごうの人生を自らの足らぬ姿に窮め、唯、仏の真実を念じ給ひし御心は常に人生永遠の未完成を信知して、自ら国と民とのために無窮の求道努力を相続し給うたのである。』

○ 初めてお読みになる方には非常に難しい文章でせう。私もはじめてこの文章に接した時には本当に難しかった。しかしよく考へてみると、この文章の難しさといふのは、所謂言葉が難し

いといふのとは違ふ。難しい文章なら辞書をひけばわかるかもしれない。しかしこの文章はそれとは違ふ。難しいといふより、正確にいへば一つ一つの言葉が実に重いのです。一つ一つの言葉が少しもゆるがせにできない。そこにはいはば波うつやうな生命そのものが表現されてゐるといつていい。だから私たちはその言葉にふれる時には自分の精神が試されてゐるやうな気持ちになるのです。少しでも精神がひ弱であればこの文は読めないのです。

先程黒上先生の友情の歌を御紹介しましたが、思ふにこの先生の文章の力源はその友情の中にあるのではないか、とすれば、この書物を読んでゆく力もまた、友情の中から湧いてくるのではないでせうか。深い友情に支へられた密度の濃い精神生活があつてはじめてこの文章は読めるのではなからうか。それは私自身長くこの書物にふれてきた体験からはっきりさう言へると思ふのです。

さて最初に書かれてゐる「世間虚假唯佛是真」といふ言葉が残された経緯ですが、実はこの御言葉は太子のお書きになつた十七条憲法や三経義疏の中ではなく、『上宮法王帝説』といふ書物の中に記されてゐるのです。それによれば、太子がおなくなりになつた時、太子の妃の橘大郎女、この方は太子の叔母様で当時天皇の位にあられた推古天皇の御孫様にあたられる方ですが、その御妃が、太子の薨去を非常にお悲しみになつて、「太子は常に『世間は虚假にして、唯佛のみ眞なり』とおっしゃつてゐた。その御言葉をよくよく味はつてみると、きっと太子は今

は天寿国といふあの世にお生れになつてゐらっしゃるに違ひない。だがその天寿国の有様は自分の目で見ることは出来ない。だから願はくはそれを絵に描いて太子が往生してをられるお姿をお偲びしたい」とお祖母さまの推古天皇におっしゃるのです。それで天皇は妃の御氣持を非常にかはいさうだと思つて采女（うねめ）たちに命じて刺繍で天寿国の有様を描くやうにお命じになる。これが天寿国繡張（天寿国曼陀羅）として、その部分が現在も残つてをります。本文に「御夫人橋大郎女は、この御言葉を以つて太子をその薨後に記念しまつられたのである」とあるのはそのことです。「記念する」といふのは「文字に記しとどめて深く太子をお偲びになつた」といふことでせう。

聖徳太子の指導精神

次に「太子が我国未曾有の転機に云々」とありますが、このことについては二頁の四行目の文章を参照して下さい。そこにはかう書かれてゐます。

「我が国民生活は外来文化との接触によつて、前後二回の重大転機に遭遇したのである。さきに東洋文化を受容せし推古朝と、後に西洋文化を輸入せる明治時代とはまさに此の二大転機に外ならぬのである。而も国民はこの重大時機に當つて、かくの如き指導的人格を国民生活の

核心たる皇室に仰ぎまつたのである」

歴史の時代区分といふのは歴史を見ていく一番基本的な姿勢を示すものですが、先生は日本の歴史を、近頃一般に言はれてゐるやうな、古代貴族制社会、封建社会といふ別け方ではなく、東洋文化をうけ入れた推古朝以前が第一期、推古朝以後、西洋文化を輸入した明治時代までが第二期、それ以後が第三期と大まかにわけられるのです。ところがその重大な二つの転機に、われわれ日本人はその指導的人格を、前は聖徳太子、後は明治天皇といふやうにいずれも国民生活の核心である皇室に仰ぐことが出来たことは、日本国民にとってこの上もなく幸せなことであつたとおっしゃるのです。

さて太子はこのやうな「我が国未曾有の転機に於いて国民文化の根柢を確立」されたと述べてあります。この言葉なども班に帰ってゆつくり味はっていただきたいのですが、国民文化とは何か。文化とは何かといふことも考へてみれば実に重大です。文化といふのは最近では文化財などといふ言葉を用ひますが、それは非常に表面的な意味なので、文化とは本質的には人と人の心のつながりだと思ふ、日本文化といふのは日本人の心のつながり方、日本人の心の持ち方だと言つていい。さう考へれば東洋文化がなだれ込んできた時に、日本人の生き方をお示しになつたのが太子であつた。しかもそれは「このやうな生き方をしなさい」と言葉で示されたのではなく、太子御自身の人生によつて、その苦闘の御生涯によつて、日本人の生き方を身を

もつてお教へいただいたことを私達は肝に銘じなければいけないと思ふのです。

「其の事業は雄大なる改革指導の精神に基かねば成就せられざりしところである」——「雄大なる」といふのは単に雄大なといふことではなく、人生の一番深いところ迄見きはめ、その洞察の上に築かれたといふやうな、真実のこもったことばです。次の「改革」といふことばにも注意していただきたいのですが、現在は改革ぐらゐではだめだ、革命が必要だなどといふやうに改革と革命といふ言葉を非常にいい加減に使つてゐる。しかしこの二つは根本的に異つた人生観から生まれた言葉です。すなはち改革といふのは、次の行に書かれてゐる「人生永遠の未完成を信知して」といふ言葉との関連において味はふべきなので、どこ迄行つても完成することのない人生のありのままの姿を見つめながら、一步一步、その誤りを正してゆくといふ、大地に根をおろしたやうな営みに名づけられたものです。これに反して革命は世の間違ひを正すためには、それを根底から崩してやり直さうとすることなので、一見、非常に勇ましいやうですが、実際にはそこに一つの図式が用意され、その図式に従つて複雑微妙な人生を切断しようとする、人生に対する非常に傲慢な、そしてそれを裏返せば非常にひ弱な思想が前提になつてゐるのです。このことは現在の政治思想を見ていく場合にも是非考へていただきたいと思ひます。

世間虚假唯佛是真

それほど「雄大なる改革指導の精神」に基づいて、「国民文化の根柢を確立」なさったけれども、しかも、「世間虚假と示して罪劫の人生を自らの足らはぬ姿に窮め」とつづいていくのですが、最初にも出てまゐりました「世間虚假唯佛是真」といふことばは、ともすれば太子が晩年に政治につかれて仏の世界にはいつてゆかれた、その御気持を表はしたものだとするうけとり方が多いのですが、それは明らかに誤りです。「世間虚假」といふ痛感¹は現実の人生の中でのたゆまぬ努力と苦闘の中にはじめて感じられるものなので、その努力を放棄したところでは、すでに世間虚假といふ言葉は一つ²の概念に化してしまつてゐる。さうなれば、その次につづく「唯佛是真」といふのも亦血の通はない概念としての意味しかもたないことになるのです。しかし太子がお示しになったのは、そのやうな概念の羅列ではなかつた。世間虚假といふ御痛感³があつたればこそ、唯佛是真といふゆるぎない確信⁴につながつてゆく。そこには太子の全生涯のおもひが凝縮されてゐると思ふのです。なほ唯佛是真といふ言葉の中の仏といふのも、それを一般的な仏教といふものに置きかへてしまへば、それこそ、灰色の論理になつてしまふので、我々はそのやうに理解するのではなく、世間虚假といふ痛感の中に味はれた「佛」とは一体何か、それを太子の御体験の中に具体的にお慰びしなければならぬと思ふのです。

（この間のことについては「日本への回帰」（第八集）にも述べてをりますので御参照いただきたいと思ひます。）

太子の御言葉と論語

時間がございませんで次の文の中の問題点についてだけ簡単にふれておきませう。

○

『此に維摩經菩薩行品に「少欲知足にして世法を捨てず」とある語を釈して、

「世法を捨てずとは、言ふところは己れ能くすと雖も、然も世に違して自ら異なること莫れとなり。外の論に言遜したがひ行を危たかくすと云ふはこの謂いひなり」と示されたる御言葉に我等はこの御心に基きし太子一代の行化を偲びまつるのである。』

○

維摩經の經典の「少欲知足にして世法を捨てず」といふ言葉は「菩薩といふものは世俗の欲望を少くし、足るを知るといふ生き方をするのだが、だからと言って現実生活を捨てて省みないといふのではなく、あくまで現実の只中に生きてゆく」といふことでせう。その中の「世法を捨てず」といふ言葉について太子は次のやうに言はれるのです。

「世法を捨てずといふのは、たとへ自分だけがそのことが出来ると言っても、世間の人々のやり方と違ふ道を一人だけ歩むといふやうなことがあってはいけない。常に、人々とともに生きてゆけといふことである。それは外の論（げ）（仏教以外の中国の典籍、ここでは論語をいふのです）に書いてある『言遜したがひ行を危たかくす』——言葉は常に謙虚に、人々にさからふやうなことは言はないけれども、行動だけは正しい道をしつかり歩んでゆく——といふ精神と通じるものだ」といふことです。ここで御注意いただきたいのは、太子が論語の一節を引用してをられる、その引用の仕方なのです。論語には実は、次のやうに書いてあります。

「邦に道有るときは言を危くし行を危くす、邦に道無きときは、行を危くし言遜ふ」

「この世の中に正しい道が行はれてゐる時は自分の思ったこともズバズバ言ふし、正しいと思ふことはどしどし実行に移してゆく、しかし、世の中に道が行はれてゐないときは、行ひだけは正しい道を歩むべきだが、言葉は常につつましく、人にさからはぬやうにせよ」といふことでせう。ところが太子はこの論語を引用されるときに、先づ前半を切り捨ててをられます。思

ふに「邦に道有るとき」といふことは現実の人生では絶対にあり得ぬことでせう。それは次の「邦に道なき時」と反対になつた概念図式にすぎない。そのやうな空疎な言葉はスパツと切りすてておられる。さらに「邦に道なき時」といふ言葉も不必要でせう。邦に道なしといふのが人生の常ではないか。従つてこの部分も引用されてゐない。最後の部分だけが引用されてゐますが、これも又順序が逆になつてゐて「行を危くして言遜ふ」を「言遜ひ行ひを危くす」となつてゐる。それは思ふに、「言遜ひ」といふ言葉に重点をかけられたからではないでせうか。「言遜ふ」といふのを普通の注釈書などでは、「思った通りの言葉で喋つてゐると誤解をうけたり揚げ足をとられたりするから、言葉の上では出来るだけ調子を合せなければならぬ」といふやうにとつてゐるやうですが、そんな意味ではなく、太子はもっと深い人生態度を「言遜ふ」といふ意味にくみとつて、これを前にもつてこられたのではないかと思ふのです。

先程憲法十七条の第十条についてお話しましたが、あの「共に是れ凡夫のみ」といふ御言葉の最後には「我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じく^{おこな}挙へ」と述べてをられます。この「言遜ふ」といふ論語の言葉は「自分だけ体得したといつても表にかかげることなく、苦しいおもひの中で生きてゐる無数の人々とともに生きて行く」といふこの憲法第十条の末尾の言葉とこたましあつてゐるのです。そのやうな人生態度は一言でいへば「他と共なる生」といふことでせう。あるひはそこで太子は「我」といふことにこだはる醜さを擬視してゐらっしゃると言つて

もいい。愚かな我が身は、所詮他とともに生きる以外にはないではないか、その人生痛感が中国の古典一つを引用される時もこのやうな形になって表はれると思ふ。外国文化を摂取するといふことはこのやうなことではなからうかとこの一文を見てもさう思はれてならないのです。時間がなくなりましたのでこれで終わりますが、あとは班に帰って、最初に申し上げたやうに心を輪になす努力の中で、一語一語ことばをかみしめながら読んでいって下さい。

短歌創作について

戸田建設株式会社勤務

青 山 直 幸



(九十九島遠望・1)

はじめに

短歌創作の動機

短歌を作るために

短歌鑑賞

― 防人の歌

― 小泉信吉海軍主計大尉の御遺族の歌

はじめに

皆さん、合宿教室も三日目となり、随分お疲れのことと思ひます。今からの時間は、この合宿で最も楽しい（と言っても良いかと思ひますが）短歌創作の時間です。もともとこの合宿教室に参加された皆さん方の大半は、短歌を創作するのは、初めての経験であると思ひますし、さういふ方にとって短歌創作はおそらく、非常に不安である。或ひは、非常に負担である。といふのが正直な所でせう。確かに自分の思ひを五七五七七といふ形式に整へるといふことは、非常に難しいことです。私自身、学生時代から短歌を創作してきてをりますが、正直な所、未だに短歌を作るといふことになりますと、不安な気持ちにかられます。しかしながら、苦勞して自分の思ひを五七五七七の形式に整へることができた時の喜びは、何にも代へ難いものです。その湧き上ってくるやうな喜びを、皆さん方もこれから実際に短歌を作ってみられれば、きっと味はふことができるでせう。それを楽しみに、是非短歌創作に取り組んでいただきたいと思ひます。

短歌創作の動機

私が、短歌を作ってみようと思ひ立ったのは、高校二年生の時でした。古典の授業で『古事

記』を勉強してゐた時のことです。その時の先生は、昨晚輪読の導入講義をなさった小柳陽太郎先生です。『古事記』上つ巻の須佐の男の命の一節が、教科書に出てをりました。須佐の男の命といふ方は、伊邪那岐の命が、自らの鼻をお洗ひになつた時に、お生まれになつた神様で、ご気性が非常に荒々しく、かの天照大神とは、姉弟の関係になられるのですが、その天照大神が、手を焼かれる程に荒々しい、いはゆる荒ぶる神だつたのです。しかし、かうした荒ぶる神も本当は実に優しい心を持ち、正義心に富んだ神様でありました。この須佐の男の命が、出雲の国に行かれた時のことです。有名な八俣大蛇退治の話が出て参ります。足名椎、手名椎といふ老夫婦の娘櫛名田比売を食べに来た八俣の大蛇といふ恐しい怪物を十拳の剣を抜いて成敗されるといふ話です。須佐の男の命は、その怪物を成敗されると、ひと目で好きになられた櫛名田比売を約束通り自分の妻として迎へたいといふ旨をその老夫婦におっしゃるわけです。そこで次の様な文章が出て参ります。

「かれここを以ちてその速須佐の男の命、宮造るべき地を出雲の国に求ぎたまひき。ここに須賀の地に到りまして詔りたまはく、『吾此地に来て、我が御心清浄し』と詔りたまひて、其地に宮作りてましましき。かれ其地をば今に須賀といふ。この大神、初め須賀の宮作らしし時に、其地より雲立ち騰りき。ここに御歌よみしたまひき。その歌

八雲立つ出雲八重垣妻隠みに八重垣作るその八重垣を」(『古事記』上つ巻)



この歌の意味は、次の様になります。

「むら雲の立ち上る出雲の国の八重になった雲よ、その雲の様な八重の垣を妻とこもるために作る、ああ、その八重の垣よ」

この歌は、いはば、新家庭を築いていく時の喜びを歌った歌と言へるでせう。この歌は、古事記、日本書紀によりますと、日本最古の短歌といふことになってをります。おそらく出雲地方では須佐の男の命の伝説と共に、この御歌は、多くの人々の口から口へと愛誦されていったのではないかと思はれます。私はこれを読んだ時に、何か心の中に暖かいものが、湧き上ってくる様な感動を覚えました。私は、それまで卒直に申しまして、短歌について、何か古くさいものだと思ひこみ、余り興味がありませんでした。しかし、この歌を読んだ時に短歌が本当に身近なものに感じられたのです。そして、その時からすっかり短歌に魅かれてし

まひました。自分でも短歌を作ってみようといふ気持ちがむらむらと湧いてきたのです。その後には、短歌を出来るだけ読まう、そして短歌を自分でも作ってみようと努力致しました。短歌を味はひ、或ひは、短歌を作るといふことが、私の心の張りになった様な気が致します。

高校卒業の後、私は、一年浪人して大学に進みました。昭和四十三年のことです。折しも、あの東大紛争が燃え上った時でした。私が入学すると間もなく、医学部を筆頭に各学部は次々にストライキに突入していきました。教養学部でも、毎日の様にクラス討論が行はれました。私は、クラス討論で、理由が何であれ、学生がストライキを行使するといふことに対して、どうしても納得がいかない、授業を行ひたいといふ先生方の気持ち、或ひは授業を受けたいといふ学生の気持ちを蹂躪してまで自分達の主張を通さうとする全共闘の人達のやり方には、どうしても我慢がならないといふ意見を述べました。しかし、私の意見は、ヘルメットをかぶった活動家達の「ナンセンス」といふ言葉によって、あつといふ間にかき消されてしまひました。自分の主張に反対する者には耳を貸さうともせず、更にはゲバ棒を持ってその意見を封じ込めようとする傲慢なやり方に私は激しい憤りを覚えました。秋以降は、この合宿教室で知り合った友達と共に、彼らの思想、行動は間違つてゐるといふことを訴へて、ストライキ等の暴力的行為によらない本当の大学改革といふものを目指さうではないかといふ運動を始めたのです。私の訴へを理解してくれる友を一人でも多く得ようと懸命にがんばりましたけれども、思ふ様

に同志は増へず、意気消沈することたびたびでした。そんな時、沈んだ私の心を奮ひ起こしてくれたのが、次の歌でした。

志貴皇子の權の御歌

石走る垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりけるかも (『万葉集』卷八)

「石走る」といふのは、「垂水」にかかる枕詞です。「垂水」は、滝といふ意味です。つまり滝のほとりに生えてゐる蕨が、若い芽を一齐にふき出してくる春になつたんだなあといふ歌です。歌全体に湧き上つて来る様な春の喜びが感じられます。この歌を声に出して読むと、私の心は、霧が晴れた様にさはやかになり、体の中に力がみなぎってくるのを覚えたものでした。流れる様な言葉の調べが私の心を清々しくしてくれるのでせうか。私は、今でも疲れた時とか、或ひは心が沈んだ時には、この歌を口ずさむことにしてゐます。

さて、私達は、日々何気なく言葉を使つてゐますが、同じ言葉でもその言葉に心がこもつてゐるか、又、その言葉が大切に使はれてゐるかによつて、人に与へる印象は、全く異つてきます。活動家達の空虚なアジ演説の横溢する学園の中で、沈痛な気分にひたりきつてゐた私の心を揺り動かしてくれたこの短歌を味はふたびに、私は言葉の持つ不思議な力を感じずにはゐら

れないのです。なぜこの歌を読むときういふ力が湧いてくるのでせうか。歌全体に溢れ流れてゐる志貴皇子のさはやかな御心、御人格に触れたからではないか。さう思ひ当った時に、短歌を作ることの意義を更につかんだやうな気が致しました。短歌は、単に慰みや趣味として作られるものではありません。短歌には、作者の心、人格、生き方が、如実に現はれてきます。自己の思ひを三十一文字の中に適確に表現していかうとする行為の中に、自己の心の錬磨が行はれる。私達の祖先が短歌を作ることを「敷島の道」と言ったのも、なるほどと思はれました。かうして、私は、事に触れ、折に触れ、短歌を作ることを心がけてきたわけです。

短歌を作るために

私自身の体験を述べてきましたが、皆さんの中には、未だ短歌に親しめない、短歌を作るなどといふことは、自分には、不向きだと思つてゐる方も、ゐらっしゃるでせう。そこでもう少し、短歌についての話を進めることにしませう。

貨車

構内に貨車おすひとびともろ声に押せども押せど車うごかず

ひく浪のよせくるちから呼吸あはせ押すよをのこはおのれを信じて

夕やけの空にまくろきすす貨車のやゝにゆるぎづいや押せ人々

ぬかに立つ汗もな拭きそこのはづみはづさばまたもとまらむ車

音たててゆるぎづ車はしりつつ押しゆく人らちかどきたかし

ほのぐらき倉庫に車おししづめ人わかれゆきぬさむきちまたを

夜に入れば汽車もかよはぬ田舎まち音なき空にしげき星影

（川出麻須美『天地四方』）

日常生活の中で、ふと目に止った出来事でも、このやうに素晴らしい短歌に詠み上げることができるとは、この歌は、川出麻須美といふ歌人の作です。川出麻須美といふ方は、名前こそ知られてゐませんが、明治・大正・昭和三代にわたる大歌人、近代の人麿ともいふべき天才歌人です。川出さんは、「一生に一巻の歌集を残せばよい」と言はれ、その通り『天地四方』（昭和二十八年十月「昭和篇」、昭和三十二年一月「明治篇」）といふささやかな歌集一巻を残して世を去られたのです。この貨車の歌は、その『天地四方』の中にある歌です。歌の題は、美しい景色や情愛の世界ばかりだと思つてゐたら、とんでもない間違いです。うっかりしてゐると、見のがしてしまひがちな、些細な物事の中に、心動かされるのですが、潜んでゐるのです。日常

生活の中でも、周囲の物事を注意深く見てゐますと、思ひもかけぬことに、心動かされること
が、あるものです。さうした体験をそのまま平易な言葉で具体的に表現してみる。それが、三
十一文字として整へられれば自然に歌になるといふのが本当でせう。さうした体験を積む中
で、私達の物に感ずる心は、深められていくのだと思ひます。貨車を押す人々を川出さんは、
全身全霊を集中させて見守つてゐることが、皆さんにもおわかりになるでせう。自分の人生経
験の中で心が動いたことは、すべて卒直に言葉に表現すれば、歌のしらべに整へられていくは
づだと言つても過言ではありません。

それでは、なんでも歌になるかといへば、決してさうではありません。前にも申し上げたや
うに、歌は切実な感動を詠むべきものであつて、理屈を詠んでも歌にはなりません。明治三十
年代から、脊椎カリエスといふ不治の病床にあつて、短歌革新の大事業を起こし、写実主義的
近代短歌の基礎を確立した正岡子規は、特に古今集以来歌人の評価基準とまでなつてゐる技
巧、理屈偏重の傾向を痛烈に批判しました。

『再び歌よみに与ふる書』といふ一文の中に次のやうな一節があります。「先づ古今集とい
ふ書を取りて第一枚を開くと直ちに『去年とやいはん、今年とやいはん』といふ歌が出て来る。
実に呆れ返つた無趣味の歌に有之候。日本人と外国人との合の子を日本人とや申さん外国人と
や申さんとしやれたると同じ事にてしやれにもならぬつまらぬ歌に候。」（正岡子規『再び歌よみ

に与ふる書』)

この中に出てくる歌は、在原元方もとかたの作で、次のやうな歌です。

年の内に春はきにけりひととせをこそとやいはむことしとやいはむ

(年の内に立春の日が来てしまったよ。今日からは、この一年のことを去年といったらよからうか、今年といったらよからうか)

専門歌人と言はれる人々の中には、この種の歌は多いのです。かうしたものは、一つのなぞかけとしては、面白いかもしれないが、これを読んで深く感動する等といふことは、まづ考へられない。正岡子規は、かうした歌は、"しゃれにもならぬつまらぬ歌"だと断定したのです。そして、「理屈」を排し、「写真」といふ、"実地体験に基づく作歌"といふ理念を打ちたて、それを正に実行していった人でした。『墨汁一滴』といふ随筆の中に「しひて筆をとりて」といふ歌十首が載つてゐます。これは、病気がいよいよ重く、死を自覚した子規が、自分の目に映る自然を身に沁みて、"美しい"と感ずるといふ切実な体験を詠んだものです。この歌は、明治三十四年五月四日に作られました。その翌年の初秋、九月十九日に、子規は、三十六才といふ若さでこの世を去ることになります。

しひて筆をとりて

佐保神の別れかなしも来ん春にふたたび逢はんわれならなくに

いちはずの花咲きいでゝ我目には今年ばかりの春行かんとす

病む我をなくさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも

世の中は常なきものと我愛づる山吹の花散りにけるかも

別れ行く春のかたみと藤波の花の長ふさ絵にかけるかも

夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちがてぬ我いのちかも

くれなるの薔薇さうびふふみぬ我病いやまさるべき時のしるしに

薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽摘みし昔おもほゆ

若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり

いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

心弱くところそ人の見ららめ

(正岡子規『墨汁一滴』)

子規は、「今」の時が過ぎては帰らぬものと自覚したればこそ、「今」を懸命に生きむとし、「今」に全力を集中したのでした。子規のいふ「写生」とは、対象に全力を集中すること、

さらには、対象と一つになることゝなりました。

さて、私どもは、現代短歌は、連作短歌中心であると考へてゐます。しかし、連作短歌形式といふのは、明治になつて正岡子規が、意識的に取り上げたものなのです。複雑な思ひを一首の歌の中に詠んでしまはうとすると抽象的、概括的なものが出来てしまひます。ところが、歌といふものは、先程も申しましたやうに、「理屈」つまり、頭の中で考へたものではないのですから、それを避ける為に、一つの体験を何首にも分け、できるだけ具体的に詠むわけです。複雑な経験でも、何首かに分けた方が、それ程苦勞しないで良い歌が作れることになります。先程ご紹介しました子規の十首を、ただ頭の中で整理して要約し、言葉を無理に並べて五七五七七の形にしてみると、（全く短歌とは申せませんが）

き庭辺に生へる草花ながめつつ秋に逝くべき吾を思ひぬ

といふやうなことになるませうか。なんのことかよくわからない抽象的なものになってしまひます。できるだけ具体的に正確に焦点を絞つて、一つの歌に整へていくのが、歌を作る場合の基本と言へませう。

以上歌を作る際の基本的な心構へについて、述べて参りましたが、皆さんの中には、未だ歌を作ることに對して、自分にはとてもそんな能力はないと勝手に思ひ込んでゐる人が、をられ

るかも知れません。そこで次の歌をご紹介致しませう。昨年の夏の合宿教室に参加した学生の歌です。

第二十班 鹿児島大学 一年 篠田哲秀
壇上にのぼりし友はひたすらにあつき思ひを語り続ける

ひたすらに己が思ひを語りる友のみ声のかすれがちなる

第二十七班 岡山理科大 二年 村上朋三郎
ぼつぼつと出てくる言葉とだえても心こもれり友の言葉は

自信なけれど思ふがままに語らむと言ひ出づる我に寄する友の眼

二人とも、この合宿で短歌を創作することを覚えた、作歌経験も浅い方達です。ですが、平易な言葉で、卒直に自分の思ひを表現してをり、良い歌だと思ひます。このやうに短歌は、日本人なら誰しもが心を集中すれば、創作できる力を持つてゐるのです。学識も乏しく、専門歌人でも無い名もなき民の歌が、多くの人の心を打つことも、往々にしてあるのです。

短歌鑑賞

そこで、専門歌人ではなく、作歌経験も数少ないと思はれる人々が、残した素晴らしい歌のいくつかを皆様と共に、味はってみたいと思ひます。最初は、防人の歌です、防人は、大宝令制定後、九州地方を防備する為、諸国の「正丁」から選ばれた三年交替の兵士で、東国の兵士が多く採用されました。天平勝宝七年（七五五）二月、防人の交替期にあたって東国の諸国から召集された防人たちの詠んだ歌が、兵部少輔（軍事担当官）大伴家持によって集められ、万葉集最終の巻に収められてゐます。

作者不詳

防人に立ちし朝けの金門出に手放れ惜しみ泣きし兎らはも

（防人として出立する早朝の門出に、握りしめた私の手から放れていくのを惜しんで、泣

いた吾妹子よ。）

恋人と断腸の思ひで別れていった兵士の心が思はれます。

丈部造人麻呂

大君の命かしこみ磯に触り海原渡る父母を置きて

（天皇陛下の御命令を畏れ多く戴いて、磯伝ひに海を渡って、任地へ赴いていくこ

とよ。なつかしい父や母を郷里に残して。

この歌を読みますと、父や母を置いて海原を渡っていく悲しみを胸の中に湛へつつも、国防の任に決然として赴いていく兵士の気持ち、ひたひたと伝って参ります。

うどべのうしまろ
有度部牛麻呂

水鳥の発ちの急ぎに父母に物言ず来にて今ぞ悔しき

(水鳥が立つやうにあはただしく出発したので、父や母に、ろくにあいさつもせずに来てしまった。木当に残念だ。)

防人の任を命ぜられて以来、とるものもとりあへず、任地へ凜然として赴いていった兵士がふと残してきた父母のことを思ひ出し、切々たる思ひにかられる姿が、目に浮かぶ様です。

はせつかべのいなまる
丈部稲麻呂

父母が頭かき撫で幸く在れていひし言葉ぜ忘れかねつる

(父や母が、自分の頭を撫でながら、どうか無事にいつてあらしやいと云った言葉が、忘れられない。)

「言葉ぜ忘れかねつる」といふ荒削りの表現の中に、この兵士—おそらく年の端もゆかぬ少年であつたらうと思はれますが—の心情が卒直に現はれてゐると思ひます。

はせつかべのとり
文部 鳥

道のべの荊うまらの末うれにはほ豆のからまる君をはかれか行かむ

（道のほとりに生えてゐる野いばらにからまりつく豆の様に、私にからまりついてくる君を置いて、防人として任地に赴くことよ。）

「からまる君」といふ大胆な表現の中に、切々たる情愛がこめられてゐると思ひます。からまりつく妻か恋人をひしと抱きしめて、別れを惜しむ兵士の姿が偲ばれます。

をさだのとねりおおしま
他田舎人大島

唐衣裾からくろもすそに取りつき泣く子らを置きてぞ来のや母ははなしにして

（「唐衣」は裾の枕詞。裾に取りついて泣く子供達を、母親もゐないのに置いてきたことよ。）

母のゐない子供達と別れなければならぬ悲しみに耐へがたく絶叫する一人の兵士の声が聞

こえてくるやうです。

兵士達は、これらの歌に見るやうに、別離の悲しみを胸に湛へつつも、祖国防衛といふ任に使命感を燃やし、決然として、九州の任地に赴いていったのでした。日本が、大陸諸国に併合されずに、独立、平和を保ち得た蔭には、かかる名も無い防人達の祖国防衛への使命感と、悲痛なる肉親や恋人との惜別があつたことを胸に留めておいて戴きたいと思ひます。

○
それでは、最後に、小泉信吉海軍主計大尉御遺族の歌を味はつてみたいと思ひます。小泉信吉といふ方は、有名な小泉信三経済学博士の御長男であられ、先の大東亜戦争で南太平洋において戦死なされた方です。以下に御紹介する歌は、いづれも、小泉信三著『海軍主計大尉小泉信吉』といふ文芸春秋社から出版された書物に掲載されてゐるものです。この小泉信吉といふ方は、非常に実直、誠実で、書物をよく読まれる人でした。一方、小さい頃から、海軍に憧れてをられ、喜々として海軍の任に就かれたやうです。ご家族の方々に寄せられた手紙を読んで、重苦しいところが微塵も感じられず、南太平洋で大きな魚を釣ったとか、その魚を料理して食べたとか、実に快活な文章です。かうした明るい、好ましい青年が、昭和十七年十月二十二日朝南太平洋上にて戦死され、若い命を断たれることになるのです。戦死の報を受けとられた時の御家族の方々の悲しみは、いかばかりであつたらうかと思ひます。最初の歌は、信吉さ

んの御母堂、富子さんの歌です。

大洋の藻屑もくづとなるも悔なしといひて征ゆきぬ子はおほみいくさ大御戦へ

この歌の背景には、次の様な話があるのです。ある朝、富子さんが、信吉さんを玄関先に送られ、種々の思ひを込めて「大変ね。」と声をかけられたのです。信吉さんは、靴のひもを結びながら、小さな声で「これで太平洋の藻屑となれば本望だよ。」とひとり言の様につぶやいたのです。信吉さんは「国のために死ぬ」などと大言壮語する人ではありませんでした。しかし、心秘かに覚悟をしてをられたやうです。富子さんは、この言葉を大切に胸の中にしまつてをかれたのです。そして、戦死の報が着いた時、咄嗟に、この言葉を思ひ出されたに違ひないので。母と子の心に通ひ合ふ微妙の情愛が、切々と溢れ出てゐる歌だと思ひます。

出征に当って品川駅の改札口で

御戦みいくさに出で征く我子送る夜の月影さえて道を照らせり

出征の今宵寒けき月明りマントの影を追ひて歩みつ

手を挙げて直ちに後ろ見せ行きし我が子のすがた目にのこり居り

自分の息子の出征に当り、駅まで送ってこられた富士さんが、改札口を入れていく息子の後姿を万感の思ひで見守つてをられる情景が、ありありと浮かんできます。

それでは、次に信吉さんの伯母さんの歌です。この方は信吉さんを乳呑子の頃から、自分の子供の様に可愛いがつてをられたさうです。

呼びつづけ今日も暮らしぬ美しき紅葉を見ても青空を見ても

何かにつけて、信吉さんの事を思ひ出されたのでせう。そのたびに、「信吉君、信吉君」と現身うつそみに呼びかけるかのやうに信吉さんの名前を呼ばれたのだと思ひます。最後は、実の妹、加代子さんの歌です。

戦死の報もちてひた泣く生きの世にかゝる歎きのありとは思はず

我兄よまこと南の海の底に水漬づくかばねとなり給ひにし

「生きの世」といふのは、この現実の世といふ意味です。戦死の電報を手に握つたまま、ただ泣きくずれる加代子さんの痛ましい姿が偲ばれます。二首目は、心の中での絶叫をそのまま歌にしたものだと思ひます。

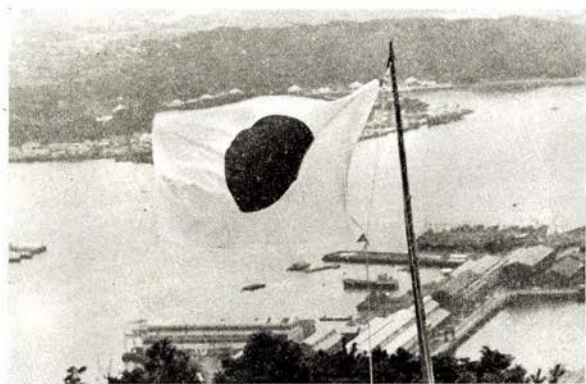
先程の防人の歌、それに小泉信吉主計大尉のご遺族の歌、これらの歌の作者は、いづれも、専門歌人ではありません。短歌についての修養もそれ程積んでゐないかも知れない。しかし、このやうに素晴らしい歌が残されてゐるのです。かうした名もない国民の痛切な歌の数々は、日本が亡びない限り、国民の心の中にきつと生き続けることと私は信じます。

これからの時間、短歌を作ることになるわけですが、どうか、素直な気持になつて取り組んで戴きたいと思ひます。

時世の行き詰りと大学生の自覚

国民文化研究会理事長

小田村 寅二郎



(港を背景にはためく日の丸)

はじめに

人生の眞実

日本人としての自覚と誇り

世界と日本

戦争と平和

「日本国憲法」について

「道」の思想

はじめに

お話にはいります前に、これまで四日間皆さんとご一緒に合宿教室をすごさせていただきましたが、その間に感じましたことについて少しふれておきたいと思ひます。

その一つはこれまで多くの先生方がここに登壇なさいましたが、なかでも、木内、村松、長谷川の三先生をこの合宿教室にお招きしてお話いただいた、その意味について申し上げておきたいのです。この御三人は現在の日本ではまさしく最高の方々だと思ふ。最高といふのは諸外国の人々と融通無碍につきあふことの出来る卓抜した語学力をもってをられるといふこと、そしてその語学力をもって世界各国の文化、政治、思想といふものに極めて濃厚な接触を重ねて来られてゐるといふこと、しかもさういう前提に立ちながら日本人としての深い見識と自覚のもとに、かかる諸外国の文化を豊かに摂取しながら、実に見事な人生の歩みを続けてをられるといふことにおいて最高の方々だと思ふのです。さういふ御三方の先生方が精一杯の心をこめてお話いただいた、その御講義の御言葉のはしほしに、外国文化を摂取してゆくといふことはどういふことなのか、どうすればそれが可能なのかといふ今日の日本が背負つてゐる最も根本的な問題がにじみ出てゐる筈です。外来文化を摂取するといふこと、それはこの合宿で聖徳太子の御本などを通じて学んでゐる学問の一番大切な根底をなすものだと思ひますが、そのすば

らしい実例としてこれ以上の方々はをられない、さういふ方々のお話をおうかがひ出来たといふことを是非とも心の奥深くにとどめて山を下りていただきたいと思ひます。

人生の眞実

次に、お話し申し上げておきたいことは、昨夜の慰霊祭で皆さまとご一緒に歌った「海ゆかば」の歌詞について気づいたことなのです。気づいたとは言っても、私は若いころからこの歌を聞いたり歌ったりしたことは何百回あるか知れない。それが、昨晚ハッと気づいたといふことは私が気づいたといふより、皆さんが醸し出して下さった非常に厳粛な雰囲気のおかげで気づかされたわけで、本当は皆様の御協力によって、気づかせていただいたと言ふ方が正確でせう。「海ゆかば」という歌は

海ゆかば水漬くかばね

山ゆかば草むすかばね

大君の辺にこそ死なめ

かへりみはせじ

といふ歌詞です。これは天平の昔、聖武天皇が東大寺大仏をおつくりになつたのですが、そ



の為に必要な金が不足したため、大仏造営の事業が非常に困難になって、天皇が大変お困りになってをられた、その時（天平感宝元年―七四九―）陸奥国から黄金が出たので、天皇は非常にお喜びになって詔書をお出しになったのですが、その詔書にこたへて大伴家持が長歌をよんでをります。その長歌の中で家持は大伴家に伝はった「言立て」（言葉に現はした誓ひ）を書き留めてゐる。その「言立て」がこの「海行かば」の歌詞なのです。従つてこの言葉は万葉集よりずっと前、聖徳太子の頃よりもっと前かもしれない。さういふ古い時代から歌ひつがれ、言ひつがれてきた言葉であるといふことも、心にとどめておいて下さい。意味は「海をゆくならば水につかつてしまふ屍、山を行くならば草が生える屍、さういふ屍になつても自分は天皇様のおそばで死んでゆきたい」とつづいていくのです。そこまでは一人の人間の決意なのですから非常によくわかる。ところがその次につづく

最後の言葉「かへりみはせじ」といふ言葉に私はハッと心をうたれたのです。それはどういふことかといへば「さういふ気持をもった自分ではあるが、そのことを実行しようとする矢張り、家のこと妻と子のことが心から離れないし、自分の人生に未練も出てくる。その中に引き込まれていく心はどうにも打ち消しやうがない。だからここで立派な決意を宣言しても、それだけではどうしても嘘になるし、その通りに出来る自信がもてない。」——「かへりみはせじ」といふ言葉は、さういふ自分の心を正直にみつめて、「かへりみはすまい、私の心に引きづりこまれるやうにはすまい」といふ気持を卒直に吐露したのではないか。それが、最後の一句の意味するものではないか。私はそのことに気づいたのです。

私たちの祖先は「大君の辺にこそ死なぬ」といふ高らかな決意の宣言でとどまらなかつた。さういふことは自信満々でできることではない、努力を積み重ね／＼してこそ出来るのだといふ人間の真実が「かへりみはせじ」といふ言葉にこめられてゐるのではないか。さう思へば上代のわれわれの祖先は何と人間生活、社会生活を営む上で正直であつたか、そしてまた何と正確な言葉でそれを表現したか、私は本当に感にうたれたおもひがいたしました。

さう考へてきますと昨日青山さんも紹介されましたが、防人の歌の中に次のやうな有名な歌がある。

けふよりは願かへりみなくて大君の酬しとの御楯と出で立つわれは

醜といふのは、自分が慎んで卑下した気持を込めてゐると思ひますが、本当は勇猛といふ意味、従つて今日からは顧ることなく大君の為勇猛なものゝとして祖国防衛の任務に出で立とうといふことですが、ここでも一番最初に「顧みなくて」といふ言葉が使はれてゐる。自分の決意は定まつてゐるが、後を振りむきたいといふ気持は否定出来ない。その否定出来ない「私」の情といふものを正確に言葉に表現し得た人々の気持が偲ばれてならないのです。彼らばかりと「私」の世界にひき込まれさうになる心をお互ひに励まし合ひながら戦の場に出て行つたにちがいない。さう思ふと昨日の慰霊祭でお祭りした先祖の方々は、単に自分の生命を惜しげもなく捨てていった人達ではなかつた。そんな人は一人もゐなかつたはずだといふことに気づかれて参ります。一般に国の為に命を捨てた人は何の未練もなく死んで行つた、素晴らしい人だといふやうにいふ人が多いのですが、それは物事を概括し、概念化し、美化しすぎたことであつて、現実にその人達は断ち難い思ひをふりすてて国の為に死んで行かれたはずだし、その押へ切れないものを押へようとして動く心のプロセスに心をとどめなければ、戦死者のことを思ふと言つても空々しいことになつてしまふおそれが多いと思ふのです。

日本人としての自覚と誇り

ではレジメの方に戻って下さい。私たちは自分の意識の中に自分が日本人だといふことを強くお互ひに理解しようといふことで合宿をやつてをりますが、たしかに私たちの血統を辿つてゆけば、我々は純粹な大和民族かどうかわからない。先祖は大陸の方からやってきたかもわからない。ではどこからが日本人かと言へば、それは言語および言語によるその人の情操生活の内容の範圍が、日本語及び日本人の情操の中に溶け込んだところから日本人だといへるのでせう。われわれの祖先は、北から来たか南から来たかといふ議論は沢山あります。しかしさういうこととわれわれが日本人としての自覚と誇りをもつこととは何の関係もないといふことはつきり知ることが大切です。

たしかに三千年前にはどこから流れついた者の方が多かったかもしれない。しかし日本語といふすばらしい言葉がこの日本列島の中でしか使はれなかつたといふことは歴史的な事実でせう。この世界中ただ一つしかない日本語といふ言葉を話し合ふ仲間にはいること、そこから日本人がはじまるのです。

バイブルに「はじめにロゴスありき」といふ言葉が出てきますが、ロゴスは言葉のこと、従つてはじめに言葉ありき、——そこから人間の精神生活ははじまるのです。日本語を語りかはずところに日本人が生まれるといふこと、それを確認することが、日本民族が南方系か北方系かといふやうな議論をするより遙かに大事だといふことに気づいていただきたいのです。

だから日本人の祖先は誰かと聞かれれば私はそれは日本人だとはっきり答へる。同じく人間の祖先はと聞かれれば人間だと答へる。人類の祖先は猿だとかアミーバーだとかいふ人もありませうが、それとこれとは問題は別です。日本人の祖先は日本人、人間の祖先は人間、はっきりさう言ひ切れる、それが学問ではないか。すなわち文化科学、精神科学から言へばさうなるのです。しかし自然科学の方から人間を生物学的に見れば人間の祖先はアミーバーであるといふことが正しいかもしれない。その二つははっきり違ふ。ところがその違ひがいい加減に扱はれて、生物学的な見方が平気で精神科学、社会科学の中にはいりこんできて、そのけじめが乱れてしまつてゐる。それが今の学問の世界ではないでせうか。その間違ひを正すことから本当の学問が開始されなければならぬのです。

世界と日本

さて次に「ものはよく考へねば」といふ問題にはいります。現代の日本ではよく考へないままでものを判断を決めてしまつてゐることがあまりにも多いと思ふ。例へば世界人類の為に尽すことと日本といふ祖国に尽すことに矛盾を感じる。戦争と平和との間にも矛盾を感じる。さらに親と子の間でも、子どももまた立派な一人の人格だから、すべて親の意見には従へないと

いふことと、子どもが自分に寄せる親の愛情にどう応へればいいかといふことの間をどのやうに調整したらいいかわからない場合がある。教師が教へ子に接する場合にも、子供たちの中に秘められた無限の可能性を育ててやることと、厳しく教育し躡けてゆくこととの間に両立したい問題を感ずることがある。あるひは、先程ふれました合理的精神の上に成り立ってゐる科学と、合理的には理解もできないし、説明もできない人間の心とをどのやうに関連させていくかといふ問題もある。それらすべての問題について、それら二つのことは、両立させたいがどうにもならない。今の世の中はさういふ矛盾を無数にかかへてゐるといふ。たしかに合理的精神から見ればさういふことになるでせう。そこで考へがストップしてゐるやうです。だがよく考へてみればそれらは実は、形式論理では矛盾してゐても実質においては何ら矛盾してゐないことばかりなのです。

例へば世界と日本といふことを考へてみると、世界は大きく日本は小さい。その小さいことを大事にするのは、大きなものを粗末に扱ふことだからこれは好ましくないといふ。合理的な思想から言へばさういふことになります。ところが日本といふ国は具体的には何かといふことを考へてくると話がちがってくる。言葉の一つにしなごら意志の疎通をはかることによつて、人間の共同生活を出来るだけ幸福にしようといふ願望をもつてお互ひに生きていくのが国家といふものでせう。その中で特に言葉の一つにするといふことは国を成り立たせる最も基本的な

条件なのです。それが国家といふものの姿である以上、国をなくして世界を一つにしきへすれば戦争がなくなり、世界は平和になるといふが、その時世界中の言葉はどうなるのか、それがバラバラのまま世界が一つになれるはずはない、それは一寸考へれば誰にもわかることです。ところが合理的思考に馴れてしまった人々にはその簡単なことがわからなくなってしまうのである。

言葉の問題の外にも、この地球上には白色人種と有色人種がある。それはいかんともするとの出来ない事実です。嫌ひなものを好きになれと言ってもだめです。勿論嫌ひなものは好きになるやうに努力しなければいけない。しかしさういふ理論と、どうしても好きになれないといふことは別です。それは仕方のないといふやうなことではなく、人間の社会に避けることの出来ない厳然たる事実ではないでせうか。さういふとげとげしい感情を緩和するやうに努力しなければいけないことは勿論です。しかし緩和することと、全く同じに考へるやうになるといふこととの間には隔りがある。そのはっきりした事実から目をそらせてはいけなと思ふ。オリンピッククを見てゐるとアメリカでは随分黒人が活躍してゐる。そこでは白人と黒人が一つに溶けあつてゐる様に見える。しかし白人はなかなか黒人と結婚しようとはしない。さういふきびしい事実は事実として認めなければいけません。

さういふ事実をふまへて見てゆくと世界を単一国家にしきへすれば平和が来るといふことが

いかにつまらぬ妄想であるか多言の要はないでせう。結局世界をよくするためには、自分の民族が正しく生きてゆく以外に道はない。それ以外に世界に貢献する道はないことがわかってくるでせう。そのことがわかってくれば日本がこのままでいいかといふ問題は全部自分自身の問題に還つて来るはずです。だから世界が大きく日本は小さい、その小さな日本のことを言ふのは右翼で、偏狭な国家主義だといふ迷妄から脱出出来たときに、人間は逆に広々とした世界に出ることが出来るのです。さういふことに気付いた時に、今迄見向きもしなかつた日本の長い伝統、或ひはすばらしい日本の古典にも心が届くやうになる。そこには大きな精神世界の拡がり生まれ、今まで閉ぢこめられてゐる世界から、のびのびと空を飛ぶ鳥の如き心が蘇へてくるのではないでせうか。

この合宿で申し上げてゐることを右翼的だとか国家主義だとかいふ印象でうけとめてゐる方がをられるかもしれないけれど、いま申しあげてゐることは果して一つのイデオロギーとして皆さんにお伝へしてゐることとせうか。あるひは皆さんを洗脳するやうな意味で申し上げてゐることとせうか。皆さんが大学に帰つていかれると、この合宿で問題にしたことを、偏狭だ、右翼だといふ先生方や友達が沢山ゐるはずで、それが大学の現状なのですが、果してさうなのでせうか。私たちが偏狭なのか、合理的思考に閉ぢこめられて、世界より日本が小さいと考へる方が偏狭なのか、このところを本当に考へていただきたいのです。

戦争と平和

戦争と平和についても同じなので、その二つは果して矛盾するものでせうか。しかし私たちが体験でも相手と仲良くするためには、相手に勝手なことを言わせておけば仲良く出来ない。そのためには喧嘩することだってある。そのあとで本当に仲良くなるといふやうなことは一杯あるわけです。だから戦争が好きだといふのは困るけれど、平和を維持する場合も、自国の核心となるものが犯されようとする場合は敢へて戦ふといふ心を忘れてはいけない。さういふ心をなくしたらわれわれは平和を維持することは出来ないのです。

防衛戦争はいいが、侵略戦争はいけないといふ。しかしこれも、事実どこで線を引くか議論紛々となるのが歴史の常です。だから結局「後世の史家に待つ」といふことになる。それが世の常なのです。或ひは他国を占領する場合でも、昔のやうに直接にすべての権力を奪ふ場合もあるし、傀儡政権を立てていかにも独立を尊重するやうなふりをしてその実、完全に相手を支配する場合もある。後者の場合巧妙に事が運ばれると、もう人々はその実体をつかむことができなくなる。たとへばヴェトナムでは前の政府はアメリカの後援をうけてゐたけれど、現在は自主独立の国だといふ。とんでもない話で、今は共産圏の大国の支配下に新しい国が構成されてゐるにすぎない。完全独立などといふのは全くの言語魔術にすぎないのです。

ともあれ戦争と平和はたしかに概念としては対立してゐるけれど、現実には国を護る意識に立ってみれば、日本の国の平和を存続するためには、これに外から制約が加へられる場合には、あるひは加へられる可能性が事前に発見される場合には、いち早くこれと戦ふ用意を整へておくことが絶対に必要な条件でせう。我々の国の平和を壊さうとする事態が発生した場合には命を賭けてこれを阻止しなければならぬ。それがどうして平和の精神に反するのでせうか。反するどころか、平和を守るためにはあへて戦ふといふことこそ、平和の精神ではないでせうか。それをしも戦争肯定の思想だといふやうなうけとり方をするなら又何をか言はんやです。それは戦争と平和と矛盾するものと頭からきめてかかる形式論理が生み出した妄想にすぎないのです。

以下親と子の問題、教育の問題などにふれる時間はありませんが、先程申ししたことはすべて論理の上からみれば一見矛盾したやうに見えますが、具体的な人生の事実をふまへて考へてみると、それらにはすべて何の矛盾もないといふことに気づかれるはずです。概念にとらはれてゐるために、現実が見えなくなつてゐるのです。そして矛盾だ矛盾だと騒いでゐるにすぎないのです。

次に憲法の問題についてふれておきませう。私は国民文化研究会で出しております月刊「国民同胞」の八月号の巻頭言に次のやうなことを書きました。すなはち、現在国内ではロッキード事件の究明に夜も日もない有様だが、マスコミをはじめ野党議員がこれほど情熱を燃してゐる理由が「政、官界の腐敗の是正とその浄化」といふ政治の根本にむけての正義感から発してゐるならば、ロッキード事件よりはるかに重大な問題、例へば教育界における秩序の紊乱、大学の中で公然と天皇廃止、消滅論がまかり通つてゐる様な秩序の乱れ、さういふものをどうして人人々はとりあげようとしなのか、さらに「政、官界の浄化」といくら言つても基本が、「憲法」に拠つてゐる以上、その「憲法」が日本国民の自由意志のもとで作られたものでないといふ明々白々たる事実に対して一体どう考へるのか。そのことをこそ第一にとり上げるべきではないかといふことを指摘しておきました。その中でとりあげてをりますが、現憲法の成立の事情をお互ひに知りたいと思つて、只今お話いただいた長谷川先生がお出しになつてをられる「世界と日本」の七月十二日号に元法制局長であった井手成三氏がお書きになつた「占領下新憲法制定経過の真相」といふのをゼロックスにしてお手もとにさし上げておきました。これは全国民、とくに若い学生諸君の必読の一文だと思ふのですが、その中で特に御紹介しておきたいのは、当時GHQとの交渉担当者白洲次郎氏の昭和二十一年三月七日付手記の末尾に記された言葉です。

詳しい経過は省きますが、これ以上の抵抗ないし反撃をすればより極端な事態を招来するおそれがある、といふことで遂に押し付けを呑むことになったものですが、その時の気持を白洲氏は次のやうに書き留めてをられます。

「斯ノ敗戦最露出ノ憲法案ハ生ル。『今に見ている』ト云フ氣持押へ切レズ。ヒソカニ涙ス。」

この無念のおもひをすべての国民が自分のものとして本当に考へること、そのことを除いて日本の政治をよくする道は、絶対にあり得ないことに思ひをいたさなければならぬと思ひます。

「道」の思想

次にお手もとにさしあげたもう一つの資料「進めこの道」といふ歌について申し上げておきます。この歌の作詞者は三井甲之といふ方、合宿の講義でもしばしばとりあげられた先生ですが、正岡子規系の歌人、思想家として大正から昭和にかけて活躍された方です。作曲家は信時潔といふ方、この方は先程お話した「海行かば」の作曲家として著名な方です。歌詞は次の通りです。

(一)

進めこの道 一向ひたすらに

真直ぐに進め 神代より

定まれる道 斯道このみちを

さまざまぐるもの 何ありと

本末もとすえ切りて 打ち払ひ

戦ひたたかひ 進むべし

(二)

神の開きし 斯道このみちを

み民は進む 大君の

任まけのまにまに み民らは

身を顧みず 永久の

祖国のいのちと もろともに

戦ひたたかひ 進むべし

意味は大体おわかりになると思いますが、(一)の五行目「本末切りて」といふのは草木の根元

の方も先の方も一緒に、鋭い鎌でパッパッと切ってゆくやうにといふことです。なほ(一)の二行目の「神代」の「神」も、(二)の初めの「神の開きし」の「神」も同じですが、これらの神は全知全能の意味の神ではない、われらの遠い祖先たちが、といふ意味に考へていいと思ひます。なくなつた人達は皆お社に神様として祭られてゐるのが日本人の生活伝統ですから、大昔のわれわれの祖先たちが聞いてきた「斯道」といふ意味です。

「大君の任のまにまに」といふのは、大君が任じ給ふご命令のままにといふこと、「身を顧みず」といふ言葉の中にこめられてゐるおもひについては、先程申し上げた通り。最後の「戦ひたたかひ」といふ言葉の繰り返しですが、誤れるものが広がつてゐる、はびこつてゐるものを除去していくためには、容易ならざる勇氣と決断と実行力を必要とするといふ意見なので、現在一般に使はれてゐるやうな「闘争」といふやうな感覚で読んではいけないと思ひます。

さて私がこの歌をなぜとりあげたかといふと「進めこの道」の「みち」についてお話ししておきたかつたからです。「みち」といふのは非常に古い時代から日本にあつた言葉ですが「み」は美称、「ち」は血、乳に通ふ意味がある言葉でせう。血も乳も人間にとつて欠かすことの出来ないものです。草原を対角線に歩いてゆけば、そこに自ら道が出来る。歩かなくなるとまた草が生えて道でなくなる。歩けば道になり、歩かなければ道でなくなるもの。それが道です。それから道は誰でもその上を歩けるものです。誰は歩いて誰は歩けないといふことはない、しか

も道はどんなところにも出来る。どんな崖のふちにも険阻な山にも道は出来る、さういふのが道なのです。

明治天皇の御製は約十万首残されてゐるうち約一万首近くが発表されてゐますが、その中で「道」といふ言葉が実に多く使はれてゐます。例へば「月の夜道」「岡越えの道」「雪の中道」「旅路」「山路」「波路」「学びの道」「分け登る道」「夜渡る道」「男の道」「男女の道」「思ひ入りたる道」「正しき道」「危ふしと思ふ道」「親に仕へる道」など、この外にも実に多く道といふ字が使はれてゐる。さらに短歌のことを「しきしまの道」と呼ぶことはこの合宿で皆さんよくおききになったところですよ。この「しきしまの道」といふのも明治天皇の御製の中に数多くよまれてゐます。「しきしま」とは日本のこと、すべての日本人が古来歩いてきた道、われわれ日本人はそれを離れては生きていけないもの、それが、「しきしまの道」なのです。

われわれは道徳や倫理を大切にします。人間はかくあれかしといふことを考へながら、人間を向上させてゆく、それはそれでいいのですが、あまりにもその行き着く先のイメージをはっきり出して、辿りつけないことがわかつてゐるのに、その結論に重点を置いて人生を語り、政治を語るために、現実を少しでもよくしようとする一番大切なことの方がおろそかになつてはゐるのか。そのことに気づいていけば、道というものはそんな立派なものではなく、誰でも歩ける

もの、どんなところにも出来るものなので、それを大切にしてきた日本人がいかにすぐれたセンスをもちあはせてきたかがわかっていただけははずです。それに比べれば、理念的なイメージによって構想された政治体制論が、一見すばらしいもののやうに見えながら、その実に低いレベルのものであるかおわかりいただけの思ひます。この「みち」を重視する思想と、体制を変へれば世の中がよくなるといふ思想とのちがひに心をとめて下さい。体制さへかへればという考へ方は、先の、世界と日本との話と同じなのです。一寸見たところはいかによきさうですが、具体的に考へてゆけばそれがいかに他愛ないことなのかすぐわかってくる。たとへかりに日本に共産主義革命が実現したとしても、たしかにその一瞬だけは平等であり得るかもしれない。しかしその次の瞬間から能力のある者となし者、働く者と怠ける者との差が歴然としてきて、単なる平等の原理などではどうにもならない事態が発生して収拾がつかなくなるのは目に見えてゐる。人種の問題でも言語の問題でも体制理論ではどうにもならない。平等といふ理念は正しいかもしれない。しかしそれが体制の上に実現出来るなどといふことは嘘八百も甚しい。さうであればこそ、共産革命が実現した国々では、その次の時点から厖大な人が殺されてゐるではないか。しかも何の心のいたみもなく。すなはち平等といふ目標に一刻も早く辿り着くことが正義である以上、その障害になる者は平気で殺されることになるのです。かういふ感覚は生きとし生ける者に心を寄せて来たやうな日本人の感覚とは全く異質なのです。こ

のやうに平等とか平和とかいふスローガンを立てて、それに従はないものを次々に消してゆくといふ思想より、日本を守るために戦ひ、倒れ、さうして大君の辺に死んで行つた人が遙かに平和精神に徹してゐたと私は思ふ。

もの見方、考へ方についていろいろ申しましたが、觀念にふりまはされたり、言語の魔術におちいることなく、事実を事実のままに見てゆけば、そこに一般に言はれてゐることの間違ひが一杯見つかつてくるはずです。その間違ひやつまらない考へを排除した後、これは本当かも知れないということがいくつか残るはずです。それを元にしてお互ひに勉強を重ねていけば世の中はきつとよくなる、私はさう思ひます。

(亜細亜大学教授)



講

義

「脱ケインズ経済学」の建設

——「脱ケインズ経済学」とはどのやうなものか——



世界経済調査会理事長

木内信胤

一、「大政変」のさなかにある日本

二、世界の舞台

三、南アジアの研究

四、「脱ケインズ経済学」の建設

一、「大政変」のさなかにある日本

△週刊新潮の記事▽

本論にはいります前に、七月十五日付の「週刊新潮」に私の記事が出ましたので、その説明をちよつとしておきます。この記事のきっかけは、内外ニュース社のタブロイド版の週刊紙「世界と日本」七月五日付に、私が「自民党はどこまで乱れるか」といふ題で、田中前総理は国会議員を辞めて、しばらく政界から退かなければ、彼のためにも悪いし、自民党もうまくいかないだらうから、是非さうして欲しいと書きました。それを週刊新潮の人が見てこれを論文に書いてくれと頼みに来たのです。そして話してゐるうちに田中氏に手紙を書かうといふことになった。それが記事として出たのです。日本ではかういふ場合、手紙を書くなどといふことは非常に重く考へるのですが、アメリカなどでは普通のことなのです。手紙に書く内容は「国会議員を即時辞職しなさい。そして年内の総選挙には出馬しないことを宣言しなさい。その次の総選挙までの間、政治から離れて静かにものを考へ、それで大いに悟りを開き、今度はじめてわかった」かう言つて出てくれば政界復帰を認めてもいい」といふことでした。私は以前、彼が総理の職を辞める時に、三ヶ月でもいいから禅寺へ入つて座禅を組むがいい。そして私は大いに変わりましたと言つて出てくれば、政界にゐられるだらうと言つたのですが、それと

同じ発想ですね。さてこれをどうやってやらうかと思つてゐたのですが、田中さんは逮捕されてしまったので、国会議員を辞めるどころではなくなつてしまひました。

△今後の政局の進展▽

三木さんはいつとは言へないけれど、必らず総理の座を追はれ、総選挙はおほむね福田さんのもとで行はれるだらうと私は五月の半ばから言つてゐる。三木さんが自ら辞職を申し出れば激しい場面はないが、しかしかうなつたら頑張るんじゃないかな。いずれにしても三木さんは脱党するのが日本の為には一番いいことだと私は思ひます。自民党を出るとすれば、その行先は松前重義といふ東海大の学長さんがやつてゐる「日本の将来を考へる会」といふことになるでせう。この会は社会党の江田さんと、民社の佐々木良作さんと公明の矢野さん、その三人が大所です。彼らは単に政策を語り合ふ会と言つてゐますが、いずれ新党を結成することになるでせうね。ここで大事な点は、以上の三人が代弁する党は、そのどれをみても、いはゆる体制内の党だといふ点です。社会党はこれまで、体制を毀さうといふ連中と、さうでないのが、内輪もめしながら存在して来た。しかし今度右派が左派と分離して新しい党に合流するとすれば、社会党左派と共産党とが体制外の党として残るわけです。もつとも共産党は今しきりに体制内であることをブリテンドしてゐますね。あれは本音かもしれませぬ。彼等にも、もう体制

外では駄目だとわかってきたのだとすれば、それはマルキシズムの放棄です。放棄せざるを得ないのが客観的情勢ですから、はじめはごまかすつもりでやってゐたのが、そのうちに何となくさうなってしまうふことになっていくのではないでせうか。ついでに共産党といふ名前を止めたらどうだ、どこが共産党なのだ、といって追求してゆけば、最後にはこの名前も放棄するやうになるかもしれない。もしさうなれば全く訳のわからないものになるから立ち行かない。かうして体制外の党が一つなくなることになるでせう。社会党左派は共産党よりもっと純粋なマルキシズムで体制外の考へ方ですが、向坂さんや大内さんなどだんだん年をとってゆくと、そのうちにこの派も自然消滅になるでせう。さういふことになるのを私は必然だと思ふし希望してもゐます。もし三木さんが自民党を追はれ、松前さんの仲間に合流するやうなことになるれば、それは当然の帰結であつて結構なことだと思ひます。三木さんが辞めて福田さんが総理に指名される。私に言はせればそれは日本の新出発といふことになるのです。

だがそれでは三木さんが可哀さうだと思ふ方が多いのじゃないですか。つまり世の中では椎名さんが三木を引きおろすと言ひ出した時に、あれは何だ、田中隠しだ、ロッキード隠しだと非難した。細川隆元みたいな人も、椎名さんに対して随分ひどいことを言った。なぜこんなことを私がこゝで言ふかといふと、皆さんに政治に対する正しい感触を持って戴きたいし、ジャーナリズムがいかに世の中をミスリードするかをこの機会に知って欲しいからです。最初に三

木さんを選定したのは椎名さんですね。大平さんが、この際は仕方がないといって福田さんを推挙しさへすれば、円満にいったのですが、それができなくてどこまでも公選で争ふことになったら、自民党はめちゃくちゃになる。椎名さんは思案に余って、いはゆる「神に祈る気持」で決めた奇想天外のチョイスが三木さんであった訳です。その当時三木さんは、それを「青天の霹靂」だと言って驚いたのです。その「青天の霹靂」といった気持をまだ覚えてゐてくれればいいのですが、今では彼は自分が偉いから総理をやっているやうな顔をしてゐます。しかし私も当時は、三木さんに自民党の改革を期待する気分であつたのです。椎名さんも初めはさういふ希望であつたのでせうが、三ヶ月も経ったら、とんでもない人間を総理にしてしまったと気がついた。これでは自民党も、日本国もめちゃくちゃになる、と彼は気がついたのでした。そのあとといよいよみ腰をあげて、三木おろしの実際行動に入ったのが昨年の十二月です。これはロッキード事件を日本人が知る二ヶ月も前です。三木では到底駄目だから止めさせなければいけない、それは自分の責任だ、と考へて手を着けようとしたときに、ロッキードが出たのです。そしたら、三木おろしは田中をかばふ為に椎名さんが起した運動だ、といふことにされてしまつた。自分をやめさせようとするのはロッキードかくしだといふことで、三木さんは防戦したわけです。それが非常に成功したかの如くに見えてきたのですが、皆さんには、その間の掛け引きのうまさ、といったことを知って戴くよりも、椎名さんがいふやうに本当に三木さんでは

だめなのか、その基礎的な判断はどうなのかを考へて
いただきたいのです。

△三木総理の欠陥▽

私は三木さんは確かにいけないと思ふ。簡単に申しますと、その理由の第一は、三木さんはマスコミを即ち国民と思つてゐる点です。平たく言へば今度の記者会見でどのやうにやったら自分を格好よく見せることができるか。それが彼の中心的考慮ですね。彼はそれが政治だと思つてゐる。マスコミの操縦がうまければそれで国民のサポートが得られる。マスコミ即ち国民だと彼は思つてゐるからです。これまでここでも何回か申して来たのですが、マスコミに表はれる日本人は本当の日本人ではない、それは上つ面の日本人なのだ。表層と深層とを分けて考へれば、マスコミに出てくるのは表層の日本人なのです。ところが、その奥に



眼に見えない深層の日本人がゐて、これが本当の日本人なのです。すなはち表層の日本を見て、これではいけないと心に思ひ、胸を痛めてゐる深層の日本人がいっぱいゐる。その人達が胸を痛めれば、いつかはそれが熟してきて世の中を直す行動が出てくる、その動きが一番大切なのです。

例へば公害ひとつとってみても表層だけ見てゐては何ひとつわからないので、これではだめだと思ふ人の力がどう動いてくるかが問題です。瀬戸内海も随分きれいになりましたね。一旦大自然を汚しはしましたが、いまはどんどん良くなりつつあります。これは日本人が心の中でこれではいけないと思つたからです。そこを見なけりや世の中を見てゐるとは言へない、といふのが私の社会観ですが、さういふことが全然お判りにならないのが三木さんで、マスコミが即ち国民だから、ここで評判がよけりや世論我にあり、とかう彼は見るわけです。さういふ浅薄な人が総理の地位にゐるのではダメぢやないですか。

第二点は彼が野党寄りだといふことです。私は今から十五年ぐらゐる前に、彼のオフィスをあるグループで尋ねたことがある。そこで彼が話してくれたことは、投票がだんだん保守政権から離れていき、傾向線を描いてみると、何年か先には逆転する、と言ふのです。彼は今もさう信じてゐるやうです。だから彼にしてみれば野党に寄つてゆくのは当り前なのです。だが私から言へば先程も申しましたやうに、これから先社会主義理念は世の中から退潮していくので

す。社会主義理念でいいものは、これまでにみんな実現してしまつたのです。今言はれてゐるのは行き過ぎの社会主義理念です。即ち完全雇用であり、福祉国家、国民皆保険、老人は国家がみてくれる。かういつた国家の福祉介人ですが、今も社会主義の人達はまだそれをいいことだと思つてゐるし、マスコミもそれを謳歌してゐるのです。まだね。だがこれはもうやめるべきです。こんなことをやつてゐれば、世の中は目茶苦茶になつてしまふ。このやうな行きすぎの社会主義理念といふものは全部ご破算にしなければいけない。さういふことが全然お判りにならないのが三木さんなのです。十年前に思つたのなら無理もないが、まださう思つてゐるのはとんでもない。古い古い観念の人だ、つまり浅薄だといふことです。マスコミを世の中だと思つてゐればさうなります。これが第二の悪い点。その三木さんの悪さは、独禁法で表はれ、国鉄の長期ストで表はれた。この間の国会末期の会期切れの時にもいよいよまづいことになりさうになつたが、自民党の心ある人達が何とか彼の口を封じ、行動を縛つたから、どうにか事なきを得たといふのが現在の状況なのです。特にはっきりしたのは国鉄の長期ストの時です。三木さんが何か総評側に言葉を与へさうで危なくて仕様がなかったので、何とかして彼の口を封じ、そのお蔭で国鉄スト問題は、音もなく消えたでせう。むかう側の完全敗北です。かういふことから椎名さんならずとも、これじゃ困ると思ふのが当り前です。

もう一つ悪いのはロッキードを自己の延命に使はうとしてゐることです。ロッキードを徹底

的に究明して田中をたたいてしまふのが、自民党を自分の党にする方法だと考へてゐる。ロッキードを引きのばしていつて、九月に臨時国会を開く。さうすれば財政特例法その他、是非早く通さなければ国政の遂行が出来ないやうなことだけは、野党も賛成するでせうから通すにちがいない。通しておいて解散をすれば、三木総理の手による解散ですから、結果如何にかかはらず自民党は自分のものになる。それを彼は夢みてゐるのです。

かういふ党首のもとでは自民党は壊滅のほかはない。壊滅の直前には乱れますから、もし彼が強ければ自民党は分裂です。しかし今日の形勢でみればそれほど強くはないから、彼は追いつ出されるといふことで始末がつくでせう。

△世界はもうじき驚くだらう▽

昨年は私はこの会で、「日本は何といふことなしにインフレも不況も離脱した。そのことに世界は驚きの眼を見張るだらう」とお話ししました。いま読み返してみますと、この話は著しく早かったです。まだ世界は驚いてくれてない。日本人すら迷ひの中にあつて、俺の国は驚くほどすばらしいのだといふ自覚を持つ方はまだないのです。ところが今度の政変が、今私が申したやうになると、これでびっくりするのです。外国では三木は非常な英雄ださうです。田中が捕まったのが、三木の大勝利だと考へてゐる。ところが、それが向うからみればわけもな

く引き下されてしまふ。それで世界中がおどろくはずです。

そこで今度の選挙ですが、選挙では福田さんは、どういふ政治をするかを、政治姿勢、政治への態度といふスタイルで表現してほしいと思ふ。政策では駄目なのです。

その「政治姿勢」とは、第一にマスコミに迎合しない。国民に阿ねることもしない。それでは投票が集まらないから選挙に負ける、といふのなら、潔く負けませう、とかう言つてほしい。そこまで徹底すれば投票は翕然きゆうぜんと集まるのです。私はさうなること殆ど九〇パーセント確実と思つてゐますし、さうならしめるのが私達言論人の仕事です。

インフレがなくなり、大変な不況になる筈の日本が、存外けろりとしてゐる、政治の面では田中が引つ込み、三木が出て、田中が逮捕され、その三木が引きおろされて、全くスタイルの違ふ選挙が今度は出て来た。保守政権の議員さんの数は減らないどころじゃない、増えた。これだけ並んで世界が驚かないはずはないのです。

（その後の形勢は、ここに書いたやうには行きませんでした。そのわけを、どこがどう違つてゐたかを、じっくりと考へて下さることが、政治への理解を大いに授けることだと思ひます。一月十六日附記）

二、世界の舞台

△天安門事件によって示された中国内部の状況▽

中国内部の状況はひどいものです。毛沢東はいよいよ身体が駄目で、周恩来系統の実権派と、永久革命をやればいいと思つてゐる文革派との争ひが行はれてゐますが、結局は実権派が勝つて行くのでせう。「天安門事件」ではなぜにああいふ大群集が集まつたのか。十三時間手がつけられなかつた。誰が何を怒つてああいふ謀反めいたことをやつたのかわからない。誰がやらしめたのかもわからない。その結果は、鄧小平の失脚となつた。その後の中国の状況はひどいものです。あの中国の毛沢東政権といふ組織は、あと三年、五年で壊滅する、共産党政権でなくなるといふのが私の予言です。あとはどうなるのかといふことを、日本人はもっと真剣に考へる必要がある。とにかく日本にとっておっかない政権が失くなる、共産主義でなくなることは確実なのですから。それが天安門事件以後の中国です。

△ソ連の不気味な意図▽

ソ連はひとり軍備拡張をやつてをり、核戦力においてもアメリカを凌駕したといはれる。ベトナムが収つたら、カムラン湾を借りるだらうとも思はれてゐる。中共が乱れたら兵力を用ゐないで親ソ政権をうち立てるべくうまくやるかもしれない。だが一番こはいいことはソ連が親ソ的な政権を満州地域に置いて軍備を充実させ、それを独立国として押へていきさうだといふこと

です。ソ連の意図は不気味です。

じゃ非常に恐いかといふとさうでもない。私が思ふのは、ソ連もご多分に洩れず共産主義です。すから、万事万端うまくいかないのです。主として経済です。経済能力が良くないから国力の低下が起きてゐます。農作物は大不作ですね。アメリカはいまはソ連が欲しいといふだけ売ってやつてゐるが、穀物がアメリカの戦略物資となつてゐるので、ソ連は余り大きな顔もできないのです。この間、やうやくヨーロッパの「共産党会議」が行はれましたが、あれも決してソ連の思ふ通りのものでなかつた。各国の共産党はばらばらになるといふ形勢です。ソ連の意図は不気味ですが、**実力の方は**どうやらおかしといふことになつて来ましたので、恐はがるばかりが能ではないのです。

△後進諸国が集団暴力的になる危険▽

後進諸国は食糧会議とか人口会議、アネクタッド即ち後進国開発会議などで、飛んでもない無茶なことを言ひ出すので国際会議が成り立たなくなつてゐる。会つて相談するのはいいが、実行出来るやうに決議をすることはこれからはできないでせうね。これは国連を改組すべしといふ主張にもつながります。国連は実際無能です。終戦直後はちよつとよかったが、今は大したものじゃない。

ところがここでもう一つ新しいことが起きた。南ア共和国で黒人が暴れだしてゐるのです。実は南アの前にローデシアといふ国に、黒人がたくさん入って増えて来た。この国は白人が作った国で気候もいいすばらしい国でした。ところが白人の下にゐるのは何だ、人種差別だ、といふことになった。ローデシアの白人政府の方では、能力の差別はしてゐるが人種差別はしてゐないといふのだが、そんなことは耳に入れずにギアアギアやる。あそこの白人はすでに故郷がなく、逃げ場がないので意を決してゐます。どこまでも武力で戦ふつもりですからだんだん衝突がひどくなつてくる。結局は多勢に無勢で白人が皆殺しになるかもしれない。さうなると世界の人種問題、南北問題は、後進国と先進国との大喧嘩といふものになるかもしれない。だからあそこで、皆殺し的な事件が起るのは非常に恐いのです。それがローデシアで起るかと思つて心配してゐたら、南アの方で起つてゐるのですが、お隣りですから危いですね。

△共産主義そのものにも「異変」といふべきものが起つて来た▽

先ほど申した日本の共産党の動き、或ひは世界共産党会議の動きや、ソ連の中のソルジェニツイン、サハロフなどの動き、中国の毛沢東レジームがなくなるといふやうな動きを見てゆくと、今後共産党陣営といふものは全く意外なことになるやうです。だが私から見れば実は意外ではない。マルキシズムは出るべくして出たものですが、その中に内在する不合理性によつ

て、あのイズムは必ず退潮してゆくのです。何が不合理かといったらその筆頭は唯物史観でせうね。人間を動物と考へてゐる。人間の精神性を認めない所が一番いけない。さういふ間違つた原理ですからいつかは失くなります。以上いくつかのことを一括して「文明の転機」と考へることも可能でせう。

三、南アジアの研究

この九月に「世界経済調査会」から「南アジアの研究」といふ本が出ますので注目して欲しいと思ひます。私は世界経済調査会をお預りして二十年になりますが、そこで取り上げた大事なテーマとして、世界の貿易は如何やうに為されてゐるか、といふ研究があります。もう一つのテーマは、当時二十年前に考へてみて、新しく出て来た後進国、あれは一体何か、どうなるのだ、といふことでした。この方が難かしい。貿易の方は余り気にはならないが、後進国は非常に気になる。その中でインドが一番難かしく、どうしても知らないわけに行かない。しかしなかなか手がつかないでゐたところに、中村元といふ先生がインドを知りたければ歴史を勉強すればいいと言はれた。

インドの歴史は、有史以前をナンバーワンとすると現在がナンバー十二ださうです。つまり

十二段階に分かれてゐる。日本の場合には歴史は一つのもの、一つの植物が育つてゐるやうな形で発展してきてゐる。インドの場合には前とまるで変つたやうになつたことが何遍もある。両者には大變な違ひがあるのですが、とにかく歴史を知らないといふインドはわからないのです。今のインドはネールが非常に民主的な西欧型の人で、いはゆる民主主義をやつてゐたのですが、その娘さんのいまのインディラ・ガンジー総理は選挙違反をやつて訴へられ有罪になつた。もしたら急に人をふんじばつて独裁政権になつてしまつた。つまりネールとは全く違ふのです。

このあとでお話する「脱ケインズ経済学」のパンフレットには次のやうにも書いてあります。「いま私の心に一種の蟠りわたかまのやうになつて、それをどう説明していいか、少なからず困惑してゐることがひとつあります。それはインド人は、いまも絶対に『輪廻りんわてんしやう転生』を信じてゐる」といふことです。その彼等の生活は実にじめです。ところがそれと対置すべきものとして、西欧流の文明諸国における『人間性の崩壊現象』と目すべきものを、いま我々は眼の前にみてゐるわけです。一体この二つの事實は、どう解釈したらいいのでせうか。私は、前世・後世はないと決めてかかるのも非科学的だ」といふ論者ですから、右の問題にも当然そのアンクルから取組むこととなりますが、余り遠くない機会に、何やら胸のすくやうな解答が与へられるのではないか、といふ予感を持つてゐる次第です。」

この文章は実は今年の五月「経済論壇」といふ雑誌に書いたものです。これをうけて今度の

「南アジアの研究」にかなり胸のすく答を私は出してゐます。中村元さんのおかげで歴史の勉強を少しやりましたが、これを「第二部歴史」と名付け、「第一部緒言」「第二部歴史」「第三部現状」といふ構成にして「現状」には政治と経済について書きました。インドでは経済五ヶ年計画を何回かやってゐるが、要するにうまくいってゐない、といふことが書いてあります。政治の方はもっとひどく、インドには政党が無数にある。わけのわからない政党ががちやがちやあってゐる、その政党のことだけが書いてある。インドの政情を説明するといつても到底煩に堪へない。ところがこのやうに政党がどうだといふことだけに限定して書いておけば、それがシンボルとなる。その政党がかうだといふことを知っただけで、インドといふものがわかつてくる。何から何まで知らなければわからないのだったら、諦らめた方がいい。何かをひよつとつかまへられたら、そしてこっちがしっかりしてさへるれば、それでわかるのです。

この「南アジアの研究」といふのが私の最近の仕事ですが、私にとってひどく大事なもので、ちよつと御紹介しておきます。

四、「脱ケインズ経済学」の建設

△私の動機▽

では昨日からお配りしてゐた『脱ケインズ経済学の建設』といふパンフレットについてお話をいたしませう。これが今日の主題です。

これを書き始めた動機は「ダイヤモンド社といふのが『プレジデント』といふ雑誌を出してゐますが、昨年の秋にそこから『かうすれば日本は良くなる』といふ私の本を出してくれたのです。その中でインフレ問題について、日本でもアメリカでもケインズ経済学でものを考へてゐるからインフレになるのだといふことを書きました。またケインズ経済学の方々には、インフレを止める方法がおわかりにならない。それは経済学が病気になつてゐるからだといふ言ふわけです。

私がこの思想をもつたのはかなり古い。現代の経済学は総じてケインズ経済学と言はれまゝす。ケインズが悪いかどうかは別として、とにかくケインズ経済学ではインフレは解けないし、インフレが起るのもケインズ経済学のためなのです。

そこで私はケインズ経済学に代るべきものはどういふものか、といふことを今年になつて「経済論壇」に執筆したわけです。まだハッキリどういふものかわかつたわけではありませんが、心のなかにあるぼやとしたものを、探り出すつもりになれば書けるし、書かなければいけない。さう思つて書き出したわけです。初めタイトルは「脱ケインズ経済学とはどういふものか」とした。その時は一回のつもりだったが、それはもっと敷衍すべきだと考へて五回書いた。

たのがこのパンフレットです。

言ふべきことは殆ど第一章に入つてゐますが、第一章だけでわからなければ二章以下五章までを読んで戴ければわかるであらう、とかういふ構成です。今はケインズ経済学の世の中だと
言はれてゐるので、ケインズその人には聊か気の毒だが、多少ジャーナリスティックな意味も
持たせたくて、題は「脱ケインズ経済学」とつけました。ではパンフレットを読みながらご説
明いたしませう。

△現代の経済学はなぜ病氣なのか▽

これがおわかりになると大体全部わかるのです。パンフレットには「現代の経済学が病氣で
あるのはケインズ以前に始まったもつと深い原因に基くものだと思ふ。その病根の故にこそ今
日、ケインズ経済学の弊害は既に明白であるに拘はらず、未だに「脱ケインズ経済学」が出て
来ないのだ」といつてゐますが、「もつと深い病根」とは、「人間社会を研究対象とする学問の
メトードが、自然科学に押されて自然科学のその如くになつてゐる」ことだと指摘致しまし
た。自然科学は現代文明の華であり、その担ひ手でありますが、その特徴は凡てを「実証によつ
て考へるといふこと」で、実証がないとものが言へないのです。その上また学問のスタイルが極
度に分業的です。自然科学ならばそれで結構、さうでなければならぬのですが、研究の対象

が人間社会である場合には、実証がなければ、ものは考へない、ものは言はない、といふのは話になりません。人間社会においては、多くのことは「直観」によつてのみ理解される。

たとへば、いま日本は不況を忘れたやうになってゐる。その実証は探せばあるでせう。あなたはいまどのくらゐ不況だと思つてゐますか」といって多勢に聞いてゆけば、実証は得られます。しかしそんなものを得てから、なるほど聞いてみたら不況はみんな覚えてゐない。いつのまにか忘れた気分になってゐる、だから不況は忘れられた。と、これでは仕様がなくて、不況は忘れたのだといふことを、ばんといきなり思ひつかなければ駄目です。思ひついてそれはなぜだらうと考へてみたらなるほどかういふわけか。実証を求めるまでもない、とかういふ格好になるのが本当です。全ての認識といふものはさういふものなのです。今の自然科学的なメトードに慣れた人は非常に困る、さういふふうになれない。だからものがわからないのだ、と私は言つてゐるのです。

△治療の原点はどこに在るか▽

その第一は、分業体制をはずすことです。「私は経済学者だから、政治のことは知りません」、「私は金融の専門家ですから貿易のことは知りません」といふ。さういふ言ひ方はいかにも日本人らしくて、謙遜でいいやうな顔をしてゐるが、実は自分はその面では大變に偉い

だと得意になってゐる場合が多いのです。だがそれではいけないので自分は専門家だと言はな
いで欲しい。「専門知識はすべて全体を見失はない人に托してのみ役に立つ」、このことを忘れ
てはいけない。ですから自分で全体を見渡す自信のない人は、見渡すことのできる人の配下に
つくべきなのです。専門家であることは、実は情無いくことで、人に使はれなければ役に立たな
い人間であることを意味してゐるのです。専門家を駄目とは言ひませんが、専門家といふこと
は決して自慢にはならないのです。

それでは全体を見渡すとはどういふことかといふと、そのサンプルは私みたいなのがさうで
す。私の経歴を言へばおわかりになるのですが、私は長いことさうせざるを得なかつたので
す。昔、大東亜戦が始つたときに、軍に頼まれて、上海を占領する時にどうやったら経済の運
行がとまらないで済むか、といふ課題を考へた。いろんな経済理論が頭にちらつくやうでは到
底さういふ問題は考へられない、世の中とはかう、支那人はかう、日本人はかう、軍に対して
彼等はどう思つてゐるか、等々、ありとあらゆることを知つてゐれば、或る心のプロセスを終
たときにすばつと結論が出てくるのです。さういふ課題を托されるやうな世の中で私は育つ
てきたから、自然に全体を考へる人間になつた。私は専門知識はあまりありません。むしろ避
けてゐるのです。専門家になつたら全体が見えなくなりますから。このパンフレットを書くの
に、私はケインズ経済学を殆ど知らない、彼の書物は一冊も読んだことがない。私がさかんに

引用するハイエクといふ人についても、私は彼の書物は一冊も読んでゐません。ただひとつ彼が書いてくれた大変大事な論文を私は自分で翻訳したことがあります。それは一九六六年に東京でハイエクの率ゐる「モンペルラン・ソサエティ」といふものの集会があつたのです。その時に彼は、自分がいま書いてゐる大変長い本のエッセンスは、全部この論文にある、といつて私にくれた書き下ろしの論文、それを翻訳したのです。とても難かしかつたが、それをひとつやっただけで、私はハイエクを或る程度こなしてゐます。しかももう十八年ぐらゐのつき合ひですから、会へば何んでもすぐわかるのです。話して何かがわかるといふことは、直観的知識であり、実証的知識ではありません。

重症にかかつてゐる現代経済学を治療するために必要なものの第二番目としては、直観力を養ふことです。これが本当の学問なのです。学問の修業の中で最も必要なものはこの直観力を養ふことです。それではどうしたら正しく、強力で、いつも役に立つ直観力を養ふことができるか、これは実に大きな、そして面白いテーマであります。ここではごく簡単に一言するにとめておきます。それはできるだけ虚心になること、そして小さくは何かの問題を是非解決したい、大きくは世の中を是非良くしたい、といった念願——志といつてもいいでせうが——さういふものを、心に強く持つことです。この日本は汚い、厭な日本になつた、一体どうしたらいいのだ。何とかしたい。さう思はなければ、どうして直観力が働くことがありませうか。本

当にさう思ふから直観力といふのはでてくるのです。しかしまた、直観力を養ふにはまんべんない知識を持たなければ駄目です。専門的知識を持つ必要はないけれども、世の中のことは全て相互に関連してゐますから、これは俺にはいらぬといふことはない。世の中を良くしようといふのが課題ならば、全部が興味の対象でないとダメです。ただどうやってさういふ知識を得るかといったら虚心になる他はない。心を空しくしてゐれば、そして念願が強ければ、それに関連のあるものは、新聞を見てゐるだけでも、自づとそこへ眼が行つてしまふ。あれは不思議ですね。それで知識が入ってくるのです。だから虚心になることと強い志を持つこととの二つが直観力を養ふ要訣だと思ひます。

△健康な経済学とはどのやうなものか▽

次に、ハイエクは高度に倫理的、宗教的ですからあると思はれることに一言触れておきたいと思ひます。彼の政治哲学、社会哲学の考へ方の根底をなしてゐるものは、「法律」とは探り出すべきもの (find) で、作るべきもの (make) ではないといふことです。ところが現代の人々は、国会で法律をメイクしてゐるのです。みんな多数決でさへあれば法が作れると思つてゐる。だが実際はさうじゃないので、法とは、そこにあるものを、こっちが洞察力があり、正しく眼が見えるやうになつてゐれば、これが法だとな気がつくのであつて、多数決で決められる

ものじゃないといふのです。これは人間社会の根本に触れた考へ方です。私の知る限りでいへば、これがハイエクの巨大な学問体系の基礎だと思ひます。この考へ方が彼の一切の政治論、経済論の基礎となつてゐるわけですが、ではファインドするとは何を基準に言ふのか。「最大多数の最大幸福」などといったやうな、私からみれば甚だチープな狙ひでないことは明白で、右の言葉は「人間社会とはかうあるべきもの」「人間が気儘に動かすことのできない法則の下に置かれてゐるもの」と考へる、甚だ宗教的信条に近いものを、深く胸中に藏してゐて始めて言ひ得るところであらうと私は考へるのです。

だから健康な経済学とはかふいうところから出発するわけです。経済学は経済学といふお城を作るべきものではなく、人間社会学なのですから、法はファインドすべきものだと思われるやうでない到底駄目です。

健康な経済学とはまづ第一に虚心に人間を見直すことから出発して、人間の心を中心に人間社会を見て行くやうなものでなければなりません。

第二にその人間とは、今の経済学はたとへば「欲望は無限である」といったことを考へ、それを前提にものを考へるけれども、さういふことは言はずに「人間とはまことに不可思議なもの」「これから先何を欲するやうになるか容易には解らない」とかう考へるべきだと思ふのです。今の経済学は、人間は物質的欲望が無限であつて、それを充足すれば満足するのだと決め

てゐる。さう決めないと経済学が成り立たない。だがさういふ原理原則はいらなないのです。人間は瞬間的にまるで変ることもあります。いままでは物が欲しいと思ふから給料をやれば人が集まることになってゐて、それを誰も疑はなかつた。しかし人間の富がある程度に達したその瞬間から、もう給料はどうでもいい、職場の気分はかうあつてほしい、休みたい時に十分休める、といったことが主要関心事になるかも知れない。もしさうなつたら、それだけで経済学はひっくり返るのです。しかも現に人間はかうなりつつあるのです。そのやうなことに限らず、もっと大きな変化はいくらでもある。インド人だったら、この世の中は輪廻転生だと考へる。この輪廻転生とは永遠の生命を信じてゐることです。前世・後世を信じてゐることです。だからこの世でできるだけ善行を積んで、後世で良くなりたいと念願すれば、物質的欲望などといふものは消えてしまふのです。だからインドではヨーロッパのやうに人間はすべて物質的欲望があるのだといふことを前提にしてゐるやうな経済政策は、全部あてはまらないのです。とにかく人間といふのは本当にわからないもので、ハイエクの言葉で言へば、アンプレディクタブル (Unpredictable) なのです。

第三には、常時自分の立つてゐる「仮説」もしくは「前提」を良心的な再吟味、再検討にかけに行く」といふやうなタイプでなければ健康な経済学は育たないのです。勿論ものを考へるために前提を立てるのはいいのです。たとへば先程の例でいへば人間の物質的欲望は無限だと

いふ前提でものを考へていくことは差し支へない。しかしその仮定は何時ひっくり返るかかわからないといふことを忘れてはいけない。哲学といふものは自分の立ててゐる仮定をどこまでも吟味にかけて行くものだと言へると思ひますが、その意味において新しい経済学は優れて哲学的でなければならぬのです。

第四には、直観によつて得られた判断の当否は、得られる限りの実証によつて検証して行くといふこと。それが新しい経済学であらうと思ひます。実証が得られればそれでも結構です。実証が得られないからといって、その判断をひっこめてしまふのはいけない。実証は得られなくても、この判断はおほむね確からしい、といふことはあちこちから論証出来るのです。同じ原則で他の事を裁いてみて、やっぱりいいらしいからこの原則は良いに違ひない、といふ検証の仕方もあるのです。

第五にしめくくりとして言っておきたいことは経済学の思考、研究の対象は、人間の社会生活の全般にわたるものだといふことです。但しその重点としては人間社会の物質的關係を指向する、それが経済学なのです。従つてその経済学は人間社会の一部ですから独立の域にたてこもることは許されぬ。むしろ経済内の現象より経済外の現象に注目しなければならぬのです。

以上がこのパンフレットの第一章ですがその結びとして、すでに健康な学問を實際に持つて

るるものが、その健康な訳は何であらうかと自己反省的に考へてみて、それはかうかういふことがあるからだらうと思ふ、すなはち理屈はあとから付くのだ」といふことをつけ加へておきたいと思ひます。すなはち先づ自分が健康な経済学を持つてゐると自信する。そしてそのあと、それはなぜだらうかと考へると、自分がかういふ態度でものをみてきた、決して経済学でお城を作らなかつた、人生百般の事を常に気にして来た、どうかして日本国を良いものにしたと強く念願して来た。これらのことを自己反省してゆくと、自分がなぜ健康な経済学を持つことが出来るかがわかつてくるのです。このことを一言で言へば「理屈はあとでつく」といふことです。自分に説明してより明確になる為、人に説明する便宜を得る為に理屈がほしいのです。だから人に説明する必要がなければ、本当は理屈はいらない。自分が健康な経済学を持つてゐればそれでいいのです。ただわれわれは人に説明できないやうな心境である自分も厭なで、人に説明できるやうに自分に説明するのです。理屈はあとでつく、それは人生の事実だと思ひます。これは「実践」を常に「理屈」に先行させる学問ですが、それが「来るべき健康な経済学の姿」だらうと考へます。

△ケインズ経済学と計量経済学▽

私はケインズを読んだことはありませんが、世の中の人がケインズ経済学と言つてゐるもの

は自然にわかります。私は世の中が持つてゐるケインズ経済学のイメージを対象にものを言ふのですが、それでいいのです。ケインズその人を対象にはもの言はない。学者はそれをやつてもいいが、世の中には余り役に立たないでせう。世の中が持つてゐるケインズ経済学のイメージとは何か、それは少し注意してゐればわかりますね。ケインズは通貨を金から解放した。政府は金がなくても通貨の増発が可能なので、いろいろな政策ができる。世の中が不況になれば、誰かに購売力をもたせればいい。そのためには借金させればいいのです。だから、個人信用、月賦販売にみんな発達しましたね。月給を担保にし、自己を債務者にする。不況の時にさかんにこれをやれば、不況は解消する。かういふやり方がケインズの特徴です。又、政府は購売力を造出できるので、失業救済、福祉国家といった社会主義的な、多くの人を喜ばせるやうなことがやれる。かうして社会主義的理念とケインズ経済学とはコンビになったのです。

戦後は統計学がえらく発達したが、そこにコンピュータが与へられたから「計量経済学」が非常に発展した。数字は色がついてゐないから事実を語る、といふことでむやみに統計学を作つた。しかし若い学者で計量経済に頭をつつこんだら、一人前になるのに十年もかかる。ところが十年たった頃は、方程式ばかり扱つてコンピュータの使ひ方ばかり研究して来たのだから、世の中のことはさっぱりわからなくなつてゐる。かうして専門家の専門家、ごく小さい

ことしからわからない片輪の人間になる。それが大学の教授であれば、経済学を支配するやうなことになる。この「コンピュータ付計量経済学」といふのは非常に悪い結果を齎らした。

そこにもってきて情報が無闇に多くなり、毎日何やかやと過剰情報の処理に悩む、といふことになった。それが現状です。

△「基礎的な観点」の哲学的吟味▽

以下、脱ケインズ経済学建設のために再吟味を要する若干の観念について検討を加へてみたいと思ひます。

第一に「因果律」。原因があれば結果がある。同じ原因からは同じ結果が出ると考へるのが因果律ですが、仏教ではさう簡単ではなく、「因縁果報」といふ。因があつても縁がなければ果は出ない。しかも単独に果が出るのではなく、必ず報といふものがついてくる。因果とだけ単純に考へてゐるのはヨーロッパ的なので、インド思想、仏教思想を持つてゐる我々からみれば、因があつても縁がなければ駄目だと思ふ。自分がこの世にゐるのは、父を因とし母を縁としたものだと言ふが、自分とは無始以来の自分、永遠の昔から自分といふ真の原因があつて、それがたまたま父母を縁としていまのこの世に生まれてきた、といふべきかも知れません。何にしても「因果律」といふ浅薄なことで考へてはだめなのです。

第二に前世・後世はないと決めてかかるのはこれもひとつの迷信です。あると決めるのも迷信だらうがないと決めるにも実証はない。実際に世の中を見るのには、前世・後世があると考へる方がよっぽど具合がいい。私はあると断定は致しませんが、仮りに前世もある、後世もあると思つて御覧なさい、その瞬間から世の中は実に懐かしいものになる。前世も後世もない、俺はこれだけだと思ふから、やけっぱちを起して享楽に耽けるといつたことにも走るのです。次には進化論の説明がいかにかくさいかといふことと、最後に平等について書きました。自由・平等と一緒になつてゐるが、これはおかしい。平等といふのはないのじゃないか。あるとすれば、不平等の裏みみたいな所に平等があるといつてもいいでせう。それは仏教での言ひ方です。

詳しくはパンフレットを読んで戴きますが、以上の様に普通人が立つてゐる基礎的な觀念をみな再吟味にかけなければ碌な経済学は出てこないのです。私のやつてゐることは、経済学の場は借りてゐますが、いはば現代社会学の総点検であり総批判なのです。以上述べたことのほかにもたくさんある。たとへばわれわれはコミュニケーションといふ言葉が無雑作に使ふけれど、一人人と人との間のコミュニケーションといふことは本当にできるのでせうか。ある程度はできるけれども、本当にできるかどうかはわからない。だから話せばわかるといふのは大嘘で、話してもわからないのが普通です。さういつた普通の人が前提としてゐることをあげつら

ってゆけばいくらでもあるのです。

△むすび▽

そんなことがこの「脱ケインズ経済学」なるものです。書いてみると自分の中にすであつたものが、自然に出てくるわけです。ただすでにあることを自分では知らない。しかしそれを探り出して行けば、いろいろ追加すべき物がでてくる。いままであつたのはあつたけれども自分で気がついていなかったやうなものが、どんどん出てくる。それが書くといふことのメリックトです。

私は今度の政変で、世の中も世界も驚くはずだと思つてゐます。日本といふ国だから出てくることなのです。なぜなら我々には仏教思想が身についてゐるからです。特に日本にとっては支那を濾過して入ってきた仏教思想であることが実にありがたいことだ。漢字といふのはものすごく表現力が強い。お経を読んでみればわかりますが、造語の連続です。組み合わせによっていろいろなニュアンスがでてくる。それを受け継いでゐるのです。サンسكريットから勉強するのではとても駄目でせうが、これも日本が置かれた一つの神秘ですね。

日本人の死生観

文芸評論家

村松

剛



日本人の宗教観

死に抗する人間のねがひ

彼岸と現世

「運命」と「義」

「心中」について

死の意味

日本人の宗教観

今日は「日本人の死生観」といふ題でお話をするようになりました。「死生観」といひますと、大変話がむづかしくなりさうなので、なるだけさうならないやうに努めたいと思つてをりますが、果してどこまでできますか。

戦後のわれわれの生活の中では、死といふ問題がしばしば欠落してをります。テレビなど見てみますと、無責任なのがゐるで、人間のいのちといふのは地球の重さより重いんだといふふうなものではないんで、地球のほうが重いにきまつてゐるんです。いや、人間のいのちが尊いのだといったつて、その証明の材料はどこにもありません。たとへば、私を含めましてここにいらつしやる皆さんも、七、八〇年もたつたら遅かれ早かれ死ぬでせう。地球だつて、いづれは滅びる運命にあります。地球が消え、その上の生物が消えたところで、宇宙全体からみれば、けし粒のやうな星が宇宙の隅っこで一つ消えたやうなもので、銀河系宇宙の進行にはなんのかわりもありません。さう考へていきますと、人間のいのちといふものは実にむなし馬鹿馬鹿しいものになってきます。それが尊いなどとなぜいへるのか。これは証明不可能なことです。仏法では、人間のいのちははかないんだ、きんかいつちよう 權花一朝の夢ゆめ であるといひます。權花といふ

のは朝顔のことで、まことにはかないものである。そのはかなさを徹底して認識しなさい。むなしなものだからこそ、一朝のうちに消えてしまふものであるからこそ、このいのちを大事にしろ。その意味では、人間のいのちであらうと、蚊、とんぼのいのちであらうと同じだといふのが仏法の根本的な認識であります。これに対してユダヤ教、キリスト教、回教を含めた一神教の場合、この構造が逆になります。人間のいのちが尊いのは、神が造り給うたからだ。そのいのちを勝手に縮める、たとへば自殺するといふことは、キリスト教の世界では許されないことです。神の意志に対する挑戦となります。回教では、自殺は他殺よりも大きい罪悪とみなされます。

さて、人間は必ず死ぬのですから、どうしても死に直面せざるをえません。しかし、現代では死が全く忘れられてゐます。それは近代社会といふものが、人間の快適さを求めてきたからでせう。快適といふことばは、英語でコンフォタブルと申しますが、これが使はれるやうになつたのは、どうも十九世紀になつてかららしい。昔の人たちだつて美的な生活、あるひは精神的な生活、さういふものを求めて、努力をくり返してきたのでせうが、生活を快適にするといふことに重点を置いたのは、近代になつてからです。もう一つは、敗戦後の日本の場合、戦争によつてひどい目にあつたので、もう戦さはこりごりだ、死ぬなんてこりごりだ、生きてゐればいいんだ、といふ風潮が強く叫ばれてまゐりました。この二つの要因が重なりまして、死の問

題が忘れ去られていったのです。アンドレ・マルロオは、『現代は神殿も寺院も持たない唯一の社会である。その中でわれわれは生きてゐるんだ』といふ意味のことをいつてゐます。ひと口にいへば、社会の世俗化のなかで、人間にとって貴重なものが忘れられていく、といふことでせう。

死の問題を論じようとすると、宗教の問題にかかはって来ざるを得ませんが、日本人の宗教をほかの国々と比較した場合、とくに、一神教の国々と比較した場合に顕著なことから一つは、日本人の宗教といふのはあんまり明確ではない、といふことであります。たとへば、今の日本では若い人たちでさへ、結婚式の日取りを決めるときには、大安吉日とか友引とかをえらぶ。これは奈良朝に吉備真備（六九三〜七七五）といふ人が、唐から大量の陰陽五行道（おんりやうごぎやうどう）の文献を持って帰ってきて、これが基本になって日取りを決める習慣ができてきました。女の人は花嫁衣裳を着る。これは十八世紀ごろにでき上ってをります。それから男はどういふわけだか、日本では夜でもモーニングを着ます、モーニングは字の通り、暗くなったら着てはいけなものです。そして、結婚式を挙げてくれるのはだいたい神主さんである。それが終ると、新婚旅行といふ舶来の様式の旅行に出かける。クリスマスにはいかなるクリスマスチャンより酒を飲み、死ぬと仏様のお世話になる。これが日本人の大部分の宗教的行動様式でせう。こんなことを外国人に話すと口をあけてポカンとして、お前たち気狂いか、といふやうな顔をいたしま

す。だが事実日本の場合には、いろんなものが入り交つてゐるわけです。

ところが、一神教の世界といふのは、自分たちの考へ方以外のものは全部つぶしていきま
す。モーゼの十戒の冒頭に、これはユダヤ教、キリスト教を通じての道徳の規範になるのです
が、『われはねたみの神なれば』といふ言葉が出てまゐります。ほかの異朝の神を拜んではな
らない、そのやうなことをすれば、その罪は当人だけではなくて三、四代にも及ぶであらうと
いつてゐます。一神教は、かういふ非常に強い排他性をもつてゐます。ついでに申しますが、
共産主義といふものは、このユダヤ教キリスト教が持つてゐた、極端な排他性をその体質のな
かに受けついでをります。キリスト教の伝統を抜きにしては、西洋の哲学も共産主義も理解し
にくいといふのが実情であります。

日本人は、その点は非常にゆるやかでありまして、いまの結婚式の話一つでもさうでありま
すし、神道を捨てることなしに仏教を受け入れてきましたので、神社とお寺といふものが明治
維新までは一緒でした。春日神社と興福寺といふのは一対いっついのものであります。昔『百人一首』
や『新古今集』を作つた藤原定家の父親に藤原俊成といふ人がをりました。この人は源平げんぺいの合あひ
戦せんごろの人で、『千載和歌集』を編纂へんさんしました。非常に仏教に熱心な信者で、和歌ばかりつく
つてゐると仏様に悪いんじゃないか、と思ふやうになりました、仏様に伺ひをたてるのです。
和歌ばかりつくつてゐて自分は仏法を怠つてゐるやうに思ふけれど、どうだらうかと。仏様に

伺ひをたてるならば寺院にこもるのが普通なんです。神社にこもってこれでもいいだらうかと伺ひをたてると、ちゃんと神様が現はれてきて、仏の道も和歌の道も同じだから心配するなど、神様が返事してくれるんですね。これは職権濫用かも知れないけれども、日本人はさういふことは別に気にとめなかつたんです。さういふ、非常におだやかな教へが、日本人の場合の宗教観であります。ですから、日本の場合は異端審問といふのは殆んど行はれた例がない。日本でもキリシタンはずいぶん殺されてゐますが、西洋の中世、近世のキリスト教会が行なつた異端審問のすさまじさに比べたら、比較にもなりません。日本人は西洋人よりはるかに寛容であり、われわれの物の考へ方のなかには、いろいろなものが交じりこんでゐるのです。

死に抗する人間のねがひ

古い時代の日本人は、これは西洋も同じですが、巨大なお墓を建ててをります。堺にあります仁徳天皇の御陵は、世界一巨大な陵墓です。これはのちの飛鳥板蓋宮や藤原宮の宮殿趾と比較しますと、お墓の方が大きい。西洋では、紀元前五〇〇〇年ごろピラミッドが造られてゐます。大きな部屋の中に王様は黄金の仮面をかぶつて一人で眠つてゐます。そばに都の跡があり

ますが、お墓のほうが巨大です。これは生きてゐるときの生活より、死んでから先の生活のほうを重視してゐたことになります。極端なのは、馬車から家来、女官など全部引き連れて死んでいった王様もいます。死体のまはりから本物の馬の死体なんかが出てくるのです。かういふことまでして、死後の世界を考へて、再び生れ變つて、この馬に乗つて生きることができるといふだ、と本当に信じてゐたかどうか、それはわかりやうがありません。こんなことをしても、何千年かの後に生き返るなんていふことはだめかも知れない、不可能かも知れない。しかし、せめてそこになんらかの期待をつないだ、といふのが一番常識的な解釈でせう。

そこで先ほどのマルローのいつた言葉ですが、人間は自分が死ぬ存在だといふことを意識したときに、死から何ものかを奪ひ返さうとしてきた。たとへば巨大な墓を造る。墓を造ることによつて、せめて自分が完全に消滅してしまふのではない、死後の世界はあるのだ、といふ期待感を持ち続けようとした。死から何ものかを奪ひ返さうとする試み、それが人間の文化の総体である、といふ言ひ方をマルローはしてをります。

われわれの先祖の陵墓を見ましても、たしかに死から何ものかを奪ひ返さうとした試みのあとは歴然としてゐます。昔の日本人は、人間が死んでも魂がまたもどつて来るかも知れない、といふふうに考へました。そこで、しばらくは死体をそのままにしておく。これを殯ひんを営むと申します。この殯ひんと書くのは当て字で、儒教にもかういふ礼式があるので、この漢字を当てた

にすぎません。日本の場合は古くから、人間が死んでもその死体をそのままにしておいて魂が帰って来るのを待つ、その一番長い記録は天武天皇であつて、崩御後三年三箇月に及んでゐます。殯宮もがりのみやを建てて生前同様に奉仕する。どうしても魂がもどつて来ないといふことになりますと、死者は墓に埋葬された。このやうに昔の日本人は、死者の魂が山野をさまよひ、あるひはまた、帰つて来るのではないか、と信じてゐた。山野だけではなく、海をさまよふといふ信仰もあつた。熊本県の山鹿市にある装飾古墳には、棺桶が舟の上に乗せられ、その上にもう一つの舟があつて、この方には馬が乗つてゐます。馬は、当時としては貴重な生きものであつたにちがいない。福岡県の装飾古墳には、太陽を舟にのせたものが描かれてゐます。とにかく九州にはさういふものがたくさんあります。これには、魂あるひは太陽が、舟に乗つて運航するといふ住吉神社系の信仰がみられるのです。とにかく、このやうに魂が死体にもどつて来るといふ信仰がありました。この殯もがりを営むために殯宮もがりのみやといふものをつくつて奉仕してゐたのです。

そこへ今度は、仏教がはいつてきました。仏教は魂を認めません。人間といふものは死ねばいくつかの要素にかへつてしまふ。何も残らない。だから仏教では火葬を行なひます。火葬にしてしまひますと、今度は、人間の魂が山野をさまよつても帰つて来るところがないのです。日本で最初に火葬が行なはれたのは、『続日本紀』しよくにほんぎによれば西暦七〇〇年です。玄奘三蔵の許で学んで帰つてきた道昭といふ坊さんが遺言をして、始めて火葬になつた。天武天皇の妃で人

麻呂が仕へた持統帝は、火葬に付された最初の天皇です。この火葬の出現は、日本人の思想における、大きな転換を示してゐます。火葬にしてみましたら魂はもどっていくところがないからです。

彼岸と現世

仏教では、六道輪廻ろくどうりんねといふ概念がありまして、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六つの世界を人間は駆けめぐつてゐる、生きてゐる間に悪いことをすると地獄にいく、あるひは畜生道に墮ちる、と教へてゐます。平安朝になりますと、この地獄のイメージが鮮明化されます。解脱げだつへのみちをすすめるのに効果があつたのは、難解な哲学よりも、地獄や餓鬼道のイメージだつたのです。年末になると、宮中でも各地の寺でも人びとが集まつて、三日間、夜を徹して仏名会ぶつみやうえをやりました。地獄の恐ろしさを説いた経文を坊さんがよむ。しかも地獄の諸相を極彩色で描いた屏風が立てられてゐる。闇にゆらぐ燭台の光に、地獄の悲惨な絵が浮かび上り、鬼気せまる情景です。この地獄のイメージが非常に強く普及した結果、どうやって地獄の責苦せめくからのがれるかといふことを人びとは考へるやうになつたのです。平安朝では、ここに二つの問題が生じてまゐります。

大和魂といふ言葉がありますが、これは漢才からざえに對立する概念です。外国の知識を身につけた才能、これが漢才で、これは役人や官僚になるためにはどうしても必要だった。ところが唐才だけでは面白くない。本当の日本人としての感受性を持つてゐなければいけない。これが大和魂なんです。ですから大和魂といふのは武張った言葉ではないのです。どういふのが大和魂かといふと、たとへば光源氏ひかりげんじなのです。つまり色好み。色好みといふとすぐ好色といふことで、悪いことだけを今の人は考へますが、“色”といふのは“現象”といふ意味ですから、現象好み、現象の美しさを理解できる。世の中の美しさ、人間の美しさ、女の美しさ、さういふものを本当に理解できる感受性をもったのが、色好みなのです。光源氏はその代表的な存在であります。その色の、これまた代表として“花”といふ言葉があります。花といふ言葉が、次第に美の代表的な存在として使はれるやうになるのです。実は花といふ言葉が一般化されはじめたのは、大伴家持のころからなのです。桜の花とか梅の花とか、さういふ表現はありましたが、彼女は花のやうに美しいといふふうに、何の花だかわからない、特に指定はない、さういふ花の表現は家持やかもちの時代からです。

次第にその花の美しさがわかる、花の美といふものがわかつていふことが、つまり、“色好み”といふことになるわけですが、これが、大和魂なので、要するに日本人といふのは、それ

だけの感受性を持つてゐなければいけない、といふことでせう。ところが、このやうに花に執着する、この世の美しさに執着するといふことは、これは人生に執着する、現世に執着するんですから、仏の道にそむくことになるのです。すると、地獄に行かなければならない。ですから、ここに二つの矛盾した命題が登場することになります。花の色は美しい、その美しさを理解しなければならぬ、しかし、さういふものに執着してしまつたら、地獄に行かなければならない。この二つの矛盾命題、これが仏法の一般化とともに、日本人のなかに大きく作用して来た事柄でありまして、平安朝の全文学が、この矛盾命題の対立をめぐつて揺れ動いて来た、と言つても過言ではないのです。

平安朝の初期には、この二つの矛盾命題は、矛盾したままで提出されてをります。それがあつた時期になりますと、なるほど世の中といふものは無常なものであつて、これに執着してはいけないのかも知れない、しかし、人生はやはり美しい、女の美は美しい、魅力は抗しがたい、といふふうな歌が大きく出てきた時期もあります。末期になりますと複雑になつてまゐります。なるほど世の中は無常かも知れない、權花一朝の夢に過ぎないかも知れない、だがさうだとしても、さうであればこそ、このむなし世の中に一輪の花を咲かせたい、美しい夢を咲かせたい、かういふ考へ方がだんだん出てまゐります。

『源氏物語』は死別の多い小説です。何人も女の人が若くして死ぬのですが、当時はみんな

早く死んでゐます。そして藤壺を除いてみんな秋に死んでゐます。秋のさびしさと共に、要するに季節の終りと共に、人びとは「消え入るやうに」死んでゆく、どの女たちも、死にぎは美しい、現世に執着を残さない人びとの死顔は、いづれもらうたけて、きよらかだった、とされるされてゐます。しかし、『源氏物語』のなかでは、最も魅力的な女として描かれ、光源氏が一生その面影を忘れなかつた藤壺だけは、春に死んでをりますし、さういふ形容詞はまったく使はれてゐないのです。これは彼女が子供である光源氏と密通してゐるからでせう。しかし、かういふことは昔はいくらでもあつたのです。これを武家成立以後の道徳で律することはできないので、事実、密通したから悪いとは一つも書かれてをりません。藤壺はたゞそのことが人の口の端に上つて、いろいろと言はれることを心配してゐるのです。だから、死ぬときにも現世にどうしても思いを残してしまふ。だから、きよらかにならないのです。

さて、このやうに死ぬときには、この世への執着を断ち切つて死んでいく、涼やかな心境で死んでいく人間だけが、らうたけく、きよらげに、とほめられてゐるのです。もうこの頃から日本人のなかには死ぬときには執着を残さないで、美しく死になさいといふ気持があつたのです。これを受け取つて実践哲学にもつていったのが、**「武家」**なのです。

『平家物語』に敦盛あつもりが出てまゐります。彼はご承知のやうに、熊谷次郎直実はなざねに首を取られます。運命を見きはめて、従容しよつようとして死についた美少年敦盛の物語は、お能にもなり、日本人の

記憶には鮮明に残つてをりますが、西洋人にはわかりにくい物語なのです。なぜかといふと、西洋の騎士道では、戦へるだけ戦つて、そしてもうだめだとわかったら降参して捕虜になれ、自殺は禁じられてゐますから、降参すれば大事にしてくれるのです。そして身代金みのしろきんを払へば帰国を許されるのです。ところが、敦盛は、逃げる事ができたのに「かへせ、かへせ」と言はれて帰つていって、直実が助けてやるといふのに、いやかまはないと言つて首を取られてしまふ。それだけの男がなぜ英雄になるんだ、といふことになるのです。

キリスト教徒にとっては、死といふのは、未来の天国への一つの入口です。人間は死ねば、最後の審判と共に天国に行く、これがキリスト教的な世界観です。日本人の場合でも、仏法はたしかに未来といふことをいってはをります。しかし、その仏教のもとで日本人の考へ方は、死ぬときにいかにして現世に執着なしに、夢にすぎない人生を美しい夢として完結するかが問題であった。つまり、死は生に美的完結を与へるところの一つの大きな頂点だったので。そこで、死の儀式化といふものが起つて来るわけです。

「運命」と「義」

さて、鎌倉から室町にかけての顕著な日本人の道德観の变革について、お話ししたいと思ひ

ます。『平家物語』には、運とか運命などの言葉が多くつかはれてゐます。運といふのは、天のはこびであります。人間には、窺知みちしがたい天のはこびが人生を決定する。運命が尽きたらどんなに偉い人間でもだめだ、しかし、どんなに弱い人でも、運がついてゐるときには非常な好運を獲得できる。戦ひ、傷つき、敗れば、それを運命として「いまはかう」と死んで行くのである。そこにおのづからあらはれて来る人間像の純粹さが、読むものの心を打つのです。しかし、運とか、先ほど申しました現世に執着するなといふ考へ方だけでは、多少の道德は出てまゐりますが、強い道德観の形式にはならないのです。そこで、登場するのが儒教であります。

『太平記』になりますと、「運」もありますけれど、「義」といふ言葉が圧倒的な数になります。『平家物語』には、運命といふ語は四十三回つかはれてゐますが、義、義兵といった言葉は六回にすぎない。それが『太平記』になると、義は義兵などを含めて百八十回を数えるのです。「義」といふ言葉は、美を意味する羊と我との合成なのです。美しい我といふことで、人間が美しく舞つてゐる姿を表したもののなのです。

「義」は、儒教の根本理念のひとつですが、これは蒙古襲来のころ、南宋の知識人たちが、日本へ朱子学の本を大量に持って来たので流行します。義といふ言葉は、義母、義父、義兄弟とかいふふうに使はれますが、これは、本物の親や兄弟ではないといふ意味です。仮の、約束

上の親とか兄弟といふ意味でせう。つまり「義」は「現世での約束ごと」といふ意味に使はれてゐます。その約束ごとが、巨大な約束ごとになると、「大義」になり、人間同士の約束ごとは「仁義」になります。後にはこの義は、「義理」といふ言葉になり、地上の約束ごとと人間感情との対立、すなわち義理と人情の板ばさみ、といふふうになつてゐるのです。

さて、古くからある「運命観」と新しく登場した「義」の觀念と、この対立のなかで生きた一人の典型的な人物として、『太平記』が描き出すのが楠正成です。彼は天才的な戦略家であつたが、同時に、運命といふものをよく洞察してゐた、今度の戦さは必ず破れるといふことをよく知つてゐた、つまり運命を知つてゐたのです。ここまでは、『平家物語』の登場人物と同じ型です。平家的論理でいへば、その時、正成は後醍醐帝を裏切つて、足利尊氏についても文句は出なかつたのです。ところが、片一方に「義」が登場する「運命のおもむくところ」をよく知つてゐたけれども、なほかつ約束ごとである「義」に殉じて死んでいくのです。この点は、反対側の足利方の立場から書かれた『梅松論』でも、武人の鑑かがみとして称讃してゐます。自分の運命を洞察する能力を持ちながら、なほかつ、義に殉じたところに、彼の偉さがあるといふ評価です。

「心中」について

江戸時代になりますと、心中といふのがあります。心中といふのは、封建時代の体制に対する反抗であるといふ見方が、一時流行したことがありました。むろんそんな簡単な公式で片づけられるものではなく、もし封建体制への反抗であったならば、とうの昔に心中は消え失せていなければならぬ、ところが今日でも心中は絶えないのです。

心中の根底には、死んだら二人で天国の蓮はすの台うてなに坐りたい、といふ願望がある。近松門左衛門の作品では全部さうです。心中を、世俗化された浄土信仰が支へてゐるといってもいいのです。恋愛であれ、金の問題であれ、それは、現世的なものへの執着にほかならない。煩惱ぼんのうを断ちきれずに心中をしまつて、本来の仏説からいへば地獄か畜生道にでも墮ちなければならぬものが、さうではなく、仏様がちゃんとお呼び下さつて、地獄に行くかはりに天国の蓮の台うてなの上に坐らせてくれるといふのは、どうも虫がよすぎると思ひます。これは浄土信仰の中味が、だんだん稀薄化していったためにさうなつたのでせう。この世での道徳論的実態が稀薄化して、ただ死んだら来世のどこかに坐るんだといふ、来世への茫漠とした信仰だけが残るやうになつた。結局は、心中といふものは、浄土信仰の形骸化の上に形成されてきた、と考へていいのではないでせうか。

「死」の意味

たましひ

魂は、いずれは来世にいくのだ、魂といふものは存在するのだ、といふ日本人の考へ方は、仏教が魂といふものを否定してきたにもかかわらず、日本人のなかから消えなかつたのです。江戸時代の末期に、水戸のほうで「魂呼ばひ」の風習がまだ行はれてゐたといふ記録があります。死んだ人間の魂はそこらをさまよつてゐる、死者の魂をもう一つペン呼びかへさうとする儀式です。たまへの信仰は根づよく、現在でもなほ生きてゐます。遺骨蒐集などもその例でせう。キリスト教の場合ですと、たとへばハワイで沈んだアリゾナのなかにはまだ遺体はそのままです。戦死者の遺体は、その戦死した場所に置いておく、たとへどこにいても、肉体をもつて天国にいけるわけですから、それ以上のことはしない。ところが日本の場合は、民族学者の研究によりますと、死んだ魂は大体近くの山に登るんださうです。だから、あんまり遠いところにあると、どうもこつちに帰つて来られないらしい、といふので遺骨蒐集団を出すことになります。

三島由紀夫が亡くなつたとき、日本人の死生観について書いてほしいと、ニューヨークタイムズが依頼して来ました。そこで、あれは文学者の孤独の死であると同時に、現代の社会に対する憤懣の表現なのだ。日本人には古くから、死んで世の中を変へようとする諫死といふ考へ方がある。あるひはまた死花を咲かせるといふ表現があると、まあこのやうなことを書いたの

です。ところがこの文章の真中に大きな挿絵をのせてゐる。地下に埋つてゐる死体の頭や口から木が伸び、地上で花が咲いてゐるのです。はじめはこの奇妙な絵の意味がわからなかつたのですが、しばらくしてやっとわかりました。つまり、彼らは肉体をもつたまま死後の世界によりみがへる。魂は肉体を離れては存在し得ないので、死花を咲かせるといふと、死体からいきなり花が咲いてしまふのです。こちらは、死でもって肉体は終る。しかし、死体とは切りはなされた概念で魂といふものを考へてゐるわけです。彼我の死生観が全く違ふのです。

無常の流れのなかに一輪の花を咲かせる。人生は夢であればこそ、その夢を美しく織りなしたい、といふ鎌倉期に形成されてきた考へ方、これは、今のわれわれのなかにもあるでせう。いずれにせよ、人生といふものが、おそらく死でもって終るとすれば、その死で終る人生を充実して生きたいといふことは、人間として当然の願ひでせう。だとすれば、われわれはもつと生を充実して生きるためにも、死といふものの意味を考へるべきです。

ところで、最初に戻りますが、敗戦を契機として、人間一人のいのちは地球より重いんだとか、敵が攻めて来たら逃げますとか、とにかく、死を毛嫌ひする。要するに生こそが総てなんだ、といふ素朴な地上肯定論が横行してまゐりました。これは、単なる本能の肯定論にすぎません。動物は本能によって保護されてゐます。人間みたいに、死とは何かといふことを考へない。しかし、人間だけが死とは何かと考へ始めたところから、文化といふものが出来てきたの

です。

戦後の風潮では、国のために死ぬなんてことは馬鹿馬鹿しいことだといふ観念があります。敵が来たら、鉄砲をすてて逃げます。これが当り前みたいになって来てゐる。しかし、「共同体の自由なくして個人の自由はない」これはスイスの民間防衛といふ本の冒頭に出てくる言葉です。「共同体」とは国のことで、国家の自由なくして個人の自由はないといふことです。ご承知のとほりスイスでは、国民の一割二分ぐらいが徴兵義務で軍人として動員される。九州ほどの面積で、六〇万ほどの兵力が四十八時間以内に動員されることになってゐます。さらに、国民の約二割四分が民間防衛隊として編成されてゐます。自由を守っていくためには、ある場合には武装しなければなりません。しかし、日本ではかういふ「共同体」を守っていくといふやうな当り前のことさへも、忌避されてゐます。

ミュンヘンで、パレスチナゲリラがイスラエルの乗客の乗ったバスをおそつたことがあります。バスのなかに手榴弾を投げこんだのです。さうしたら、そこにいたイスラエルの青年が、いきなりその手榴弾の上に身を伏せてしまったのです。手榴弾は爆発して彼は死にましたけれども、お客は助かった。脇で見てゐた老人は卒倒します、息子が目の前でバラバラになったわけですから。病院にかつぎこまれ、新聞記者がかけつける。その新聞記者に老人がいった言葉は、「彼はそばに立ってゐるのが私でなくても同じことをしたであらう。私はかういふ息子を

持ったことをイスラエル国民の一人として誇りに思つてゐる。ただ私の中の父親は泣き叫んでゐるのだ。」といふことをいつてゐるのです。私は、この老人は偉いと思ひます。単に、息子を誇りに思ふだけでなく、「私の中の父親は泣き叫んでゐるのだ」といふ人間的感情もちゃんと心得ながらいつてゐる、これは並大抵のことではないのです。

さういふ「共同体」への義務を背負つて死ぬ、そのことによつて、自分の人生といふものを生かすんだ、といふ考へ方は、現在の先進工業国では一般に見失はれてゐます。特に、日本は敗戦のショックによつてこれが強くなつてゐます。ただ単にいのちが惜しいといふ。いのちが惜しいといふことは、人間の本能ですから、この本能を追っかけてゐるかぎり、文化とは反対の方向にいくのです。人間は知恵の木の実を食べて、動物的な本能から離れ、文化を創造して来たのです。ただ単にいのちが惜しいといふことを、いかに乗り越えるか。そして、いかに人生に意義を与えるか、そこに、死の問題があると思ひます。

現代は、神殿も寺院も巨大な墳墓もない文化をつくつた奇妙な時代である、といふのは、先ほど申しましたやうにマルローの指摘した言葉です。われわれはこの世俗化した社会のなかで死の意味を見失ひはじめてゐます。世俗的な社会をつくつたのは、現在の技術革新であり、あるひは近代といふものであり、西洋に關しては、キリスト教の力の弱体化であります。日本の文化伝統は、一神教の救ひなしに、（一神教では死んだら神様が救つてくれるわけでせうが）

さういふ救ひなしに死といふものを考へ、独特の死の想念を育ててきた珍しい国家であります。未来には魂は残るかも知れないけれども、未来にそれほど期待することなく、死をもつて生を充実させる。死が生の終点であるやうな、しかも無常感の上に立った独特の死生観といふものを育てて来ました。私たちは、この混乱した時代のなかで、ユダヤ教キリスト教の弱体化のなかで、世界に対して提出できる何物かがあるのではないでせうか。さういふ意味からも、諸君があらためて「死」といふ問題を見つめていただくことを期待したいと思ひます。

(本稿については、村松先生が海外御出張の為、御校閲を経ないままに掲載させていただきました。文章についての責任はすべて編集部にあります。)

もっと根本的に考へ直さう

——主体性の危機——

元「時事通信社」社長

「内外ニュース」社長

長谷川 才 次



はじめに

戦後の日本を支配してゐるもの

日本は階級国家ではない

まづ日本の歴史を勉強せよ

階級闘争論が英国をダメにした

明治の憲法と昭和の憲法

いい加減な八月十五日「革命」説

教育勅語

デモクラシーとリーダーシップ

無責任な日本の言論機関

福沢諭吉とジャーナリズムの本領

はじめに

今日のお話のメイン・テーマは「もっと根本的に考へ直さう」です。これは英語の *fundamental thinking* のことで、どうもいい訳語が見つかりませんが、日本語で「根本的に考へ直さう」と置き換えていいでせう。

この言葉を初めて口にしたのはイギリス連邦に属してゐた南アフリカのスマッツ將軍です。彼は第二次大戦が概ね峠を越した一九四三年十一月二十五日、ロンドンで上下両院議員を前に演説した。これからの世界はすっかり変つてしまふのだ。ロシア共産主義がエルベ川の東一〇マイルまで出て来た。ドイツとイタリアその他が潰れて、ヨーロッパ大陸がほとんど真空状態になり、そこへロシアの怪獣が出て来るのだ。この新しいヨーロッパを前にして、自分達はどのやうに戦後の経営をやつたらいいのだらうか。この演説の中に “We shall have to do a great deal of fundamental thinking” とこゝ箇所があるのです。いままでの古い考へ方をスクラップしなくては駄目だ。物事を根本的に考へなくてはいけないといふことです。私は仕事上のこともあって良く新聞を読んで来たが、初めてこの言葉を目にした時「かういふ英語があるのかなあ」と思つて感心した。戦後三十余年を経た今日、我々が当り前だと思つて来た

ろんな考へ方を、この際スクラップしなくてはいけないと思ふ。特に若い皆さんに、ここでひとつ根本的に考へ直してもらひたいのです。

戦後の日本を支配してゐるもの

日本の現状についてコロンビア大学のブレジンスキー教授が、この人はカーターが大統領になると外交の指南役になる人物ですが、五年前（一九七一年）に日本に来て「日本研究」をやった。“The Fragile Blossom, Crisis and Change in Japan”『ひよわな花、日本』といふ薄いパンフレットにまとめられてゐて、なかなか良く出来てゐる。西洋人の日本観察で時には傾聴に値ひするものがあるが、そのひとつです。日本はいま a kind of identity crisis にある。これを「主体性の危機」と訳してゐます。一九七五年は非常に危険な時である。crucial といふ言葉を使つてゐる。「天下分け目」といふことです。その年には賽さいが投なげられるであらうと言つてゐる。去年から今年にかけて、経済的にも、政治的にも、日本は非常に動揺してゐる。それを概ね予言したといふことです。

中村草田男の句に「降る雪や明治は遠くなりけり」といふのがあるが、私も明治生れの人間がかうしてゐるのだから、明治が遠くなつてゐるはずがない。さうではなくて、現在の一

番大きな問題は敗戦と同時に日本がなくなつたといふことだと思ふ。遠くなつたどころか、日本がなくなつたのです。戦後の日本を支配したのは「日本」ではない。マルクス・レーニン主義か、さもなければアメリカン・デモクラシーです。日本はどこへ行つたのだらうか。このことは明治御一新の頃と似てゐる。

青森県出身の尊敬する先輩に陸羯南くがかつなんといふ言論人がをります。羯南先生が明治維新後の日本にあきれてしまつて「日本がなくなつた」と言つてゐます。羯南先生は帝国憲法発布の明治二十二年二月十一日に『日本』といふ新聞を始めてゐる。その創刊の言葉の中に「近世の日本はその本領を失ひ、自づからの固有の事物を捨つるの極、ほとんど全国民をあげて泰西に帰化せんとし、日本と名づくるこの島地は、やうやく正に輿地図の上に、ただ空名を書けるのみならんとす」とある。日本といふ島は残つたが、日本はなくなつてしまつたといふのです。そこで自分は『日本』といふ新聞を発売して、日本古来の道を説くのだといふのです。

戦後の日本に入つて来た民主主義といふのは、大事なところがみんな欠けてはゐるませんか。非常に出来の悪いものだ。アメリカや英国は民主主義で永年やってきたのだから、それを間違ひなく引継げばいいのだらうが、大事な点で間違つたままでうけとられてゐるやうです。

いまの日本では民主主義といふのは国民が何でも直接にやることだといふことになつてゐるやうです。住民パワーとかいって、何事についても意見を述べたがる。しかし、それでは政治

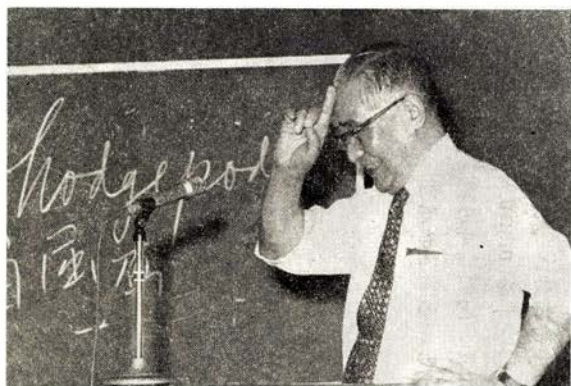
は動かない。民主主義の基本的な考へ方は representative government で代議政体といふことだと、リップマンが “Public Philosophy” の中で言つてゐます。たとへば農民は米のことには関心もあるし良く知つてゐるが、外交の事となるとさっぱりだ。それをみんなでわあわあ騒ぎ立てるから、ひどい混乱状態になつてしまふ。たとへば私は新聞をやつてゐるし、みなさんは勉強してゐる。国民とは言ひながら全てが政治のことが判るわけがない。だから民主主義といふのは、代議士を選んで、その連中に相談させ、その決定を以つて国民の世論とする約束ごとです。これが民主主義の根本的理念です。直接民主主義を唱へる人もゐますが、それは昔のギリシアのアテネの町で、声の届く程度の所で、五、六百人が集つてやったことを言ふのであつて、いくらテレビが発達したと言つても、直接民主主義は無理です。それから、よく主権在民と言ふが、これがまた誤解されてゐる。一億人の一人ひとり主権を行使するとなつたら大変でせう。その主権を行使する形は代議士を選出することだけです。あとはこの連中に任せるといふことです。これが代議政体の根本的な約束ごとです。

日本は階級国家ではない

スクラップすべき古い考への中に「階級闘争」の考へ方も入ると私は思ふ。いまの日本人の

考への根本のところはマルクスやエンゲルスの言ふ階級闘争の思想が入って来てゐるやうだ。会社で社員が社長の言ふことを聞かないのが、ハイカラだと思つてはゐないか。学校で先生や校長を吊しあげるのが、民主的だと思つてはゐないか。漠然とですがね。子供は親の言ふことを聞かない。弟は兄貴の言ふことを聞かない。かうしたことは階級闘争論の結果ではないでせうか。

『共産党宣言』の一番初めをみると“History of all hitherto existing societies is the history of class struggle”とある。「すべてこれまでの社会の歴史は階級闘争の歴史である」とんでもないことです。マルクスはローマ史と英国史を勉強しただけだ。なるほどローマや英国の歴史では妥当するかもしれない。ローマでは、貴族と庶民階級の二つに截然と分かれてゐたし、英国では“Two Nations”『二つの国民』といふ



政治小説があるくらゐですから、ローマと英国に関する限りはマルクスの言ふ通りでせう。それがどうして“all hitherto existing societies”のこゝろにたつたのか。

日本は階級国家ではない。それを具体的に考へてみて欲しいと思ひます。京都大学の田中美知太郎さんが「日本は階級国家ではないのだよ。なるほど日本にも階級がある。しかし日本人は一階と二階に住んでゐて、その間は梯子で繋つてゐる」といふやうな事を言つてゐる。階級流動性があるといふのです。太閤秀吉なんかは梯子を昇つて行つた典型でせう。私は日本の会社では階級闘争があるわけがないと思つてゐます。労働組合といふものと、社長や取締役との利害が対立するはずがない。会社の社長は以前に労組の委員長だった者が多いですよ。朝日新聞社々長の広岡さんもさうです。日本の社会においては階級によつて明確な仕分けが出来てゐるわけではない。階級闘争論は日本の社会に適用出来ない。この点をもつとみなさんに勉強して欲しいですね。

日本は祖先崇拜といふことを中心にした一民族一国家です。左の連中は何でも西洋のものを鵜呑みにして、日本のことを忘れてしまった。革新とは言ふが、実は革命党です。私どもは日本のことをまづ第一に考へようとしてゐる。この点が違ふのです。conservatismを「保守主義」と訳しますが、この訳はまづい。保守主義と言つてゐるうちはまだいいが、これにおまけがついて近頃は「保守反動」です。これではいかにもまづい。論語の中に「温故知新」といふ

言葉があります。全部新しいことで行かうではないかといふのが革命論で conservatism は古いことでもいいものはとっておく、さうしてそれに新しいものを付け加へて行かうといふことです。それが本当の保守主義なのです。このところが特に戦後はよく判つてゐないようだ。日本の歴史を知らないのですね。しかし、やっぱり偉い人物はゐるものです。トインビーですが、彼は「世界の歴史や文化圏は、西洋キリスト教の文化圏だけではない」と言つてゐる。ギリシア正教圏の他に、回教圏、ヒンズー教圏、それに極東文化圏の五つに分けて世界を見てゐる。トインビー先生は徳川時代の僧契沖のことなんか書いてゐる。マルクスが英国の経済だけを勉強したのとはわけが違ふのです。マルクスも「あらゆる世の中の社会の歴史」といはないで「私の知つてゐるあらゆる社会の歴史」と、かう言へばよかったです。階級闘争のとりこにならずに、はやくそれを卒業することが大切です。

まづ日本の歴史を勉強せよ

これから本気で物事をなさんとする時には、まづ第一に日本の歴史を読んでもらはないと駄目です。大体、西洋の文献は誤訳され、従つて誤解されてゐるのです。大学の先生だからといへ、皆が皆外国語が出来るわけではない。私は五年間、英国に滞在したが何にも判らないで

帰って来た。食事のお相手位はできませんが大切な話はまづ出来ない。私が驚いたのは昔の京都大学にマルクスを熱心にやっていた河上肇といふ先生がゐた。彼には『資本主義経済学』の史的発展』といふ立派な著書があるから、英語やドイツ語は出来るであらうと思つてゐたら、駄目なのですね。河上肇の出世作と言はれてゐる『貧乏物語』はなかなかの名文ですが、その一番おしまひのところ「どうかなあ」と学生時代に思つた箇所がある。アメリカのスマート先生『経済学者の第二思想』といふ本から引用してゐるのです。私は若かつたから、偉い人は自分の思想にナンバーをつけるのかと思つた。ところが、この本の原著の名を調べてみて驚いた。

“Second thoughts of an economist”。これは「エコノミストの反省」といふことです。初め (first) は思ひ違ひをする。それを反省するといふことが second thoughts といふことです。この引用文献名は『エコノミストの反省』と訳すべきものだったので。これが法学博士で、京都大学教授だといふのだから驚いたですな。かういふことは「その箇所だけだ」といふことにはならないのであって、その程度のイデオロギも知らないのでは、この先生の西洋文献紹介はどうなつてゐるのだらうかと思つた。みなさんも余程氣をつけて下さいよ。

そこで日本の歴史を読んでもらはなくはいかんと私は思ふ。しかし、なかなかいい書物がない。ラフカディオ・ハーンが明治二十年代に、西洋の物質文明にあき足りず、飄然として日本にやつて来た。松江中学の英語教師や第五高等学校の先生をやって、最後は東京大学で英

文学を教へてゐるが、この人の“Japan”といふ四一五〇〇ページの本は日本のことをよく書いてゐます。最近、平凡社から『神国日本』といふ表題で翻譯が出されてゐます。この本は非常にいいと思ふ。日本の国柄がいかに優れてゐるかとか、日本の真髓を西洋人の觀察ですが、よくまとめてゐる。ハーンは徳川時代のこととはもとより、古事記・日本書紀も英訳で読んで日本の昔からの国柄を書いてゐるのです。

階級闘争論が英国をダメにした

イギリスでは階級闘争論の結果、どういふことになつたかと言ふと、労働組合が非常に強くなりました。Trade Union Congress — 労働組合協議会 — といふのがあつて、保守党が政権をとらうが、労働党が天下をとらうが、このTUCのO・Kがないと賃金も決められない。そこでトインビーが亡くなる直前に「英国には二つの国があるのだ」といふことを『オブザーバー』紙に書いてゐる。Imperium in Imperio “国の中の国”、といふことです。「英国には国の中に国がある。こんな状態は永続するものではない」と。「天に二日なく、地に二君なし」と日本では昔から申しますからね。少し英国の話をする、私は若い頃五年も居りまして、なかなかいい国だと思つてゐた。しかし駄目になつた。その根本はマルクスです。マルクスはユダヤ

人で英国へ来て『資本論』を書いた。それでハイゲートといふ所に大きな銅像が建つてゐる。そのマルクスの階級闘争理論によつて、英国は十九世紀の終り頃から労働組合運動が非常に盛んになり、労働党が第一次大戦後の一九二四年に天下をとつた。それはすぐ退陣したが、最近では労働党と保守党は五分五分です。それで政局が安定しない。それから政府とTUCと経団連が相談しないと経済政策が決まらない。TUCは非常に強い。いつでもストライキで政府を脅かす。その結果、英国はすっかり貧乏になつてしまひました。

かつて満洲事変（一九三二年）の直後、「英国は金本位制をやめた」といふニュースで、日本は大騒ぎをした。当時、英国さまざまの人が多かつたから、その電報を訳した私たちが日銀の總裁から、そんな馬鹿なことはない、虚報ではないかと叱られたくらい、英国の影響力は大きかつた。その英国が落ちぶれたものですね。welfare state 「福祉国家」といふものをいふもののやうに日本人は思つてゐるが、これは駄目なのです。英国人は働かなくなつた。英国や日本みたいな国が働かなくなつたら、うまい飯を食へるわけがない。六月三日でしたが一ポンドが一・七ドルになつた。昔は四〇五ドルでした。そして世界の先進十ヶ国が五三億三〇〇〇万ドルの金を貸してゐる。日本も六億ドルを貸してゐるといふのだから、世の中は変はりました。これほど英国が落ちぶれた最大の原因は階級闘争の間違った考へ方にあると私は思ふ。

ドイツは早く方向転換をした。ドイツは第一次大戦のインフレで苦勞し、さらに共產主義の脅威を身を以って体験してゐる。半分は占領され、一、〇〇〇万人以上のドイツ人が捕つたといふこともあつて、しっかりしてゐる。英国や日本と違って階級闘争論に毒されてゐない。特にいまのシュミット首相の指導がなかなかいい。日本でいふ労使協議会みたいなものが非常に盛んで、組合も取締役会もなく一緒になつて物事を決めようとしてゐる。ストライキの件数は英国の十分の一だといふことです。といふやうなわけでドイツの経済は隆々たるもので、戦後の焼け野原から立派に立ち直つた。しかし英国の方はガタガタだ。その原因が階級闘争論であるといふこと。日本も大体、英国に似て来たやうだ。真似もほどほどにした方がいい。

明治の憲法と昭和の憲法

それから憲法の話をしませう。一体、法律とはどういふものか。まづ法の本質を考へて見ませう。ナポレオン戦争の後、一八一四年頃ドイツで民法をつくらうとした。その際にテボーとザビニーといふ二人の先生がえらい議論をした。テボー先生の意見は成文法学派と言はれるもので、法律とは法制局で作文をして国会を通れば成立するといふ形式論でした。ところがザビニー先生は、法律といふものは国の歴史・伝統・民族の慣行に基づかない限り、いくら名文を

練りあげても死文にすぎないと主張した。この考へを歴史学派といふのです。法律は言葉と同じといふ考へです。法律は行はれなければ無意味でせう。法律は自然に出来あがっていくもので、つくりあげることが出来ない。私は法の本質論としてはザビニー先生の主張の方が正しいと思ふ。

そこで日本国憲法だが、いまの憲法を平和憲法なんて言ってるが、どこの国へ行っても戦争憲法なんていふのではないですよ。とにかく今ではこの日本国憲法は悪口を言ふと法務大臣の首がとぶほどの勢ひです。だがそんなに立派な憲法であるかどうか、具体的に考へて見ていただきたい。この間まで東京にゐた『ニューヨーク・タイムス』特派員のハロラン君が「明治の人は実に偉い。あんなに多数偉い人がほとんど時を同じくして現はれたことは世界の歴史にならぬ」と言ってるのです。そのハロランが「明治の憲法は非常に良かった。昭和の憲法は日本の政治的な現実とは何の関係もな^く hodge podge—「た煮じあ^へ」の “Japan, Images and Realities” に書いてゐます。

明治の憲法は随分苦勞して出来たものです。維新後、さあこれからの日本をどうやっていかうかと考へた。明治九年九月六日といふことになってゐますが、明治天皇が有栖川宮熾仁親王をお召しになりました。「朕、建国の体に基づき国憲を定めんとす」と、お述べになった。とは言へ宮さまが直接におやりになるわけではないから、内大臣の岩倉具視公に「ひとつ憲法を作ら

う」と仰言つて、この人が陛下のお言葉に従つて憲法をつくり始めた。その際に、やはり憲法だから形は西洋の真似をしなければならぬといふことで、お雇ひ外人に原案をつくらせた。けれどもそのためには「日本の歴史を読ませてから」といふことになり、幕末にオランダ留学をして帰国してゐた福羽美静びせいと西周あまねにドイツ語で日本歴史を書かせた。簡潔に、しかも西洋人にも判るやうに。この二人で『大政紀要』といふのを書きました。これを、まづ読んでもらつた。そしてヘルマン・ロイスレルが『憲法意見概要』といふものをつくりあげた。憲法制定まで何年かかつたと思ひますか。明治九年の陛下のお言葉から明治二十二年二月十一日の發布まで、十三年の歳月をかけた。よく丹念に勉強したものです。

どういふ志で帝国憲法をつくつたか。憲法起草の主任格だつた熊本出身の井上毅の三十一文字があります。

とつくにの千草の糸をかせぎあげて大和錦に織りなさましを

「とつくにの千草の糸」、いろいろ外国の糸を集めて、アメリカ人絹ではなくて、大和錦を織るといふことです。従つてザビニー先生の言ふやうに日本の歴史・日本の伝統・日本の慣行に基づいた内容に西洋の服を着せたといふことです。そこに苦心があつたのです。

ところが昭和の憲法、日本国憲法は、左翼の連中は「平和憲法」とか言つて騒ぐけれども、余程出来の悪いものです。ハロラン君は「明治憲法は西洋の政治的な仕組みを日本人の政治的

思想にうまく咬み合はせた大變に立派な文献である。そして純粹に日本的な文献である」と書いてゐますが、現憲法は、日本の歴史・政治・伝統についてほとんど知識のなかつたアメリカの兵隊どもの監督の下に、一週間で書きあげた、ハロランの言ふ“Hodge podge”なのです。雑炊、ごっちゃ煮といふことで、日本国憲法は「一夜漬のちゃんこ鍋憲法」なのです。

憲法の話になると、すぐ第九条が話題になるが、もちろん第九条はけしからん内容だが第八条だつてお宅へ帰つてご覧になつて下さい。珍無類ですよ。友人の井手成三博士が次のやうに書いてゐる。「皇室に財産を譲り渡し、または皇室が財産を譲り受け、若しくは賜与すること、は、国会の議決に基づかなければならない（第八条）。この条文は皇室の間の贈与、売買、交換、すなはち財産の譲り渡し、譲り受けについては国会の議決を要することを規定した条文であります」。かういふ無茶な規定といふのはちよつと珍らしい。世界のどこにもない。大きな鯛が釣れました。あまり立派だから陛下に献上しませうと漁業組合の組合長さんがモーニングを着込んで宮内庁の受付に現はれても、さう簡単にはこの赤誠を嘉納するわけにはいかない。宮内庁は内閣を通じて国会に諮らなければならぬ。国会が議決して陛下に差し上げやうとしたら鯛は「腐つてゐた」。さういふ珍無類の条文なのです。むろん皇室経済法で一定の金額までは除外例があります。ところが實際にあつた話ですが、皇太子殿下のご成婚の時、ホノルルの邦人達がキャデラックを一台差し上げたいといふことになつた。これは国会にかけなければ

いけなかつたさうですが「うるさいから頂戴しない」といふことに落ち着いたのです。

第九条は、どうしても自衛隊の悪口を言ひたい者が大勢ゐるのなら、残しておいてもいい。としてもその他にも直すべきことが山の如くあるのだから。誠にお粗末な憲法です。一週間では無理だ。しかも共産ロシアが日本の占領行政に口を出す前につくってしまったといふことになって、二、三人の日本人を司令部に任詰にして翻譯させた。翻譯と言ひたいけれど實際は誤訳ですね。妙な日本語が多い。さういふものを後生大事にしないで、もう三十年も経つのだが、やり直すべきだと私は思ふ。

いい加減な八月十五日、革命、説

さすがにドイツ人は偉いですよ。占領中はまあいいや、これで我慢しようといふことで西ドイツ基本法をつくつたが、その最後に「自分達が自分の意思決定によつて憲法を制定する時が来れば、これは自然に廃棄されるものである」といふ旨の一条を付けてゐる。占領下でも、それだけのことをしてゐる。そして教育制度にも手をつけさせなかつた。「教育のことはお前らアメリカから聞く必要はない」。

いまの憲法が出来る時に非常にもめた。日本国憲法草案が枢密院にかかつた時に、みんな腰

抜けて、一人を除いて全員賛成した。その一人とは美濃部達吉といふ東京大学法学部の先生です。帝国憲法第七三条に憲法の修正を規定した条文があるが、今の憲法はこれに則って改正されたといふ体裁をとった。この条文は、屋根が漏ったから屋根を葺くとか、ガラスが壊れたからガラスを入れるといふやうな部分的修正を定めたものでした。ところが日本国憲法は帝国憲法を全部やめにしたものだ。そこで美濃部先生は「帝国憲法を全てやめにして、全く新しい西洋かぶれのを、第七三条によって認めよと言はれても、それは出来ない。私は永い間、大で憲法を講義して来たから、たうてい賛成するわけにはいかない」と反対した。これは昭和二十一年四月二十二日のことです。「もし憲法をつくり直さうといふのであれば、主権在民とお前達が言ふのだから、国民代表会議でも作って起草すべきだ。そして最終の確定案を以って国民投票に掛ける。それが適當ではないか。第七三条を無理に解釈して、我々に押し付けようとするものに賛成することは出来ない。このやうな虚偽を憲法の冒頭に掲げることが国家として恥づべきことではないか」。私は非常に感銘をうけました。

実はもう一人をりました。枢密院議長の清水澄先生です。昭和二十二年五月三日に日本国憲法が施行されたが、その日に書き置きを書いてをられます。「これではとても駄目だ。妙な憲法が出来たけれども、自分は微力で、これを喰ひ止めることが出来なかった。そこで自分は屈原の故事にならって水中に入って死に、幽界から国体を守るのだ」先生は八〇歳でした。そして九月

二十四日、熱海の少し東の魚見崎で身を投げられました。

私が学生の時に憲法を担当してくれた両先生ですが、この偉い先生がお二人とも「駄目だ」と言ふのですから、私はいまの憲法に賛成出来ない、早く直してもらひたいと思つてゐる。ところが不肖の弟子と言ふのか、美濃部さんのお弟子で「日本国憲法はまことに結構だ」と言ふ人がゐるのです。差し障りがあるかも知れませんが聞いて下さい。東京大学法学部の教授だった宮沢俊義といふ憲法学の先生です。『日本国憲法生誕の法理』の中で、法の解釈として帝国憲法第七三条では無理である。そこで昭和二十年八月十五日に革命が起つたと解釈する以外に、日本国憲法を法律的に合法化することは出来ないと言ふのです。しかし、かういふいい加減なことでは困る。八月十五日は「革命」ではなく「敗戦」でせう。とんでもない説です。それで平和憲法擁護を主張する連中は、日本の国体が革命によって変つてしまつたと思つてゐるらしい。小林直樹といふいまの東京大学の憲法学の教授の意見もひどいもので、象徴天皇制までも廃止しろといふやうな暴論を吐いてゐる。

法律なんかどうでもいい。革命が好きだと言ふのなら、それでも結構なことだが、それで日本の国がやっていると申すかどうかです。二、〇〇〇年の歴史の中に育つて来た天皇制といふものをなくしてやっていると申すか。平山孝さんといふ鉄道省の次官をした人が孫と対談してゐる本を読んだのですが、その中に「ドイツに留学してゐた時、ドイツ人がお前さんの国はいい国だな

あ。「Kern Punkt」核心があるから、それで非常にやりいいのだ。ドイツには、それが無い」と羨しがられた話が出て来る。「核心（へそ）がないからヒットラーのやうなのが出て来る」と。中共だって大分無理してゐるやうだが毛沢東といふ「へそ」があるから何とかまとまって来た。ロシアでもレーニンは神様扱ひではないですか。どこの国でも何かがないと駄目なので。それをうまく無理をせずにやって来たのが天皇制度です。これをなくしてやっていけませんか。成田知己さんや宮本顕治さんにこの役目を頼むわけには参りませんからね。

さう思つてゐるところ福沢論吉が、彼は新聞の方でも偉い人ですが、明治十五年に書いた『帝室論』の中に次のやうに記してゐます。「王室の功德は共和国民のえて知らざるところなれども、その風俗、人心に關して有力なるは挙げて言ふべからず。人あるいは立君の政治を評して人主が愚民を籠絡するの一詐術などと笑ふものなきにあらざれども、この説を出すものは畢竟政治の艱難に逢はずして、民心の軋轢の惨状を知らざるの罪なり。」維新後の佐賀の乱とか西南の役なども、天皇制の下で収めたのだといふことを言つてゐるのでしよう。さらに「青年の書生輩が二、三の書を腹に納め、いまだその意味を消化せずして、直ちに吐くところの言葉なり……」と。福沢先生は予言してゐますね。小林直樹先生もこれを良く読んでもらひたいと思ふ。

教育勅語

教育勅語についてもお話しませう。お若い方はご存知ないでせうが、明治十一年の夏から秋にかけて、明治天皇が東山道・北陸道・東海道をお廻りになりました。そこで非常にご心配なさいまして、一体、教育や道徳はどうなつてゐるのかといふことになった。文明開化といふことで、何でもかんでも捨ててハイカラになつてゐた時代です。そこで宮中にお帰りになつた際に、熊本出身の侍講元田永孚先生をお召しになつて、「教育・道徳は、どうなつてゐるのか」とお聞きになった。その時、元田先生が恐縮して書きあげたのが『教育大旨』それから『幼学綱要』。それから薩摩出身の森有礼と先ほどの井上毅との三人で、日本国民の教育道徳の大方針を確立しなくてはいけないといふことになった。森有礼はハイカラだから「バイブルでどうだらうか」、元田先生は漢学者だから「論語で行かうではないか」。いろんな議論を経て、とどのつまり井上毅あたりの意見でせうか、「日本には世界に類例のない特有のものがある。万世一系の天皇制度がある」といふことで、国体教育を基礎にして書かれたのが教育勅語です。

漢文調の名文ですから、子供の時は意味は判らなかつたが、校長先生が読んだのが耳に残つてゐます。それが明治・大正・昭和と三代にわたつて日本人の心と国民教育の基礎になつて来たのです。だからこれは消えない。日教組の悪口を言ふのはやさしいが、それでは一体、日本

の教育の基礎はどこにあるのかと問はれた時に、こちらの案を出す人は少ないが、私は教育勅語をいま一度読み直してみたらいいだらうと思つてゐる。

昭和二十三年六月十九日ですが、参議院と衆議院で「教育勅語の廃棄」の決議をしてゐる。「教育勅語その他、陛下の詔勅の根本理念が主権在君並びに神話の国体観に基づいてゐる事實は明らかに基本的人権を損ひ、かつ国際信義に対して疑点を残すものである」といふのが決議の内容。明らかでない時に限つて、「明らかに」などと書くのですね。当時、全国の小学校には教育勅語の謄本が残つていました。それを全て焼却させた。それ以来、教育勅語の話をする
と保守反動と言はれます。さあ、そこで教育勅語の内容だが「爾臣民、父母ニ孝ニ、兄弟ニ友
ニ、夫婦相和シ、朋友相信シ、恭儉己レヲ持シ、博愛衆ニ及ボシ……」とあります。一体どこ
がいけないのか。この教育勅語が基本的人権を侵害するといふのは全く理解できない。戦後の
教育基本法は一見、非常に良く出来てゐるやうだが、少なくとも日本の教育基本法ではない。
単なる作文ですから、どこの国へでも持つて行ける。

デモクラシーとリーダーシップ

民主主義においては先ほどお話したやうに代議政体ですが、もうひとつ大切なことはリーダ

ーシップです。デモクラシーの主張に対して、ヒットラーは「指導者原則」を主張した。しかし、これは両方なければ駄目なのです。自由だけでは民主主義は駄目だ。規律がなくては、主権在民とは言ってもリーダーシップがなくては駄目なのです。大衆は必ずしも利口といふわけではないから。指導する人間が出ないとうまく行かない。リーダーシップは世論と同じやうに不可欠です。またフリーダムと同じやうに規律も欠くことが出来ない。その点を全く無視してゐるのが日本の現状だ。そこが日本の民主主義のひ弱なところだ。いまの日本には指導といふものがないでせう。人の言ふことなど聞かうとはしない。この点が考へるべき第一点です。

それから、もうひとつ考へなければいけないことは welfare state 福祉国家といふことです。今次の戦争の時、オックスフォードのピバリッジといふ先生が、ケインズの完全雇備論をさらに進めて、政府は「ゆりかごから墓場まで」国民の面倒を見なくてはならないと言ひだした。英国人は歯を磨かなくなったから五十になるとみんな入歯ださうです。そこでイギリス人は働かなくなりました。welfare state の思想は大変結構ですが、そのやり方が難しい。いま、東京では、私達もバスの無賃乗車券を貰ひます。しかし使ひません。いままで共産党は、資本主義は軍備の重荷で潰れると言つていたが、最近では福祉施設の重荷で潰れると見てゐる。ニューヨークがさうでせう。日本もさうなりつつあります。どこの市町村へ行つても福祉施設のために赤字財政です。そして同時に国民が働かなくなつて来た。こゝらで福祉国家に対する

見直しをしなくては駄目です。

自由主義とは一体どういふことですか。それはアダム・スミスに帰ることだと思ふ。“Natural system of liberty”「天然自然の自由の体制」といふ言葉がアダム・スミスの“Wealth of Nations”の第四巻の終りのところに出てゐる。政府は余計なことをするな。国民は自分のことは自分でやるのだといふことです。これが自由主義経済の大原則です。去年亡くなった石坂泰三さんがうまいことを言つてゐた。「お役所は余計なことをするな。泥棒を捕へることに火を消すことだけで結構、あとは俺達民間人でやるから」と威張つてをりました。この自由主義経済体制の本質を忘れて、何でも政府にぶら下らうとする。その結果どうなるか。little government から big government となる。政府は少人数でいいのです。余計なことをしなければ。アダム・スミスは軍備と司法警察と民間人が到底手の届かない大掛りな土木工事（当時は鉄道、いまの宇宙開発）をやるだけで、その他は全部民間に任せよと言つてゐる。ところが、だんだん役人が多くなって、アメリカでもいま問題化してゐる。カーターみたいな田舎者が当選するのはワシントン中心の big government に対する反感だと言はれてゐる。日本もいまの行政の体制について根本的なメスを入れないと駄目です。昔、台湾・樺太・朝鮮・満洲と広い国土でしたが、役人の数は今よりも少なかったでせう。ですから税金は増えるばかり。松下幸之助さんのお話では、昭和十年に比べて、物価は一、〇〇〇倍になってゐるさうです。大学出の人

の給与は一、三〇〇倍。ところが政府と自治体の経費は一、一〇〇〇倍にふくれ上がつてゐる。いまは二万倍になつてゐるでせう。これから先、どこまで増えていくのか判らない。この際、little government の観念で、もうお役所仕事は能率が悪いに決つてゐるのだから、少なくとも少なくていい方がいい。行政の膨張を手直して行かないと日本は破産してしまふと松下さんは主張してゐるのです。私も大概そのやうに思ふ。welfare state の考へを改めなくてはいけない。いまや、それは世界の大勢です。日本ではまだ「福祉国家で老人の面倒を見ろ」なんてお婆あちゃんたちが金切り声をあげるのがはやつてゐるでせう。あれは時代遅れですよ。英国でもアメリカでも福祉国家の体制について根本的な反省が始つてゐる。

かういふ大事なことを言つて一世を指導するのがリーダーシップです。ところが日本にはどこにもリーダーシップがない。uncertain trumpet といふ言葉。コリント前書に出てゐます「ラッパもし定まりなき音を発せば誰が戦闘の準備をなさんや」といふのですが、日本には一世を指導するラッパ吹きがゐらないといふことです。

では民主主義国家においてラッパを吹くのは誰かといふことだが、政党内か政治家ですね。政治家は英語で言ふと statesman と politician のふたつがあるが、日本の連中は自分で政治屋とか言つて、先生なんて呼ばれてニコニコしてゐる。政治屋なんでもんじゃなくて、当選屋です。ですからこの連中にリーダーシップを期待することは出来ない。今度のロッキードの

ゴタゴタをご覧なさい。本当にとんでもない連中ばかり集ってゐる。もっとも国民もさういふ悪いのばかりを選んでゐるのですがね。

無責任な日本の言論機関

もうひとつ責任があるのは言論機関です。言論機関は民主主義社会において極めて重大な責任を負ふてゐるのですが、いまの日本においてはとくにこの言論機関が非常に出来が悪い。エドモンド・パークといふ約二〇〇年前の英国の偉い思想家が、議会には aristocracy 貴族、clergy 僧侶、commons 平民（ブルジョワジー）の三つの権力があると云つたのに対して、文豪のトーマス・カーライルが「いや、第四の権力がある」と云つた。そして「議会の記者席に座つてゐる新聞屋どもの権力は絶大なものがある」と言つてゐる。普通、権力の存する所には必ず義務が伴ふ。これは古来からの鉄則である。ところがどんなに権力を奮つても一切の責任を負はないで済む、しかも偉い力を持つてゐる化け物が現はれた。それがジャーナルだとブライス卿がモダンデモクラシーに書いてゐるのです。日刊新聞のことです。その後、テレビジョンといふものが出て来た。このマス・コミュニケーション・メディアの力は絶大だ。ところが言論機関としての役割を果たしてゐません。

たとへば田中角栄先生の事件を採り上げてみませう。いまは「田中はけしからん」「前にも炭鉱国有で引っぱられたではないか」などと言つてゐるが、四年前の昭和四十七年七月五日に彼が総裁になった時は、小学校出の初の宰相といふことで「今太閤だ」なんてほめたたへた。あの自民党総裁選挙の際に三〇〇億の金が動いたと言はれてゐる。『タイム』といふアメリカの雑誌はこれを Money Game「黄白合戦」と評した。さういふことはロッキード事件で明らかになりましたが、それまでマスメディアはよく知つてゐても書かない。書けない。結局は『文芸春秋』の田中角栄研究にやられた。この文春の記事が出たあとでも新聞は書かなかつた。ところが、運が悪いといふか、田中さんが外人記者協会の会見に行った。外人記者は遠慮会釈なく質問した。その結果、日本の記者もやうやく田中角栄の金脈と人脈について追跡をやらざるをえなくなつたといふわけでした。この時、はやつた川柳に「あら不思議、日刊が月刊の後を追ひ」といふのがありました。

日本列島改造論といふのは、昭和六十年における世界の十二億三億キロリットルの輸出可能石油のうち、七億五〇〇〇万キロリットルを世界の人口のわづか三%の日本に持つて来るといふのが前提になつてゐる。これは無茶ですね、さらに北方領土問題です。昭和四十八年十月モスクワ訪問の時ですが、北方領土については「継続交渉」になつたと新聞に出てゐる。共同声明の中に「日ソ両国間における未解決の諸問題」とあるのを、ソ連側では領土問題を入れてい

ないのに日本はその中に領土問題が含まれてゐると読んだといふのです。もともと共産党は力の信者です。日ソ中立条約を一方的に破棄して火事場泥棒的に攻めたのも、もう満洲はガラ空きた、日本は潰れさうだと読んでのことです。チャンスだと思へば条約などに拘泥しない。いまソ連は無力になった日本には全然関心がない。北方領土を取戻したかったら取りにいらっしやいと言つた具合です。北方領土の返還交渉には絶対に応じないでせう。

どうして日本の新聞は本当のことを書かないのでせうか。ロッキード事件についても、田中・ニクソンのホノルル会談（昭和四十七年八月三十一日～九月一日）が関係あることは、この年の『タイム』（十一月十三日号）に詳しく書いてある。その時、日本はドルが余つてゐた。ニクソンはわざわざハワイまで出掛けて来る。何か頼むことがあつたのですね。自分は大統領選挙に出るし、ロッキード社から献金してもらはねばならなかつたから、「ひとつ田中君、このロッキードはいま潰れかかつてゐるから、トライスターと、出来ればPXL対潜哨戒機を買つてくれ」と話したのでせう。九月中旬になってヒース英首相が来日したが、彼も「ロッキードを買つてくれ」と言つたらしい。ロッキード社の飛行機が積んでゐるエンジンはロールス・ロイス製です。これも潰れかけてゐる。それで田中さんも気分が良くなつて「よからう」と言ふことになつたのでせうが、このことは悪いことでも何でもない。事実、ロッキード社の飛行機は性能がいいさうです。ただ、金を貰つたのはまづい。これとても言論機関が目を光らして

事実を書いてくれなくては困るのです。このやうな大げさになる前に田中を反省させるやうにするのが言論機関のつとめせう。

福沢諭吉とジャーナリズムの本領

ジャーナリズムの本領はどこにあるか、といふことについて英国の記者が書いてゐる。“To report honestly”「正直に報道する」。「いまの日本の新聞は正直ではない。“To comment fearlessly”「恐れることなく批判を書かなくてはいけない」。「それから “Hold fast to independence”「自主独立の立場を守る」」。金銭で筆を曲げるなんてとんでもない。

この点で福沢諭吉は偉かった。明治二十四年六月、『言海』といふ辞引を大槻文彦が書いた。その出版記念会の回状に発起人として内閣総理大臣の伊藤博文と福沢諭吉の名があった。福沢先生の肩書は慶応義塾か『時事新報』社長かのどちらかだったせう。それを知って福沢先生は怒ってしまった。「世の貴顕なるものと伍を成すを好まざるにつき」「俺の名を削れ後世に残ると恥をさらすことになるから、回収せよ」と敵命したさうです。福沢先生は、国民の指導は教育だといふことで、まづ学校を始めた。つぎに新聞に目をつけた。さうして明治十五年三月一日に『時事新報』を創刊したのです。その際に記者に次のやうなことを言つてゐる。

いまの記者が聞いたらびっくりするやうなことです。「ニュースは遅れてもよろしい。そんなにハチ巻をして駆けずりまはる必要はない。しかし間違ふな。間違ふと信用を落してしまふから、遅れてもいいから間違はないでもらひたい」。さらに「よその社と同じ社説なら書くことはない」。いまの日本の新聞の記事はみんな同じです。違ふのは将棋欄ぐらゐなものだ。言論の自由といふが、みんなが同じことを書くのなら無意味です。よその社が原子力船「むつ」に反対だと言ふ時に『時事新報』まで反対と書くことはないか。その時に「いや、原子力船賛成」といふ議論が成り立つならば原子力船についての社説を書いてよろしいと福沢諭吉はさういふのです。それから「新聞記者は見識をもたねばいけない」とも言つてゐる。見識といふのはペコペコするなといふこと。大臣や財界の首脳と対等の意気込みを持たなければならぬから、チンチン電車なんかに乗らずに人力車で行け。『時事新報』では、月末になると人力車に払ふ謝礼が記者たちの月給の何倍にもなつたさうです。

かういふのを私は言論人の本領だと思ふ。これがいまの日本の言論界には全然ない。そして政治家から時に買収され、ごますり記事を書いて今日に至つてゐる。この姿勢を直してもらはない限りは、なかなか日本の政治・経済・その他を正すことは出来ない。いはんや憲法改正なんか出来やしないと考へてゐる。ではどうするか。いい妙案はないが、私は小さな新聞で正論を吐く。コマーシャルになるといけませんからこゝら辺で終ります。



青年研究発表

私の社会人生活を支へてゐるもの

日立造船有明工場勤務

高岡正人



(朝の体操)

御紹介にあづかりました日立造船に勤務してをります高岡でございます。昭和四十九年に大学を卒業して、はや、三年目を迎へようとしてをりますが、私の社会人生活を支へてゐるものは、やはり大学四年間の友達との付き合ひ、そしてこの国民文化研究会の合宿で学んだものであります。私の社会人生活は、それらのものを切り離しては考へられません。

私が大学に入学したのは昭和四十五年で学園内には、まだ学園紛争の余波が残つてをりました、毎日のやうに安保粉碎、大学法案粉碎といふスローガンのもとに、ストライキや学生集会等が行なはれてをりました。入学当時、私の心の中にありましたのは、四年間の大学生活の内に、自分の生き方を見つける事であり、心ゆくまで実のある学問をしたいといふことでした。さういふ私にとって、目の前で展開されてゐる学園紛争は、避けては通れない問題となりました。私は大学に入ったばかりで紛争に対してどう考へ、又どう対処して行つたらよいか解りませんでした。周りの友達や先輩に尋ねても、はつきりと反対するでもなく、又賛成するでもなく、只、「彼らの考へは解るけれども行動には賛成できない。」あるひは、「俺には余り興味がない。」といふ言葉だけが返つて来ました。そして私は麻雀やパチンコにうつつを抜かし、勝手気ままな学園生活をしてゐる学生の中にあつて、真剣に何かを考へ、そして行動してゐる人々を見るにつけ、彼らの前を素通り出来なくなつていつたのです。その頃の私は、何かに自分を賭けて一生懸命にやつてゐる彼らの姿を見て、何の思想もなく、又理想もなく過ごして来

た私自身が堪らなく惨めになった事を覚えてゐます。しかし、その反面、私にはいくら考へても彼らの行動が正しいのか、それとも誤つてゐるのか、結論は出て来ませんでした。だからと言つて充分理解出来るまで手をこまねいてゐても、結局は何も出来ぬままで終つてしまふといふあせりにも似た気持ちで、その善し悪しも解らないまま、私は学生運動の渦の中に飛び込んで行きました。さうして機動隊の盾の間に挟まれ、シュプレヒコールを喉が枯れる程繰り返してデモをやつてゐる時、初めて社会の中に自分といふ存在があるんだといふ実感が湧いて来たものです。

しかし、デモが終り集会が終つた後、三々五々仲間と別れて行く時、何か無性に空しさだけが残りました。周りの友達にストライキに参加するやうに誘ふ時、別に反対する訳ではないのですが、皆避けてしまひます。そのうち私の周りから次第に友達は遠ざかつて行き、私にはどうしようもない淋しさと、苛立ちが立ち込めて行きました。彼らは大学から処分されるのが恐いのだ。警察に捕まるのが恐いのだ。何の為に大学に入つて来たのだらう。日本の将来の事を考へ、社会の役に立つ為に学問をするのが大学生の使命ではなかったか。多くの我々と同じ年頃の人々がすでに社会に出て働いてゐるといふのに、学生といふ立場に甘へて自分勝手な事ばかりしてゐて良いのだらうか。さう思ふ反面、私はどうしようもない、このやうな孤独感から抜け出して、周りの友達と楽しく学園生活を過ごさうかと何度も思ひました。そして自分の思



ひをじっくりと語り合へる友達もゐないまま、次第に書物が私の話し相手となつて行つたのです。

○
そんなある日、名も知らぬ人から一通の手紙を受け取りました。実は学内で文化講演会があつた時、アンケートを出したのがきっかけで手紙が来たのです。私は早速授業が終つた後、手紙の地図を頼りにその人の下宿に行きました。そこには二、三人の学生の方と社会人の方が、一生懸命一冊の本を交互に読んでをられました。本棚には書物がぎっしり並べてありました。それまで下宿といへば教科書以外には週刊紙とか漫画しか置いてない、さういふ生活に馴れてしまつてゐた私は、真剣に何かを勉強してをられる姿を見て非常に驚きました。最初私は、これらの人々が一体何をしてをられるのか解りませんでした。そして学生の方と一

緒に勉強してをられる社会人の二人の方を見るにつけ、ますます不思議に思ひました。実はその方々は週に一回書物を共に読んだり、和歌を作ったり、研究発表等の営みを続けてをられてゐたのです。そして社会人の方は、二人共学校の先生で、毎週、車で一時間もかかる所からここまで来られてゐたのです。そこで私は、いろいろと話し合つたのですが、最後には随分言ひ合ひになり、酷く叱られました。その時、私は次のやうな事を言はれたのを覚えてゐます。

「友達が一人や二人遠ざかつて行つたからと言つてメソメソするな。男が一旦かうと思つたら足を一步踏み出さない。そこから道は自然に開けて行く。もし、その道が間違つてゐると氣付いたら、そこから引き返せば良いじゃないか。それは絶対、無駄になりはしない。我々の一生は机の上で設計図を書いて、そしてその通りに進んで行けるやうなものではない。すべては試行錯誤の繰り返しだよ。さうしてゐるうちに千人の内一人か、あるひは一万人の内一人かわからないが、自分の志が解つて付いて来てくれる人がきつとゐる。その事を信じてやつて行かうじゃないか」。それまで友達や先輩と言ひ合つた時は、いつも理屈のやり取りとなり、空しさだけが残つてゐましたが、その言葉を聞いた時は、相手の人が自分の事を心の底から心配してくれてゐるやうに思はれ、心に力が充満して、「やるぞ」といふ氣持が湧き起つて来たのを覚えてゐます。かうして私は、学生運動をやってゐる人々以外にも、何かに向つて一生懸命やつてゐる人々を發見する事が出来たのです。

初めて参加した七年前の夏の合宿も、その先輩に勧められたのがきっかけでした。合宿では今まで私が経験した事もなかったやうな事ばかりで非常に当惑してしまひました。ただ、そこで多くの事が私の心の中に残りました。その一つは皆さんのお手許の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」といふ御本の中に、「共に是れ凡夫のみ」といふ言葉があります。私はそれまで口先ばかりで一向に行動が出来ない人々を蔑み、自分は正しい生き方をしてゐるのだ、大学の殆どの学生は間違つてゐると一人うぬ惚れてゐましたが、この言葉に触れた時、今までの自分が取づかしくなつた事を覚えてゐます。そして合宿を開催された学生の方や、社会人の方が学生運動をやつてゐる人々以上に真剣であるといふ事、しかも、そのやうな人々がこんなにも全国各地にをられるといふ事が非常な喜びでした。今まで国といふものを政治体制や経済体制からばかり考へ、又共産主義をイデオロギーの上からばかり考へ、天皇といふお方についても制度上から統治者といふ形でばかり考へて来てゐたのですが、それらすべてが私達の現実生活の体験と切り離せない関係の中で論じられてゐる事に非常な驚きを感じました。

例へばある先生が、「共産主義に打ち勝つ為には、乱れた靴や下駄を並び変へるやうな優しい瑞々しい情緒があれば充分だ」と言はれた事など本当に驚きました。又初めて天皇の作られた御歌に接した事も新鮮な感動でした。今まで天皇といふお方の在りの儘の姿に接した事の無かつた私は、次の御歌を読んだ時、天皇といふお方の存在が非常に身近に感じられました。

それは江戸時代の桃園天皇の御歌でした。

身の恥も忘れて人になくれと問ひ聞くことぞさらにうれしき

新まくら待ちえてかはす今宵より世を隔てじと契るうれしき

一首目は、天皇といふ地位にありながら自分の知らない事を人々に聞くといふ事は、こんなにも嬉しい事かと歌はれてをります。そして二首目は、長い間待ってをられた最愛の人とやると今夜から共に生活をやって行かうと契りを交はした事が、大変嬉しいと歌はれてをります。この歌で私は初めて天皇の真の姿を見たやうな気がしました。このことをはじめ、合宿での経験は私にとって一つ一つの事が大きな驚きでした。そして何よりも私の力となったのは、真に語り合ふ事の出来る数多くの友達が出来たといふ事です。

○

さらに合宿が終り大学に帰った私にとって、一つの転機となるやうな事が起こったのです。それは水俣病裁判の時の事です。その裁判には、水俣病患者の方も出席されてゐました。(私は合宿が終ってもまだ学生運動家たちと一緒に行動することもあったのです。)私達は各々「裁判

勝利」等と書いたブラカードを持ち、ステッカーを貼り、マイクでシュプレヒコールを繰り返してゐました。裁判官が来られ、「ブラカードを納め静かにして下さい。静かにしなければ裁判はしません」と言はれました。人々を裁く神聖な場所は、静かに厳肅であるべきです。然しながら仲間はかえってヤジを飛ばしたり、シュプレヒコールを繰り返しましたので、裁判は何時になつても始まりませんでした。ついに患者の方の中から「我々は疲れてゐるのです。早く裁判を受けたいのです。ブラカードを納めて静かにして下さい」との声が上がりました。しかし、彼らは依然としてやめません。私はその時、彼らは何をしようとしてゐるのかさっぱり解らなくなりました。水俣病患者の方々が裁判に勝つやう応援に来てゐるのに、患者さん達が何度頼んでも耳に入れようとしないとは、私はその時、彼らと一緒にやって来た事が何であつたのか初めて解つたやうな気がして来たのです。自分達の主義主張を通す為に、最初から水俣病裁判を利用しようとしてゐたのか、あるひは最初は素直な優しい気持ちだったのだが、いつしかそれを忘れて自分達の主義主張を通す事だけに躍起となり、終には他人の忠告にも耳を貸さなくなつてしまつたのか、私はそれまで彼らと行動を共にしながら常に抱いてゐた多くの疑問が、その時解けたやうな気がしました。授業の最中にマイクで演説をやつてゐた事、平気で校舎のガラスを割つたり、ピラを壁一面に糊付けしたりした事、そして仲間同士で内ゲバ事件を繰り返した事などが次々に心に浮んで来ました。そこでは大勢の人で構成された

グループ組織の中に自分を埋没させてしまひ、逆に組織を自分の隠れ蓑に使って生きてきたのではないか、私はそこで、彼らをしてそのやうにやらせてゐる思想といふ物が初めて解つたやうな気がしました。私はその後二度と彼らと行動を共にしなくなつたのです。

○

私はその後、私を合宿に誘つてくれた人々と週一回集まっては共に勉強をし、講演会を開いたりピラを配つたりして新しい活動にはいりましたが、それまでの左翼の学生運動とは、本質的に異なる所がありました。「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の御本の中にもありますが、万葉の歌人であります山上憶良が

父母を 見れば尊し 妻子めこ見れば めぐしうつくし 世の中は かくぞことわり……

と歌つてをりますやうに、お父さんお母さんを見れば大事にしなければいけないなあと思ひ、又妻や子供を見ればいとほしく可愛いと思ふやうな人間の素朴な気持ち、それが社会生活を形造つてゐる根本だといふ事がしみじみ解つて来ました。どうして人を愛する事が出来な人が国を愛する事が出来ませうか。そして左翼の人達がよく言ふ小市民的とか、ブルジョアとかプロレタリアとか、人を不自然に規定して行動を進めて行くことの中からは、真に国を動

かす力は生まれない筈だと思ふやうになつたのです。

さうしてイデオロギーに捕はれる事なく集団の力を頼りとしないうで自分自身で考へ、そして行動して行く。集団の力で主張を通して行くのではなく、一対一の真剣な付き合ひの中から相手と心を通じ合はせ、又お互ひに研鑽を高めて行く。そして心の通じ合つた人が、更に他の人と心を通じ合はせて行く。しかも人間としての健全な営みをしながら国の事を考へ、又一人でも多くの志ある人を求めて行く。かうして「共に是れ凡夫のみ」といふ自覚の下に「和」を広げて行く、これこそが日本といふ国そのものの姿ではないか。一人一人がかういふ気持を心にたたへてお互ひに「同胞」^{はらからう}であるといふ実感を日本人全部が持つやうにして行きたい。それは地味な活動であり、遅々として進まない歩みかも知れない。しかし、そこには確かな足跡が残つて行く筈です。私はこれこそが私の踏み行なつて行くべき道だと確信したのです。

かうして大学を卒業し、日立造船といふ会社に入つて早や三年目を迎へようとしてゐます。造船所といふところは多くの種類の作業を統一する為に、あらゆる物がシステム化されてゐます。しかし、物はシステム化された中を動いて行きますが、人間の心はシステムでは動きません。立派な仕事、やはりそれは朝会つた時の気持ち良い挨拶の交はし合ひであり、信じ合ひ、助け合ふ中からしか生まれて来ない。私はさう信じながら毎日毎日働いてゐます。

私は去年初めて世界でトップの油運送会社エッソスタンダードオイル社向けの、四十万トン

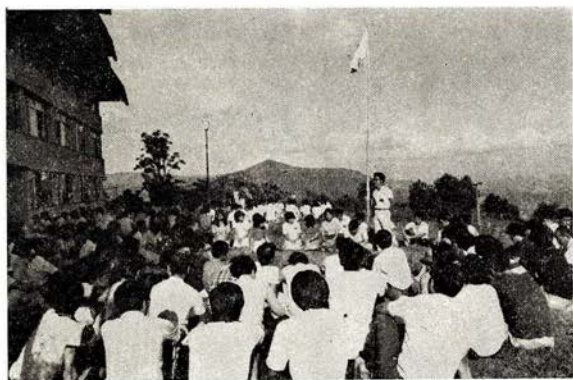
タンカーの現場主任技師補佐を命ぜられました。有明工場が出来て初めての新設計船である事や、船主の予想以上の激しい注文の為、何度も何度もやり直しを命ぜられ、他の工場からの応援も借りて、やっと一年半の月日をかけて完成させました。それは正しく、やってもやってもゴールの無いマラソンのやうな感じでした。四十万トンタンカーと言へばドラム缶三百万本を呑み込むのです。その一番船を有明海に浮かべた時の感激は、言葉にはつくせぬものがありました。船主への引き渡しを遅らせてしまった我々に対して、監督さんから、「遅生まれの赤ちゃんは生まれた後では、より健やかに育つ。」といふ励ましの言葉を受けた時、巨体を支へてゐる一本の柱が、あたかも日本といふ国を支へてゐる人々のやうに思はれ、有明海に浮かんだ巨体は、多くの人々の魂が一つの堂々たる形をとってそこに浮かんでゐるやうな気がしてなりませんでした。かうしてその船影は有明海の水平線に消えて行ったのですが、その姿がまだ心に焼きついてゐる今再び、次の船の建造に携はつてゐます。それはやはり自分との闘ひであります。大学時代に培つた貴重な経験を元に、今後とも世界に誇れる巨大船を建造して行きたいと思つてをります。

(熊本大学工学部・昭和四十九年卒)

心を見つめることの大切さについて

鹿児島市立河頭中学校教諭

小山 さよ子



(野外での討論)

只今、御紹介いただきました小山でございます。一昨年、鹿児島大学を卒業いたしました、今年で教職三年目を迎へてをります。

私は大学二年の時、初めて、霧島で開かれたこの合宿教室に参加させていただきましたが、その時の班別討論の折、私の発言に対して、「あなたはそれについてどう思ふのですか。それは本当にあなた自身の言葉ですか。」「あなた自身の言葉で話してごらん。」と何度も問ひ返してくれた友達のことばが忘れられません。霧島の山を下りても、その友達の言葉が毎日の生活の中で想ひ出され、事あるごとに考へさせられることでした。

私は、学生時代のサークル活動や古典の輪読会、そしてこの合宿教室などで、何回となくういふ経験を重ねながら、自分自身の考へを持つことがいかに大切であるかといふことを感じるやうになりました。

「自分自身の考へを持つ」といふことは、所謂、自己流の考へをするといふことではありません。周囲の人と交はりながらも、環境や人々に左右されたり付和雷同していくのではなく、そのやうな人々とのつながりの中で、「自分の本当の心を見極めていく」ことなのですが、私にも次第にそのことがわかってきました。

自分自身の心なので、誰に頼るわけにも誰の責任にするわけにもいきません。この心を繰り返し繰り返し見つめていく中から、自分がどう生きていかなければいけないかが定まっていく

のだと思ふのです。

私は、現在中学二年生を担任してゐるのですが、その中で末吉真理子さんといふ生徒を受け持ったことにより、改めて、「自分の本当の心を見極め、その心に従って生きていく」ことの大切さを痛感しました。今日はそのことを中心にお話してみたいと思ひます。

この真理子さんの家庭は、酒乱の父親が原因で本当にみじめな状態だったので。真理子さんが四才、弟が二才の時、母親は家を出て十年間といふものは、二人の姉弟は、全くこの父親の犠牲になつてゐたと言へるでせう。父親は酒を口にしたら数日は止まらないのださうです。二人は来る日も来る日も、仕事にも行かず別人のやうになつた父の相手や介抱をさせられるといふのです。夜は二人で、隣の家の馬屋や床下に寝ることさへあるのです。家の中は暗くみすぼらしく、親戚の者も全く見放してゐるといふ有様でした。

私が案じてゐた通り、この真理子さんは、五月になると学校に姿を見せなくなつたのです。前の担任の先生の話では、家庭がこんな状態だから、どこか施設に入れるか、早く卒業させてしまつて、父親と切り離してしまふしか仕方がないだらうといふことでした。

しかし、私はそんな考へ方で事を処していいのだらうかと思ひました。父と子が、お互ひの心を分かち合ひ睦み合つてこそ、本当に幸はせな家庭であり、人としての道ではないのかと思

ひきました。たとへこのままで施設に入れても、あるひは卒業させても、本当の意味では問題の解決にはならないのではないかと思ひました。

人間は誰しも、よくなりたいたいといふ気持ちを持ってをります。真理子さんであっても、父親であっても、今までのやうな生活でけっしていいとは思っていない筈だと思ひました。私はこの子とそして父親に直接ぶつかって、何とかしてその心をまともな道に引き戻してみようと決心しました。また、それが私に課せられた教師としての、否、人間としての使命だと思ひました。

学校が終はると、クラスの一人の生徒に案内させて真理子さんに会ひに出かけました。その日は父親の酒癖が悪いためか、家の中は酒の臭ひが残ってゐるやうな空気でした。私は家の外に二人を連れ出して話しました。私が話し始めると、真理子さんはポロポロと涙を流しながら、じっと何かを耐へてゐるかのやうに聞いてゐるのです。



その日は彼女の手をとり、ともかく学校に来ることを固く約束させました。

しかしそれでも、明るる日も、また明るる日も、彼女の姿は見えないのでした。父親が働きに出てゐるのに学校に来ない日もあるのです。

やはり予想してゐたやうに父親だけではなく、この子自身の心にも大きな問題がある。私にはそのことがだんだんはつきりしてくるやうになりました。

一度、二度、三度……。私の訪問も続きました。「先生は、あなたがハイと約束したことは、きつと守ってくれると信じて待つてゐますよ。バス代が無かったら、歩いて来なさい。授業は何時間目からでもいいのだから、とにかく来るのですよ。あなたは全てをお父さんの責任にしてゐるけれど、その気持ちを乗り越えないうちは、今のあなたも弟もどうにもならないのよ。お父さんがどうあらうと、学校に来ようと思へば、家を抜け出せるじゃないの。あなたの怠け心もあるんでせう。」と私が言ふのに対して、真理子さんは、ただ、頷くばかりなのです。

欠席の日が重なっていくにつれて、あんなに精魂尽きるまで語り、あれほど約束したことが、次々に空しく裏切られていくやうに思へ、何とも言ひやうのない気持ちでいっぱいでした。私はもうどうする術もなくなつてしまひました。

教育って何だらう。両親も揃つた自分とは異つて、不運な星の下に生まれ、あの子はあの子なりに、人には言はれぬ悩みを抱き悲しみに耐へてきただらうに。結局、私の力ではどうする

こともできないのではないだろうか。

五月十三日、木曜日でした。これが最後と心に決め、今度は父親に話しに出かけました。正気の時の父親は、やはりわが子の身の上を案じ気づかふ一人の、子の親でした。「お父さん。このままでは、真理子さんも弟さんも、大変なことになりますよ。あんなに明るく素直ない子なのに、こんな調子では、不良になってしまふでせう。さうなると学校も落第ですよ。お父さんも仕事をなされば、本当は腕効きの職人さんなのださうですから、何とかあの子がまともに学校に通へるやうにしてあげてください。」父親は頷きながら話を聞いてくれ、二人を学校にやらせるやうに約束したのでした。

ところがどうしたこととせう。その翌日もたうたう彼女の登校はなかったのです。

これで私の気持ちは、はっきり決まりました。やっぱり前の担任の先生の言はれるやうに、この子たちは父親と引き離して施設に入れるしかないのかもしれない。明日は校長先生に相談してみよう。悲しいけれども、この子たちにとって、これが最善の道なのだと自分の心に言ひきかせました。

ところが翌朝、驚きました。もうこれで最後と思つてゐた彼女の白いブラウス姿が、クラスメイトの中にあるではありませんか。もうすっかり諦めてゐた彼女がここにゐる。私はびつくりして、自分の目を疑ひました。もう、嬉しいなどといふ気持ちを通り越してゐました。ただ

ただ、彼女と切っても切れない不思議なめぐり合はせに、驚くばかりでした。この子にとっても、私にとっても、この問題はどうしても今のうちに解決しなければならぬことなのだなあと思ひました。本当に途中で投げ出さなくてよかつたと思ひました。

その日は二人でお茶を飲みながら語りました。もう説教じみたことは口に出ませんでした。今まで無口だった彼女も、学校を休んでゐた時の様子や、家の金を持ち出したこと、父親のことなどをあからさまに語ってくれました。

どうしたことか、その日から真理子さんの生活は変はりました。本当に強くなりました。たった一度も学校を休まなくなつたのです。朝はみんなより一足早く登校して、朝の掃除をやったり、昼休みは合唱部で練習する姿も見られるやうになりました。家に帰ると、きつと母親代はりの炊事や洗濯、父親や弟の世話もあるでせう。「真理子さん変はつたね。大人になつたね。」と言ひますと、「賢くなつたでせう。」などと言つて笑つてゐるのです。

なぜ諦めてゐた彼女が突然強くなつたのか、その詳しい理由は、私には知る由もないことですが、きつと彼女自身の心の中に、このままの自分ではいけない。何とかしなければといふ心の底から湧き上がるものがあつたのではないでせうか。今の自分の状態を環境のせいにして、父親のせいにしてゐる間は、決してその状態を克服できないのでせうが、すべてを自分自身の心に問ひ、自分の心を見極めていった時、初めて逆境から立ち上がる力が湧いてきたので

はないでせうか。

真理子さんは、私が想像してゐた以上にしっかりと足どりで毎日を歩み始めたのです。真理子さんのこの姿を見て、私もつくづく自分の心の弱さに気付かされました。本当は彼女が自分の力で逆境から立ち上がるのが願ひであり、さうさせることが私自身の使命だと思つてゐたのに、いつの間にか、仕方がないといふ理由をつけて、施設に預つてもらふといふ行政的手段に委ねようとしてゐたのです。しかし彼女が見事に立ち直つてくれたことによつて、逆に私自身が、この人生で最も大切なこと、つまり初めに申しましたやうに、「自分の本当の心を見極め、その心に従つて生きていく」ことの大切さを、この真理子さんとおつき合ひの中から教へていただいたと思ふのです。

○

ところで最近の社会風潮は、この一番大切な人間の心を見つめることを差し置いて、社会制度とか、施設・設備などの外的要因ばかりに目が向いてゐるやうに思ひます。社会制度を整へ、施設や設備を立派にすることも、無論必要でせうが、肝心なことは、そのやうな制度や施設・設備の中で営まれる人間生活そのものであつて、温かい人と人との間の思ひやりや、お互ひに慰め合ひ励まし合ふ心が失はれてしまへば、却つて逆効果になつてしまひます。例へば近頃の

労働組合の行き方などはその典型でせう。スト権をよこせとか、賃金を上げよとか、さまざまな制度上の要求を掲げて、まるで年中行事のやうに国民一般の迷惑をよそに職場放棄をやるのが通例になってゐます。

私たちの職場でも、日教組の先生方は主任制度反対や賃金闘争と称して、昨年は幾度かストライキをやりました。その都度生徒たちは自習を強ひられてゐるのです。教室に残された生徒たちは、このやうな先生方の態度をどんな気持ちで受けとめてゐるのだらうと思ふと、本当にいたたまれない気持ちになります。たとへ、組合の主張する制度上の要求が通つたとしても、自分たちの要求を通すためならどんな手段も辞さないといふあの一方的な考へ方ややり方が、幼ない子どもたちにさまざまな形で影響していくことを思へば、これほど恐ろしいことはありません。かうした害悪が積み重なっていくと、将来の日本はどうなるのだらうと憂へられるのです。

私たち日本人は、本来何よりも人間の内面的な心のあり方を大切にしてきた民族ではなかつたでせうか。最近の社会風潮は、日本人の何たるかを忘れさせ、足もとを見失ひつつあるやうに思はれます。しかし、周囲がかくあればあるほど、しっかりと自分の心に問ひ、心を見極めていく人の存在は大切なのではないでせうか。

私が初めて参加した合宿教室で、「あなた自身の考へはどうなのですか。」と繰り返し問はれ

たあの言葉の持つ意味の重大さを、今にして気付かずにはをれません。学生時代にこのやうな修練の場を踏むことが是非とも必要であると痛感いたします。

私自身も一人の人間として、日本人として、誠に微力ではありますが、子どもたちと共に、人間としての本当の生き方を、そして日本人としての本当の生き方を自分自身の心に問ひつつ求めていきたいと思ひます。

（鹿児島大学教育学部・昭和四十九年卒）

天皇の大御心について

岡山大学医学部癌研究生化学部大学院

田 中 輝
和



(班別討論)

ただ今御紹介いただきました田中でございます。現在、私は岡山大化学部研究所に所属してをりますが、そこでの私の仕事では、科学的に論理的に思考すること、そして明確な目的と、何が結果として生まれてきたかといふ十分な結果とが、常に問はれます。このやうな研究を続ける中で、私自身を究極の所で、背後から支へてくれるものは一体何か、といふ疑問が、私の心の中で常にくすぶり、続けてをりました。研究に夢中になるときは、充実感を感じてゐるのですが、そこからふと我に帰ると、やはり心の奥で、煙を吐いてゐるその疑問に気づかされました。かうして研究を始めて現在で四年目になりますが、その間いつも私の心を支へてくれてゐるもの、それは、目前の利益や効果とは無縁ですが、学生時代以来進めてきた古典の輪読や、読書会や研究会で、友人達と共に学んできたといふかけがへのない経験でした。さらにこの事実から、私は、我々日本人を究極の所で背後から支へてくれるものも同じやうに、目前の利益や効果とは無縁の、日本の文化であり、とりわけその中心をなす日本語といふ言葉と天皇といふ御存在であるといふことが、いよいよはっきり心の中に刻まれるやうになりました。今日は私自身が大学にはいったころ天皇について考へ始め、さらには親しみと敬愛の気持ちを抱くやうになつて行つた経緯を、述べてみたいと思ひます。

○ 高校から大学にかけて、私の天皇についての正直な感想は、「無用の長物」といふひとこと

につきました。そのやうな私が、天皇について考へ始めた最初のきっかけは、大学へ入学した年の夏休みに、この「合宿教室」に参加した時です。そのときの合宿教室の雰囲気は、当時の私にとっては、異質としか言ひやうのないものでした。不安と苛立ちの中で、合宿もほぼ終り近くになった頃、「今上天皇の和歌について」と題しての講義がありました。その講義の中で、私は始めて今上天皇の御製に接することになったのです。講師の夜久先生は、御製に接するに当たっての心構へについて、「人間の思想や行為を本当に知らうとするとき、我々は、既に出来上がった概念や判断の基準で見るのではなく、その人の言葉に直接に、しかも、すなほに、その人の心を自らの心に蘇らせるといふ態度で触れてゆくことが何よりも大切なことである。」と前置きされ、大正天皇、今上天皇の御製を読んでゆかれましたが、一つ一つの御製が詠まれた当時の国の内外の出来事を説明されながら、天皇の御心をその場に蘇らせつつ講義を進めてゆかれました。そして、ほぼ講義の最後近くで、大東亜戦争終結の折の御製二首の説明に移られた時、先生は終戦に当たっての陛下の御心持ちが、どれ程のものであったかを話されながら、絶句され、講堂は、一瞬、水をうったやうに静まりかへったのです。私はその時のことを今でもはっきり憶えてゐます。合宿の雰囲気に進んで這入って行くことができず、かたくなになつてゐた私も、その時は、心の底からこみ上げて来るやうな感動を覚えました。その御製と言ふのは、次の二首のお歌でした。

終戦後の御製

昭和二十年

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさとめけりただたふれゆく民をおもひて

私はこのお歌によって戦争の全責任を一身に背負はれ、ただ国民の苦しみをのみ思はれる大御心を、お慰びしてゐるとたまらない気持ちになってきました。国民と共にあられた天皇の大御心が、「たふれゆく国民」をまのあたりにご覧になり、遂に終戦を決意された悲痛な御心境が、戦争体験のない我々の心をもゆり動かしたのでした。そして先生は、この二首の御製の説明の最後に、戦後、天皇陛下がマッカーサー元帥と会見されたときのことについて述べられました。先生は次のやうに結ばれました。「戦後のあの時点に於て戦争は御自分の責任である。自分はどうなつてもよろしい。国民が生きてゆけるやうに援助してほしいと、マッカーサー元帥に言はれたといふ天皇の御心持ちは、これは日本の歴史に私どもが刻み込んで、永世に伝へなければならぬことです。」と。

この天皇の、国民を思ひ、民族を思ひ、国を思はれる大御心のまことは、日本国民はもちろんのこと、敵将マッカーサー元帥の心をも動かさずにはおかなかつたのです。事実、この間の事情を、マッカーサーも自らの回想記の中で次のやうに述べてゐます。「私は大きな感動にゆ

さぶられた。死をもともなふほどの責任、それも私の知りつくしてゐる諸事実に照らして、明らかに天皇に帰すべきではない責任を引き受けようとする、この勇氣に満ちた態度は、私の骨のズイ、までもゆり動かし「た。」と。そしてこのマツカーサーの回想記の文章を讀んで、国民を思ひ、民族を思はれるまごころは、それがたとへ異国の文化・伝統の中に育つた人であらうとも、その人の心をゆり動かさずにはおかない、普遍的な真実であることを、私ははっきりと知つたのでした。そしてまた、当然のことですが、この天皇の大きいいつくしみの御心が、戦禍の中から復興へと立ちあがらうとしてゐる人々の中に、どれ程大きな勇氣を呼び起こしたかを、思はないわけにはゆきませんでした。先生も、「この二首の御製に見られる天皇のありがたい御心持ちを感じて、私どもは復興に立ち上がったのです。かうして国の為、そして『天皇陛下万歳』



と叫んで死んだ同胞の心と、日本復興に努力する心とは、つながることができたのです。」と御自身の体験を述べられ、最後に次の御製を読まれました。

折にふれて

海の外くがの陸に小島にのこる民の上安かれとただいのるなり

かうして天皇に対する、私自身のかたくなな心も、少しづつ動いていったわけです。その後、さらに多くの天皇の御製に接し、あるひは多くの貴重な話を先生方から伺ふことができ、その上、この合宿での経験を機に、何冊かの天皇に関する書物を読んだりもしました。これらのわづかばかりの経験ではありますが、その中で私の心を捉へて離さないものは、歴代の天皇方が、国民をどれ程の御慈愛深い御心でみそなはせられて来られたかといふ、数限りない事実が存在することでした。そのいくつかをここに挙げてみたいと思ひます。

かつて侍従次長をされてゐた木下道雄先生からうかがったお話の一つですが、大正十三年、現在の今上陛下が東宮、即ち皇太子であらせられたとき、先生が東宮事務官として東宮殿下のお傍にをられた時代のことでした。偶々京都の東山御文庫、これは皇室にとって大切な土蔵で内蔵されてゐるものは、御歴代の宸翰、旧記の類ですが、その東山御文庫を殿下のお供をして

訪れられたときの出来事です。先生は次のやうに話されました。「多くの陳列品のうち、偶々私の眼にうつったのが光格天皇の御書簡であった。明治天皇より三代前の光格天皇は、幼少僅か九歳で閑院の宮家から入って帝位を継がせられ、御先々代後桜町上皇の並々ならぬ御訓育を多年に亙り受けさせられた次第であるが、御年二十九歳のとき、その上皇に対してしたためられた御書簡がこれであった。別にゆっくりと拝読した訳ではなかったが、『仰せの通、身に欲なく、天下万民をのみ慈愛仁恵に存じ候こと、人君たるものの第一の教云々。』の筆の跡に私は一瞬電撃を感じた次第であった。徳川幕府全盛の時代にあつて、ここ京洛の地、清くさやけき御所のうちには、人知れず寂かに、天下万民をのみ念とせられる御精神が脈々として皇統のうち流れてゐた長い年月のあつたことを初めて知り、私は自ら身の引き締るのを覚えた次第であつた。」と述べられました。この国民を思はれる天皇の大御心は、常にかつあまねく国民の上に注がれて来られたのです。そして、その大きいいつくしみの大御心は、歴代天皇方が不断に努力を積み重ねられ、御心身を削って体現され、今日まで伝へ来られたものであることを、はっきりとうかがひ知ることが出来ると思ひます。

また、明治天皇の御製の中にも、この大御心の具現された姿を、はっきりと拝見することが出来ました。殊に明治三十七年、それは日露開戦の年でした。渡辺幾治郎氏は、日露戦争についての研究の中に、次のやうに記してゐます。「明治天皇は日露開戦を決定する御前会議で、

『今迄は兩國政府間の交渉であつたけれど、今朕よりロシア皇帝に親電を發して、兩國民を戦禍から救ふため最後の努力を試みたい』と仰せられて、どこまでも武力による解決を避けようとお考へになつたのみならず、遂に開戦が決定せられるや、大奥入御の後も御悲しみのため、しばらく御言葉がなく、御目には涙をたたへさせられてゐたと傳へられる。」そして又、その年の御製の中には、日常のささいな事がらにつけても、遠く異国の戦場で苦しい戦ひを続けてゐる兵士達の身の上に、思ひをさせておられる御歌が実に数多く残されてゐるのです。そのうちのいくつかを、ここで拝誦したいと思ひます。

花

戦のには立つ身をいかにぞと思へば花もみるこちせず

をりにふれたる

いたでおふ人のはだへにしみぬらむ寒くなりゆく秋の山風

霜

もののふの野辺のかりふしいかにぞとおもひやらるる夜はのしもかな

親

国のためたふれし人を惜むにも思ふはおやのころなりけり

四海兄弟

よものうみみなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

神祇

くにのため身をかへりみぬますらをに神も力をそへざらめやは

仁

国のためあだなす仇はくたくともいつくしむべきことな忘れそ

をりにふれたる

くにのためたふれし人をおもひつつねたるその夜のゆめにみしかな

ところで、古代より今日まで、この大御心が絶えることなく伝へられてきたといふ事に対して、和歌の果した役割にははかり知れないものがあると思ひます。歴代の天皇がたが和歌に対して示して来られた真剣さと厳しきは、私の想像をはるかに超えてゐました。私は歴代の天皇方が御自身の御心の客観的表現である和歌に対して、自らの御心の自己反省の手だてとして、さらに御心を鍛へ修めるものとして、並々ならぬ御熱意をもって臨んで来られたのを知り、本

当に頭の下がる思ひがしました。この間の事実を「歌」と題する、やはり明治天皇の御製の中に拝見することが出来ると思ひます。五首拝誦してみます。

すなほにてをゝしきものは敷島のやまと詞のすがたなりけり

まごころを限りなき世にとゞむるもやまと詞のいさをなりけり

事もなくしらべあげたる言の葉の花にぞ匂ふ国のすがたも

現身うつそみの人のまことを萬代にのこすや歌のしらべなるらむ

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり

この五首の御製の中に歌はれてゐる一貫した明治天皇の御心は「まごころ」のひとつことに結晶されてゐるのであり、卒直なありのままの気持ちや体験を、すなほに三十一文字に詠み込むことの重要性を歌はれてゐるのです。そしてそれこそが、明治天皇が御励みになられてきた和歌の道の本質であったのだと思ひます。この天皇の「まごころ」と、御自身の心を徹しくみつめられる御態度があったればこそ、我々は歴代の天皇がたの御製に感動することが出来るのであります。「まごころ」をこそ歌に詠み、「まごころ」に何にもかへ難い価値を置き、人生の

生甲斐をそこに見出して来たのが、実に古代からの日本人であり、日本の国の姿であったと明治天皇はお歌ひになられてゐるのです。歌の道を日本人の踏むべき道として「敷島の道」と呼ばれ、歴代天皇がたが誰よりも率先され、心を込めて実践せられて来たのです。「上代の日本人の意識が『同胞』の条件と感じたのは、『天皇』と『和歌』だけであつた。つまり日本人とは、『天皇』と『和歌』に自己のアイデンティティを認める人間のことであつた」と言ふ、渡部昇一氏の言葉も、実に良く理解出来ると思ひます。さらに日本人が、過去二千年に亘つて天皇を敬愛申し上げて今日に至つた最大の根源もまた、実にこの点に見出せると思ひます。日本の国の、日本の国たる所以は、まさにこれらの諸事実の中に生きてゐるのであり、我々を究極の所で、大きく背後から支へてくれてゐると思ひます。そして我々はこれらの事実を、将来永遠に伝えてゆかなければならないと、あらためて強く感ずるのであります。

(岡山大学医学部・昭和四十八年卒)

第二十一回「合宿教室」のあらまし

東京工業大学理学部 四年

大町憲朗



(合宿地に立てられた明治天皇御製の織)

「合宿教室」までの一年のあゆみ

開会式まで

講義・講話

班別輪読・班別討論及び和歌創作

青年研究発表

慰霊祭

合宿最後の日

「合宿教室」までの一年の歩み

一昨年（昭和五十年）阿蘇で開かれた第二十回合宿教室以降、日本の政治外交は様々な問題に直面しつつ波瀾多き一年が経過した。三木内閣の政治的識見の低さのために動揺を続けてきた政局は、所謂ロッキード事件の発覚により更に混乱していった。事件は現実政治に絡んだ醜聞ではあったが、しかし、長期に亙る国会での議事停滞は、各界に少なからぬ影響を及ぼし、正常な国政運営は望むべくもなかった。いたづらな喧噪のうちに月日がすぎ、衆院選を間近かにして新聞は「保革逆転成るか」と国民をあふりつづけ、数々の憂ふべき事態が発生した。

一方、緊張緩和といふキャッチフレーズとはうらはらに、朝鮮半島の緊張はさらにきびしく東西間の緊張をめぐって国際外交もめまぐるしくゆれ動いた。日本に於ても松生丸事件、周恩来死去に伴ふ中国大陸の内紛等々、身近な共産国家との間に、日本国の信を問はれるやうな事件が続出したのだった。

昭和五十一年は今上陛下御在位五十年を奉祝するといふ、まことによるこぼしい年ではあったが、祖国日本の現実には、一朝一夕には抜き難い思想的混迷を内包してゐる様に思へる。国を思ふ心の喪失は世の風潮とともに学園内にも満ち、無気力な風潮から我が身を救ひ出さうとする自主的で活発な精神生活育成の場は望むべくもない。さうであればある程、志を同じくする

者が力を合はせ、心傾けて語り得る相互修練の場を持ち、现实生活に真向ふ姿勢が養はれなければならぬ。合宿教室の標題でもある「学問と人生と祖国を語らう」といふ一つらなりの表現は、僕等の学問は、はたしてこれでもいいのかといふ切実な問題を一人一人の胸に問ひかけてくる。われわれにとって祖国とはいのちの根源であるが、われわれ学生は、その祖国を担ふ者としての学問はいかにあるべきかといふ、この問ひかけを胸に深く刻みながら、研鑽を続けるべきであらう。

ここで第二十一回合宿教室のあらましを述べる前に、簡単に、合宿に至るまで一年間の、学生の活動を記してをきたい。

阿蘇合宿を終へてより、各大学、地区毎に、古典輪読と和歌創作を中心にした例会がもたれた。夏合宿で得た友ら、あるひは下宿先を訪ねて語りあふうちに得た少数の友等の集ひではあったが、古典の言葉を正確に辿るうちに先人の生き方を偲び、和歌相互批評を通して一人一人の気持を辿るといふ、友らとの交はりのうちに、ともすると怯むおもひをお互ひに励まし合ふ中でさらに緊張を覚えるやうな体験もしばしばであった。かうした例会の様子や次に記す小規模の地区合宿の内容等は、「学びの道」(東京)「大信海」(福岡)「時習義塾通信」(熊本)「短歌通信」(鹿児島)などの記録や合宿記録集を通して、相互に交信されてきた。又遠い北陸の

第二十一回「合宿教室」のあらまし(大町)

富山の地においても新たに研鑽の場が確立し、その様子が「^{つが}榎の樹のいやつきつきに」といふ
 刷り文になって交信された事を特記してをきたい。

(地方合宿)

主 催	年 月 日	場 所	参 加 大 学
鹿兒島信和会	昭和50年 11月21日～23日	山川町「森と湖の里」	鹿大・鹿経大
大阪信和会	11月22日～24日	大阪 持経寺	大阪大・大阪芸大
熊本信和会	11月22日～24日	玉名市 三井保養所	熊大
福岡地区女子信和会	12月6日～7日	福岡 東郷神社	九大・福教大・福大 福女大・西南大
富山大信和会	12月11日～13日	富山市 アオイスポー ツハウス	富大・富山齒科薬科大
東工大歴生会	12月13日～14日	東工大 大貫臨海宿舍	東工大
亜大日文研	12月20日～21日	多摩墓地 巴荘	亜大・中央大
福岡信和会	12月22日～24日	太宰府 戒壇院	九大・西南大・福大・福教大
亜大日文研	昭和51年 2月11日～14日	亜大セミナーハウス	亜大

3月28日(日) (第3日)	3月29日(月) (第4日)
(起 床) 朝 の 集 ひ 朝 朝 食 清 掃	(起 床) 朝 の 集 ひ 朝 朝 食 清 掃
講義 (東中野先輩) (岸 本先輩)	講義(山口先輩)
班 別 輪 読	決 意 発 表
	講義(小野先輩)
昼 食	夏合宿に向けての 各地区相互の確認
班 別 輪 読	昼 食
	閉 会 式
散 策 和 歌 創 作	(感想文執筆) (解 散)
夕 食 入 浴	
講義(津下先輩)	
和歌相互批評	
(就 寝)	

垂大日文研	大阪信和会	九州地区女子信和会
7月3日~4日	6月12日~13日	3月22日~24日
御嶽山 山香荘	一信寮	太宰府ユースホステル
垂大	大阪・大阪芸大・近大	熊大・鹿大・福教大・福大・福女大 九大・長大・宮大・広大

第二十一回「合宿教室」のあらまし（大町）

		3月26日(金) (第1日)	3月27日(土) (第2日)
春季「持経寺合宿」日程表	7:00		
	8:00		(起床) 朝の集ひ 朝食掃
	9:00		講義(山内先輩)
	10:00		班別討論
	11:00		学生リーダー意見発表
	12:00		昼食
	1:00		学生リーダー意見発表
	2:00		班別討論
	3:00		班別討論
	4:00	開会式	
	5:00	所感発表	講義(志賀先輩)
	6:00	学生発表	夕食
		夕食・入浴	入浴
	7:00	学生リーダー意見発表	講義(小柳先生)
	8:00	班別討論	班別討論
	9:00		班別討論
10:00	(問題提起書を中心に)		
11:00	(就寝)	(就寝)	

かうして年もあけた、昭和五十一年三月には全国の各地でのリーダー的な活躍をつづけてゐる学生たちの手によって三泊四日の合宿を営むに至った。騒然とした雰囲気の中で祖国は益々思想的混迷の度を深める中であつて、夏の佐世保合宿に向けて更に学生相互の胸のうちを確かめ合ふべく、大阪の北方能勢の静かな山懐に抱かれた持経寺に集つたのであつた。合宿では日頃の所信を簡単な問題提起書といふ形で披瀝し合ひ、少数の班に分かれて討論がなされた。国家の問題、友情の問題、時事問題等が様々な形で提出され、一人一人が思ひを交はし合ふうちに相互の気持ちに定め整へられていった。合宿参加者の内訳と合宿の概略は次の通りであつた。(日程については前頁一覽表参照)

△東日本▽ 東工大3・東京大・亜細亜大・中央大 各1

△西日本▽ 熊大7・西南大・九大各5・鹿大4・広島大・鳥取大・大阪大・

大阪芸大・福岡大・福教大・熊商大・鹿経大 各1

計 三十六名

△国民文化研究会▽ 十七名

総計 五十三名

第二十一回「合宿教室」のあらまし（大町）

春休み明けをまって、早速、新入生を対象とした活動が開始された。学内での古典輪読会や小合宿をはじめ講演会が、現在の大学の思想的乱れの中にあつて真実の学問のあり方を学友に呼びかけるべく左表のスケジュールで催されていた。学友への参加呼びかけは、どの大学でも早朝からのピラ配りや教室回りによつて行なはれ、懸命な努力をつみ重ねながら開催の日を迎へたのである。さらに夏の合宿教室に対する説明会も様々な形でなされ、配布されたアンケートや、友達の紹介などで知った数多くの学友に切実な思ひを語りながら、合宿勧誘がつづけられていった。毎春行なはれるかうした諸活動は日頃の力が試される厳しい試練であつた。

（講演会）

主 催	年 月 日	場 所	講 師 ・ 演 題
熊本大学信和会	昭和1551年 5月15日	熊大教養部 D-13	名越二荒之助先生（高千穂商科大講師） 「世界から見た日本」
鹿児島大学信和会 鹿児島大学教問研	5月15日	鹿大教養部 100号教室	尾上正男氏（神戸学院大学長） 「最近の国際状況」
熊本商大信和会	5月29日	熊商大 III教室	小柳陽太郎先生（修猷館高校教諭） 「学問——いのちに至る道——」

九州大学信和会	6月2日・5・9日	教養部 25番教室	小柳陽太郎先生 「学問と人生を結ぶもの」
西南大学信和会	6月16日	西南会館 二階 一号会議室	小柳陽太郎先生 「学問—いのちに至る道—」
鹿児島経済大学 読書研究会	6月23日	鹿経大 331号教室	上田通夫(鹿大教授)「利便と文化性」 川井修治先生(鹿大教授)「大学生としての自覚」

かうした一年の努力をつみかさねて、昭和五十一年八月、待ちに待った第二十一回「合宿教室」開催の日を迎へたのである。

(この項、熊本大学教育学部 四年 南田武法 記)

開会式まで

第二十一回「学生青年合宿教室」は、かつて海軍の鎮守府の置かれてゐた長崎県佐世保市の北東にそびえる標高三七〇米の弓張岳山頂「弓張観光ホテル」に於いて、昭和五十一年八月七日から十一日までの四泊五日間の日程で開催された。

これまで行はれた二十回の合宿教室はすべて阿蘇、雲仙、霧島など九州の山々で挙行されてきたが、今回は従来とちがって、宿舎のどの窓からも、大戦当時、大艦船・大和や武蔵などが停泊してゐた佐世保湾と、西海国立公園、九十九島の雄大な眺めを一望のもとに収めることが出来るといふ、海の合宿とでもいふべき類稀れな環境のもとで行はれたのである。

合宿に先立ち、八月四日より三日間、今回の合宿勧誘活動の中心となり、大合宿で班長・副班長となる各地の学生と国民文化研究会の若手会員約四十名が集ひ、「事前合宿」に取り組んだ。この二泊三日間、合宿勧誘での体験を振り返りながら大合宿に何を求めてゆくか、もう一度互ひに確かめ合ひ、集ってくる友を迎へるための充分な心の準備を整へた。台風のため佐世保線が一時不通となり、一日目の予定は、大幅に変更されたが、二日目には全体討論、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読と、研鑽を積むうち、皆の心はしだいに高まり、最後の全体意見発表では、大合宿へ臨む強い決意をお互ひに確かめあふことが出来た。三日目の午前中は、学生からの強い希望により昭和十五年、信州菅平で行はれた合宿の記録映画「文化の戦士」が上映された。この映画は菅平合宿本部長であられた故田所廣泰先生（当時三十歳）の卓絶した御提案により、当時の大学生が中心となって作成されたものである。幸ひにも国文研会員朝永清之先生の御配慮により、市内の映画館を借り切って鑑賞することができた。画面・音楽・ナレーションともにはすばらしく、手ぬぐいを腰にぶらさげ朴鹵下駄をはいた当時の先輩方

の歌ふ「進めこの道」がいつまでも心に残り、戦前戦後を貫いてかはらぬ、日本人としての生き方がきびしく我々の胸に迫ってきた。

このあと海軍記念館を見学し、弓張岳山頂に戻り、昼食後、大合宿の準備作業に入った。今回は事前に各地区で準備できる仕事は完了してゐたので、午後からの作業もスムーズに運んだ。夕方近く、広場に

あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが

心ともがな

と大書された明治天皇の御歌の幟が晴れ渡った青空に立てられ、室内で作業にあたってゐた者もしばし手を休め、それに見入ってゐた。

作業ももう少しで終る。心配されてゐた天候もすっかり良くなり、明日集って来る全国各地の友を待つのみとなった。

参加者の内訳は次の通りである。



(合宿地から望む旧佐世保軍港)

（学生班 六所大学）（洋数字は参加学生数）

東京大 5	九州大 16	鹿児島大 23	長崎大 11	福岡教育大 10	大阪大 2
大分大 2	熊本大 20	広島大 5	東工大 2	富山大 2	岡山大 1
筑波大 4	東京学芸大 1	防衛大 5	九州芸工大 1	北九州大 2	
九大医技短大 1	亜細亜大 33	九州産業大 2	西南学院大 15	早稲田大 13	
上智大 1	中央大 4	東京経済大 1	慶応大 4	東海大 3	皇学館大 2
大東文化大 2	法政大 2	青学大 2	拓殖大 4	高崎経済大 1	国士館大 1
学習院大 2	立教大 1	日体大 1	日本大 1	立正大 1	玉川大 1
独協大 1	百合女子大 1	福岡大 6	大阪芸大 1	東和大 1	熊本商大 1
京都産業大 1	岡山理科大 1	岡山商科大 1	第一経済大 1	尚綱大 2	
中村学園大 1	活水短大 1	福岡女子大 1	平安女学院短大 1	二松学舎大 1	
賢明女子短大 1	鹿児島経済大 2	高千穂商大 1	白梅短大 1		
計 二三七名（うち 女子 五四名）					

（社会人・教員班）

会社員、小・中・高教員、大学職員、団体職員など 計 二五名

（招聘講師）三名 （大学教官有志協議会）五名 （国民文化研究会）七六名

8月9日(月) (第3日)	8月10日(火) (第4日)	8月11日(木) (第5日)
(起朝の集ひ食)	(起朝の集ひ食)	(起朝の集ひ食)
(講義) 「日本人の死生観」 村松剛先生 (質疑応答)	(講義) 「もっと根本的に考へ直さ うー主体性の危機」 長谷川才次先生 (質疑応答)	岸本弘運営委員 片岡健運営委員長 所感発表
記念撮影	班別討論	全体意見発表
班別討論		「合宿をかへりみて」 小田村寅二郎先生
昼食	昼食	班別懇談
「和歌創作導入講義」 青山直幸先生	(講義) 「時世の行き詰りと 大学生の自覚」 小田村寅二郎先生	感想文執筆 第2回和歌創作
九十九島遊覧 (和歌創作)	班別討論	閉会式 (昼食)
	地区別・大学別懇談	
夕入散	夕入散	(解 散)
(講話)高木尚一先生 倉前盛通先生 吉田靖彦先生	「和歌全体批評」 山田輝彦先生	
慰霊祭	和歌相互批評 (班別)	
班別懇談	夜の集ひ	
(就 床)	(就 床)	

第二十一回「合宿教室」のあらまし(大町)

第二十一回「合宿教室」日程表	8月7日(土) (第1日)		8月8日(日) (第2日)	
	6:30		(起 朝	(床) 集 ひ 食
	8:00		(講義) 「『脱ケインズ経済学』の 建設」 木内信胤先生 (質疑応答)	
	9:00			
	10:00			
	11:00		班別討論	
	12:00		昼食	
	1:00			
	2:00		(講義) 「今上天皇のお歌について一和歌と学問」 夜久正雄先生	
	3:00	(集 合)		
	4:00	開 会 式	班別輪読	
	5:00	(班別自己紹介) 「日本への回帰」第11集 班別輪読	青年研究発表 (高岡・小山・田中)	
	6:00	夕 食 入 浴 散 歩	夕 食 入 浴 散 歩	
	7:00			
	8:00	(講義)「祖国と慰霊と」 志賀建一郎先生	「輪読導入講義」 小柳陽太郎先生	
	9:00			
10:00	班別討論	班別輪読		
	(就 床)	(就 床)		

(見学参加者) 一四名 (事務局) 一二名

総合計 三七二名

この合宿は、アンケート用紙をもとに八名乃至十名位で一班を構成し、班を単位として運営された。学生班には学生班長一名、社会人班には国文研の会員が助言者として割り当てられた。また昨年に引き続き、今年も四、五班を一単位とする六つのブロックに分けられ、班の運営の円滑化がはかられた。

八月七日はからりと晴れあがった。強い日射しが宿舎の庭を照りつけてゐた。昼頃、参加者が続々到着してきた。

午後二時三十分、参加者一同は大講義室に集合して、開会式が行なはれた。熊本大学工学部三年池松伸典君による力強い「開会宣言」の後、全員で国歌を斉唱し、「戦時平時を問はず祖国日本のために尊い命を捧げられたすべての祖先の御霊」に対し、一分間の黙禱を捧げた。

続いて、主催者を代表して国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生が、旅の疲れを労ひつつ「この合宿は、学校の差、年齢の差、地位の差などを離れた、まったく同じ一人づつの集まりです。そのことをしっかり心にとめてこの合宿教室に取り組んでいただきたいと思います。」と挨拶された。続いて、祝電が披露され、次に参加学生を代表して、地元、西南学院大学法学部四年、安部博之君が、学内での生活を振り返りながら、「なんでも腹を割って話し合へるや

うな友だち、学問・人生・祖国を語り合へるやうな友だちを是非とも、この合宿で見つけてもらひたいと思ひます。」と力強く訴へた。続いて、熊本県立熊本西高等学校教諭・片岡健合宿運営委員長（昭和四十三年、九大経済学部卒）から合宿主旨説明並びに合宿運営委員の紹介があり、最後に福岡県博多高校講師占部賢志指揮班長（昭和五十一年、西南学院大学商学部卒）によって、合宿諸注意がなされた。

かうして開会式とそれに続くオリエンテーションは終り、全参加者は各々の班室に入り、自己紹介及び各人がこの合宿へ参加した思ひを語り合ひ、前年の合宿記録集「日本への回帰・第十一集」の輪読に入った。

講義・講話

（以下、合宿期間中の講義、講話の概略を記すが、講義については詳しくは本書中に掲載されてゐる講義録をお読み戴きたいと思ふ。）

最初の講義はこの合宿教室への導入の為の講義であつて、過去二十回の合宿教室では、国文研の先生方があつたつてこられたが、今回は初めて戦後生まれの若い会員である福岡県立三池高校教諭志賀建一郎先生（昭和四十八年九大文学部卒）の登壇となつた。「祖国と慰霊と―現代日本

に見失はれたもの」と題して、先生はまづ、「現在、日本では祖先の方々が生命をかけて、この日本の国を建設してこられたことを素直に偲び、かつ感謝するといふことを忘れてゐるやうだが、それはどこに原因があるのだらうか。」と、問題を提起され、「今日では、祖国といふ言葉がほとんどその本来の意味で用ひられてをらず、たまたま左翼の人達が自らのイデオロギ―達成の手段として用ひられてゐるにすぎない。」と、指摘された。そして、それに対して何の疑念も感じなくなつたとところに現代日本人の言葉に対する感受性の衰へが見られるとして、その言葉の乱れが、思想の乱れと決して無関係ではないことを強調された。

さらに、戦後の民主主義に全く欠落してゐる盲点を、民主主義の発祥地古代ギリシアの政治家ペリクレスによる「戦死者葬礼演説」や、民主主義の基本理念を謳つてゐるといはれるリンカーンの「ゲティスバーグでの演説」を引用しながら語つていかれた。

「ペリクレスの言葉の中には『己の家計同様に国の計にもよく心を用ひ、己の生業に励むかたはら、国政の進むべき道に充分な判断をもつやうに心を用ひる』といふ、自らの生命と国の生命を一つのもの、として把握する精神が流れてゐる。そこには、国難に際して生命を賭して戦つてきた祖先に対する、尊敬と感謝の気持を持って生きてきたギリシア人の姿がある。彼らには祖先の立派な意志を受け継ぐことがあとに残る者の義務であつた。ギリシヤにおいて民主主義といふ制度を支へ、制度を生かしてきた人たちはこのやうな人たちであつた。」と述べられ、

慰霊といふことを抜きにして、「民主主義」といふ言葉のみが使はれてゐる現代の風潮の誤りを鋭く指摘された。

第二日目は招聘講師の世界経済調査会理事長木内信胤先生の御講義から始まった。先生は今年で十七年間に亘り連続して出講していただいてゐるが、先生は「『脱ケインズ経済学』の建設」と題して、まづ、国内の動きに触れられ、「三木首相はマスコミ即ち世論と考へてゐるやうだが、マスコミに表はれるのは表層の日本人の声にすぎない。政治家は深層の日本人の動きを知らなければならぬ。」と批判され、これからは政治家はマスコミに迎合せぬ態度を打ち出すことが、何にもまして必要だと述べられた。ついで、世界の動きに触れられ、さらに、現代の経済学は病んでゐると指摘され、「なぜ現代の経済学が病んだかと言ふと、人間社会を研究対象とする学問が、自然科学に押されてしまつてゐるからである。人間社会の多くのことは自然科学的な理解ではなく、直観”によつてのみ理解できるであらう。」と問題点を示された。「現代の病んでゐる経済学を治療するには、まづ分業体制をやめること、全体を見通す広い眼を養ふこと、そして、直観力を養ふことだ。そのためには出来るだけ虚心になつて、小さくは何らかの問題を是非解決したい、大きくは世の中を是非とも良くしたいといふ念願、『志』を強く抱かなければならぬ。」と、先生のお考へを示された。御講義の後、質疑応答があり、先生は一つ一つの質問に丁寧に答へて下さつた。

午後からは、「今上天皇のお歌について―和歌と学問―」と題して亜細亜大学教授夜久正雄先生が講義して下さった。先生はまづ、昭和三十四年に著はされた『歌人今上天皇』といふ本の名前が、当時かなりのセンセーションをまきおこしたことを話された。そして、「科学者としての今上天皇は知られてゐるが、和歌をお詠みになることはあまり知られてゐなかつた。」と述べられ、当時の風潮を顧られつつ、講義に入つてゆかれた。先生はまづ昨年の秋の両陛下の御訪米について、「御無事にお帰りになられ、画期的な成果をあげられましたことは、まことにうれしいことでした。」と述べられ、ついで、御帰国後に行なはれた記者団との御会見について、「御会見の際、私が一番悲しんだことは、記者の質問があまりにも陛下の御心を知らうとする努力が少ないものであつたといふことです。御歌や御詔勅を拝読することで、御心を知ることができなのに、それさへしてゐない。人の心を偲ふといふことに欠けるのですね。これは今の大学出身者の重大な欠陥です。このやうな人物が指導的立場に立つてゆくと思ふと本当に心配です。」と慨歎された。さらに先生は、「万葉集に『皇神の敵しき国』『言霊の幸はふ国』と山上憶良が歌つてゐますが、日本は、真心から発せられた言葉は人に通ずる、歌の盛んな国だといふ意味で、歌が盛んであるといふことと天皇が統治されてゐるといふこととは表裏の関係にあるのです。それが国柄といふべきでせう。歌をつくるといふことは、一般教養の中心であつて、昔の政治家はすべて歌をつくるのに努力を払つたものです。」と、和歌が日本の

学問の中心にあることを説かれていった。最後に先生は約五十首の「今上天皇の御歌」を一語一語をかみしめ、心を込めて拝誦されたが、参加者はすべてその一首一首にこもるしらが胸の奥深くしみわたるやうな感動をおぼえた。

夜の日程に入り、黒上正一郎先生の御著書「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の輪読に先立ち、福岡県立修猷館高等学校教諭小柳陽太郎先生が輪読導入講義をされた。まづ、先生は輪読といふことについて、「愚かな者同士が集ひ、いのちに通ふ道を求めて読んでゆくこと、すなはち皆の心が一つの輪をなして古典にふれてゆくのが、輪読のもつ大切な意義なのです。『読む』とは単に頭で理解するのではなく文の中に込められた著者のいのちの呼吸に合はせることです。」と、輪読する際、心にとめるべきことを話された。その後、黒上先生の御本の本文に入ってゆかれ、「この本のもつむづかしさは辞書を引いてわかるやうなものではない。一つ一つの言葉には深い思ひが込められてゐる。その言葉をよみ味ふだけの強靱な精神が用意されなければなりません。」と述べられた。「太子の御言葉に『和を以て貴しとなす』とあるが、単に仲良くするのは大切ですよといふやうに解釈しただけでは、本当に読んだことにならない。一つ一つの御言葉には、無限のいのちの世界がある。その世界につながってゆかうとするところに輪読の意味があるのです。」と語られ、特に輪読箇所に出てくる聖徳太子の御言葉『世間虚仮唯仏是真』について、「世間は仮のものでむなしといふ御痛感は、一部の人が

いふやうに厭世的な心の表現ではなく、全く逆にこの世を良くしたいとするはげしい太子の御努力の中にこそ生まれてきたものでせう。太子は一步も現実からひきさがってをられない。国民の苦しみを自らの苦しみとして受けとめて生きて行かれた太子の悲痛な御精神を、この御言葉の中に偲ぶべきです」と述べられ、太子や黒上先生の一つ一つの御言葉に込められる御気持ちを偲んでゆかれた。

第三日目の午前中は、本合宿三回目の御出講であられる文芸評論家村松剛先生が「日本人の死生観」と題して講義された。先生はまづ、「戦後の私たちの生活の中で、一番欠けてゐるものは死の問題である。人の生命は地球より重いと信じられてゐるが、いったいそれは証明できることなのだらうか。」と問題をなげかけられた。さらに、「敗戦後の日本では、死を論ずることや公のために死ぬことを、まともに議論するのをタブー視してきた。しかし人間は、死を意識できる唯一の生き物であり、人間である以上死の問題は避けられないはずだ。」と述べられ、日本人の死生観を時代を追って話され「無常の世の中に一輪の花を咲かせるやうに、武士は、死を実践哲学にまで持ってゆき、死によって生を完結させ、生を充実させるといふ生き方を実践してきた。」と日本人独自の死生観にふれられた。

次に国防問題に言及し、「今の日本では国のために死ぬことはばかばかしいといふことになつてゐるが、共同体の自由なくして、個人の自由はありえない」と述べられ、最後に、パレス



（左から2人おいて小田村，木内，村松 高木，夜久の諸先生）

チナ・ゲリラがイスラエルのバスに手榴弾を投げ込んだ時、一人の青年が父親の目の前で、その上に身を伏せて犠牲となった事件を紹介された。事件の後にその父親は「息子は私がおのバスにゐなくても同じやうに行動したであらう。私はイスラエル国民として息子を誇りに思ふ。しかし、私の中の父親は泣き叫んでゐる。」と語ったといふことだが、このお話は特に参加者に深い印象を与へた。

三日目の夜、慰霊祭の前に「大学教官有志協議会」の三人の先生方が登壇された。最初登壇された高崎経済大学教授高木尚一先生はまづ、「この合宿に久しぶりに参りまして、皆さまにお目にかかり、輪読等を続けて参りまして、日本の国が言霊の幸はふ国である、日本は言霊の亡びない無窮のいのちを持った国であるといふことを実感できたといふことは無上の喜びであります。同信相続といふことですが、お互ひに同じく

し合った信は、たとひ、ある時は迷ひ、ある時は沈滞しても必ず相続しなければならぬ、そのことを今度の合宿で実感しました。」と語られた。そしてご専門であられる「労務管理」について、「この世界は非常に奇妙な状態になってをり、解決せねばならぬ目に見えぬ問題が山程あるのです。そのためには、管理者と被管理者とが、日本へ回帰することによって精神を開展せしめ、一つのものに帰一するところの原理をたてることによって、道が開かれると思ふのです。」とお考へを披瀝された。さらに「慰霊祭では手を合はせませんが、この手を合はせるといふことは自分の心一つにすることです。それが礼拝です。人類は何百年も前から礼拝することによって全体の生命に帰一する精神の統一をはかってきたのです。」と、ひきつづいて行なはれる慰霊祭の意味にふれながら話された。「これは三井甲之先生の御説ですが、文化とは礼拝の意味もあるのです。日本人は祖先の御霊を祭りながら生きてきたのです。外交官も司法官も、祖先の御霊を祭るといふ天皇陛下が行なつてをられるお祭りを自分も倣つて生きてゆく、さういふ生き方が実現されてゆけば日本はすばらしい国になると思ひます。」と呼びかけられた。最後に、「この合宿教室の営みも我々自身が心の中に確信をもつことによつて自づと広がってゆくのだと思ひます。必要なことはこの確信をもつといふことです。」と、かみしめるやうに話され、講義を結ばれた。

ついで、**亜細亜大学教授倉前盛通先生**がご登壇された。先生は、始めに、「私もかつて弓張

岳に参りましたが、今、湾内を眺めてをりますと戦前軍港だった佐世保湾内に当時、戦艦大和、戦艦武蔵などが並んでゐたことを思ひ起し、いまここに大艦船を見られないのが、非常にわびしい思ひが致します。」と前置され、日本の国防のあり方について話された。「日本は海洋国家ですから海洋国家としての基本戦略を持つべきである。ところが、不幸にして日本は明治時代までは海洋国家としての戦略を維持してきたが、大正中頃から大陸国家的色彩を強めてきた。日本が失敗した原因はそこにあつたと思ひます。」と指摘され、アルフレッド・セーヤー・マハンの著書「海上権力史論」について、「マハンは、『海を征するものは世界を征す』『いかなる国も大海軍国と大陸軍国を兼ねることはできない』といっています。日本も明治までこの論に合つてゐたのですが、満州に勢力を得てから大陸国家的発想が入つてしまつたのです。」「どうか、日本の置かれた環境、国民の性質等から、日本が今後どのやうな国家戦略をとるべきか、マハンの著書を是非読まれて勉強していただきたいと思ひます。」と参加者に望まれた。

最後の御登壇は青山学院大学教授吉田靖彦先生であつた。

先生はまづ、戦前開かれた、西教寺合宿の思ひ出について語られ、続いてご専門のソ連経済・計画経済論についてお話下さり、学園内に蔓るマルクス経済・マルクス主義について考へてゆく上での貴重な示唆を与へて下さつた。「ソ連は現在軍事力の上では非常に力を持ちつつあ

るが、中央計画化経済といふものは破綻に瀕しつつあるのです。つまり、経済が成熟した段階では消費者の欲望が多様化する、それに即応した生き方は市場経済以外にはないのです。しかしそれは建国以来の共産主義イデオロギーに反する。その為に内部闘争の可能性も出てくるのです。ソ連が今の状況のまま市場経済を無視して、これからも社会主義の方向に進んでいくといふのは常識的にも考へられない事です。」と、ソ連の経済状態とイデオロギーの矛盾を強く、指摘された。

第四日目は内外ニュース社長、長谷川才次先生の御講義「もっと根本的に考へ直さう」から始まった。先生は、まづ、「敗戦後の日本の思想界はマルクス・レーニン主義かきもなくばアメリカンデモクラシーが支配してをり、それらが未消化のままだから日本の前途は容易ではない。それらの中にあつて日本人は『日本』を見失ひ文字通り主体性の危機に瀕してゐる。」と切実に訴へられた。次に先生は日本国憲法について、「ザビニーは『法といふものは、国の歴史・伝統に基かぬかぎり死文である。それは言葉と同じく、自然に生まれてくるものでなければならぬ。』と言つてゐる。明治憲法は岩倉具視を中心に、日本の歴史を勉強しつつ、制定までに十三年の歳月を要してゐるが、現行憲法は『一夜漬けのちゃんこ鍋憲法』にすぎない。」と厳しく批判され、最後に、福沢諭吉が『ニュースは遅れても間違へるな。他社と同じ社説なら書くな。』と言つた言葉を引用され、独立の精神を失つた現代日本の新聞のあり方を鋭く批

判して講義を終へられた。

御講義の後質疑応答があり、その中で「改憲は急務であるが、その為には、国民のすべてが問題の本質を理解するやうに、全力をあげて世論を起すことから始めねばならない」と、述べられた。

午後からは、「時世の行き詰りと大学生の自覚」と題して、国民文化研究会理事長・亜細亜大学教授 小田村寅二郎先生が、合宿の流れをふまへながら、最後の御講義に立たれた。先生は前夜の慰霊祭で歌はれた「海ゆかば」の中の「顧みはせじ」といふ言葉にふれられ、「この歌は単なる決意の表現ではない。死ぬといふ決意はしたものの、親、兄弟、子らのことが忘れられない。命も惜しい。さういふことが断ち難い自分である。だからこそ『顧みはせじ』といふ言葉がでてくるのでせう。その中には不断の努力を積み重ねつつ、公に向はうとする姿が正確に伝へられてゐます。」と述べられ、さらに、「私たちが血統的に純粋な日本人であるかどうか本当のところは解らない。しかし、日本語を話し、日本語による情操生活に融け込んできたのが日本人である。自然科学的に日本人の血統を議論するのと、日本人としての自覚と誇りを持つこととは別であることをはっきりしなければならぬ。日本人の祖先は日本人である」と、はっきり言へるのが学問ではなからうか。」と学問のあり方について鋭い批判を浴びせられた。

班別輪読・班別討論・和歌創作

この合宿教室の柱となる研鑽の一つに班別輪読があった。テキストは、第一日目、「日本への回帰第十一集」、第二日目、黒上正一郎先生著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」である。

最初に皆で一人づつ声を出して読み、そのあと、一語一語を大切に、その中に込められている著者の思ひに迫りつつ読み進んでゆく。難しくつまづくこともある。けれども共に思ひを述べ合ふうちに、はっと目をさまされたやうに感ずる言葉も出てくる。実にありがたい一瞬である。一人で読書するのと違い、緊張した中に、共に道を求める友に思ひを寄せつつ一つの文章に取り組む時間は、一般の大学生活では味はへぬ貴重なものだった。

各先生の御講義のあとは、約一時間の班別討論が行なはれたが、これもまた単に講義を頭で理解したことを話すのではなく、自分を大きく変へるやうな言葉、本当に感動した言葉を中心に話が進められた。自分の思ひもよらぬところに友が心を打たれてゐるのに驚かされ、問題の重大さに気付かせられることもたびたびであった。

初めはなかなかうちとけず、上すべりの議論もあった。しかし、友が切実な体験を話してくれ、うちとけ、しだいに互ひの心の中に入ってゆけたやうである。自分の言ひたいことがどうして

も相手に伝はらず、思ひを伝へることの難しさを痛感させられたことも多かった。亜細亜大学の増田利一君は

口数の少ない我に友どちは身振りまじへて話し給へる

我もまた友に語らむと思へども言葉つまりてもどかしき覚ゆ

と歌をよんでゐるが、この「もどかしき」は自分のおもひを相手に伝へようとする切実な気持ちから生まれたものであつて、考へてみればこのやうな経験は大学生活の中においては到底味ふことの出来ない貴重なものであつた。このやうな経験を経てわれわれは友との心の通ひあひが学問の基礎であることを身にしみて知ることが出来たのである。

第三日目の午後は、自分の思ひを正確に言葉に言ひ表はす修練の場として和歌創作が予定された。それに先立ち戸田建設（株）勤務の青山直幸先輩（昭和四十七年、東大工学部卒）による和歌創作導入講義が行なはれた。

先輩は、高校時代に読んだ「古事記」の中の須佐之男の命の歌に感動したお話から入られ、大学時代の大学紛争の時、学生運動家との対決に疲れたとき、情意の大切さを身にしみて感じ歌の道に入ってゆかれた体験を話された。さらに、「歌を詠む時、つい美しく特別な事を詠まうと意気込みがちですが、精神を緊張させ物に感ずる心さへ働かせてをれば、歌に詠み込む素材は、身のまはりにいくらでもあるのです。」と歌を詠むときの心がまへを話され、ついで防

人の歌を紹介された。防人達の卒直な思ひは、千数百年間の隔りをこえて直接私達の胸を打った。最後に、小泉信三氏の御令息小泉信吉海軍主計大尉の御遺族の歌を心を込めてよんでゆかれたが、母・伯母・妹の方々の大尉を思はれる気持が私達の心にも切々と伝はってくるのだった。

和歌導入講義の後、全員、熱い太陽の光を浴びて、九十九島巡りへと山を下り船着場へと急いだ。久しぶりに外気に触れ、蟬の声も夏のさかりを思はせた。二隻の遊覧船に分乗した参加者は心地よく吹きすぎる風にあたりながら、千変万化する島々のすばらしい風景に時の経つのを忘れた。

その夜提出された全員の和歌は、諸先生、事務局の方々の徹夜の作業により、一夜にして、歌稿としてまとめられ全員に配られた。

第四日目の夜、福岡教育大学教授 山田輝彦先生が



(和歌全体批評をされる山田輝彦先生)

その歌稿を手にして和歌全体批評に立たれた。

先生は、一首一首、作者が何を詠まうとしてゐるかに思ひをはせながら、言葉一つ一つを批評添削されていった。言葉が一つでも直されてゆくと、見ちがへるほどよく気持が表はれてくる。また、不正確な表現は、そのまま感動のとらへ方の不正確さとなることに気づくのだった。時におもしろい歌やユーモアあふれる批評に、場内はどっとわいた。このやうな楽しい雰囲気の中にも、友の気持ちに心を寄せてゆくといふ、日頃大学では感ぜられぬ学問の場を体験できた。

青年研究発表

第二日目の夕方、国民文化研究会の若い会員の先輩による「研究発表」が行なはれた。

最初に、日立造船（株）勤務の高岡正人さんが、学園紛争の渦にあった学園生活を振り返りつつ、集団の力で主張を通すのではなく、自分自身で考へ行動してゆくことの大切さを述べられた。そして、この合宿教室に参加して、聖徳太子の「共に是れ凡夫のみ」といふ言葉に触れたことが、人生の大きな転機となったと語られ、さらに一対一の真剣なつき合ひを通して相手と心を通ひ合はせ、互ひに研鑽を高め、皆と力を合せてゆくことの大切さを述べられた。

続いて、鹿児島市立河頭中学校教諭 小山さよ子さんが登壇された。「酒乱の父を持つ生徒が学校に出て来なくなり、教へ子の家へ行き何度も何度も説得したのですが、どうしても出て来ない。もうあきらめようと思った翌日その子が校庭にあらはれたのを見ました。」と切実な体験を述べて下さった。そして、「生徒とのつきあひの中から、自分の心を見究めて生きていくことの大切さを教へられました。」と結ばれた。教へ子を思はれる先生のお姿に胸打たれる思ひだった。

最後に岡山大学癌研究所勤務の田中輝和さんが、初めてこの合宿教室に参加され、今上天皇の御歌に接したときの深い感動を語られた。「天皇は常にあまねく国民の上に大御心を注いで来られた。まさにさういふお心が私達を大きく背後から支へていただいてゐるのだと思ひます。」と語られ、陛下の御歌を一首一首心を込めてよんでゆかれた。

慰霊祭

合宿第三日目の夜、大教協の先生方のお話の後、国文研会員朝永清之先生が「今日は慰霊祭といふ儀式によって私たちの祖先がこの国を守ってこられたそのお姿をお偲びし、御霊を心からお慰めしたい。」と説明されてから、参加者全員が宿舍の前庭に整列し、慰霊祭が厳粛に執

り行なはれた。

九十九島遊覧の間、国文研会員の先生方が心を込めてホテルの前庭に祭壇をつくっていただき、すっかり準備は整ってゐた。宿舎の電燈は全部消され、眼下には旧佐世保軍港が大きくひろがり、ちりばめたやうな光が美しかった。篝火が祭壇の両側にたかれた。折しも満月の光が中天にかかり我らの整列した庭にあまねくふりそいでゐる。荘厳極りない祭場だった。

お祓ひにかへて長内俊平先生が故三井甲之先生のお歌

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

と二度朗詠された。夜のしじまに通るお声に、しだいに身はひきしまり、精神が一つに集中されてくる。続いて、御霊をお呼びするため、篝火を消し、関正臣先生の警蹕けいひつとともに全員最敬礼し、黙禱を捧げた。祭壇に神饌しんぜんが供へられ、国文研副理事長宝辺正久先生による御製拝誦。続いて、大学教官有志協議会高木尚一先生による祭文奏上。ついで、全員で「海ゆかば」を斉唱し、祭壇に向ひ、二拝二拍手一拝を行なひ、全員で祈りを捧げた。最後に警蹕、最敬礼をして、御霊をお送りし、ここに恙なく慰霊祭は終了した。続いて、直会なほらひとして、お供へした御神酒を全員で少しづついただいた。

次に慰霊祭において拝誦された御歌ならびに奏上された祭文を記しておきたい。

明治天皇御製

筆

国のためふるひし筆の命毛いのちげのあとこそこのこれ萬代よろづよまでに

をりにふれたる

かぎりなき世にのこさむと国のためたふれし人の名をぞとどむる

歌

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり

述懐

末つひにならざらめやは国のため民のためにとわがおもふこと

楽

千萬ちよろずの民とともにたのしむにますたのしみはあらじとぞおもふ

蟲

浪のおとのとほざかり行くひきしほに蟲のねたかし浜の松原

今上天皇御製

海上雲遠

紀の国のしほのみさきにたちよりて沖にたなびく雲をみるかな

迎年祈世

西ひがしむつみかはして栄ゆかむ世をこそいのれとしのはじめに

八月十五日

夢さめて旅寝の床に十とせてふむかし思へばむねせまりくる

靖国神社の九十年祭

ここのそちへたる宮居の神々の国にささげしいさををぞ思ふ

祭り

わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々

祭文

ただならぬみくにのさまをうれひつつ、くぬちのをちこちゆつどひ来り、第二十一回学生青

年合宿教室といふまなびの道にいそしむ我ら、今宵昭和五十一年八月九日、ここ九州佐世保なる弓張岳のいただきにつどひて、とこしへにみくにまもりますみ祖をやのみたま、はたまたみくにのため尊きみいのち捧げたまひしいくさびと、同胞はらから、友らのみたまなごめのみ祭を仕へまつらむとす。

うつしよは乱れてあれど、言霊ことだまの幸さきはふみくにのいのちはたゆることなく、我らもろともに心かたぶけ講義の聴講はた班別討論などを重ねつつ合宿の半ばをすごしぬ。

うつしき心の不可思議なる開展にみなざる力は身ぬちにあふれ、今よりのちはつとめにはに、まなびやに、はたまた教へにはに、まごころの往きかふ道を拓きゆきなむと誓ひまつらむ。

大君のみことかしこみ、かたしとておもひたゆまず、しきしまのみちいやつぎつぎにふみひらかむとうけひまつることのよしいましましことたちきこしめしたまへ。

天がけるみ祖をやのみ霊よ。

願はくはつとめいそしむ我らのゆく手をまもらせ給へと、ここに一同に代り高木尚一謹み敬ひ畏みて申す。

第五日目。合宿教室も愈々最終日である。前日の夜は、最後の晩とあって、各班とも、深夜まで起きて尽きせぬ思ひを語つてゐたやうだが、全員朝の放送に目を醒し、広場へ集合。広島大学文学部四年の一場茂樹君の元気のいい挨拶に最後の朝の集ひが始まった。この四日間、皆本当によくがんばった。疲れもかなりたまつてゐるが、のこり数時間の日程を前に、氣力を振ひ起こし元氣に体操を行なつた。

最後の日程は、運営委員岸本弘先輩の所感発表に始まつた。岸本さんは「日本人がこれだけ長い間日本人としての生き方を見失ふことがなかったのは、天皇さまの生き方に自分たちもならつてゆかうと努力して来たからではないでせうか。」と述べられ、続いて、運営委員長片岡健さんは、「本氣でものを考へることがいかに難しいか、いかに大事であるかといふことを皆さんは、この合宿で体験されたのではないかと思ひます。この経験を大事にして帰つていただきたい。そして、この四泊五日の合宿を通じて、一つでも、これだと今思つたことを自信をもつて育てていって下さい。その第一歩を今日踏み出していただきたい。」と訴へられた。

ついで、全体意見発表の時間となり、各参加者はつきつきに挙手して登壇し、合宿生活の中で体験した切実な思ひを卒直に発表していった。

次に小田村寅二郎先生が登壇され、「合宿をかへりみて」と題してお話された。まづ先生は明治天皇の御歌

ひとりしてしづかにきけば聞くままにしげくなりゆくむしのこゑかな

をよまれ、「しげくなるといふことは体験的にさう感じられるといふことであつて、客観的に虫の音が多くなるわけではないでせう。経験的なことを表現したものを読むときには、自分自身の体験をもとにして味ふべきであつて、論理的に観察するやうな目で見ても何一つわからない。ところがその二つの見方が何の反省もなく混同されてしまつてゐる。天皇の問題を考へてゆくときにもこのことを充分に考へてゐなければならぬ」と學問に対する基本的な姿勢について重大な指摘をされたあと、さらに全体意見発表を振り返りつつ、「班別討論で皆さんは大へんつらい思ひをしつともここまで乗り越えてこられたわけですが、要するに、打ちとけて話のできたといふことは、話の中味が体験的であつたからではないでせうか。つまり頭と同時に心を働かせてゐたからではないでせうか。」と、大學教育の場・職場で自分の心の中をかくしたままで話がかはされてゐる現状にふれながら話をすすめられ、最後に「皆さん、昨日のことを思ひ出せますか。何か開会式の情景などは遙か彼方の方に感ぜられてゐるのではないでせうか。それは皆さんが、心身ともに精一杯過され、緊張を重ねて来られたからです。それを貴重な経験として心の中にとどめていただきたい。そして五日間このやうに過せた背景にある数知れない多くの人々の目に見えない協力に思ひをはせていただきたい。」と結ばれた。

小田村先生のお話のあと全参加者は班室へ戻り、班別懇談に入り、この四泊五日間を過した

一人一人の思ひを述べ合ひ、感想文執筆第二回和歌創作を行なった。閉会式を待つ間全員で歌を歌ふ班や庭に出て記念写真を撮る班など、最後の名残りを惜んでゐた。

愈々閉会式である。

国歌斉唱に続き、主催者側を代表して、国民文化研究会副理事長宝辺正久先生が挨拶に立たれ、「お別れに当りまして、ここに会する皆さま方が実に懐しくなりません。皆さんは、この合宿で心を開いて語るといふことを学ばれた訳ですが、心を開いて友を求め、その友と相寄りつつこの日本のおかれてをる立場を真剣に見つめ考へていただきたい。その思ひを一人でも多くの学園の友に伝へて、手を携へて勉強していただいていただきたいと願ひしてをります。」と言はれた。続いて、東京大学法学部三年小柳志乃夫君が参加学生を代表して、「この合宿で得た体験を大切にしてい、他



(別　　れ)

と共なる生』といふ、友だちと心通ひ合はせあふ、広やかな世界を実感できるやうに勉強を続けてゆきませう。」と挨拶した。このあと、国民文化研究会会員と、大学教官有志協議会の先生方は壇に上がられ、参加者全員がお礼の言葉を述べた。それに対して小田村先生が「お体を大事にされ、元氣にご生活をお続け下さるやうに祈つてをります。」とお別れの挨拶をされた。最後に全員で「進めこの道」(三井甲之作詞、信時潔作曲)を歌ったあと、九州大学工学部三年廣木寧君が閉会宣言を行なひ、ここに合宿教室の全日程は終了したのである。

最後に国民文化研究会の高木尚一先生がおよみになった「合宿終る」といふ五首の連作を記させていただいて、合宿の記録を終わりたいと思ふ。

合宿終る

まなしたにひらくる海とやちまたをみつつぞ思ふみくにのさまを
にひぶみのあだしことばにおほはれてくにのまきみちわかずなりたり
心こめみくにのことを語り合ふつどひ尊しみだれゆく世に
ひもすがら心ゆるめずつとめきし合宿もいま終はらむとする
山を下り世のいとなみにもどるとも大君仰ぐこころ忘れじ

合
宿
歌
集



(九十九高遠望・2)

目を閉ちて我の言葉を一言ももらさじと聞く友ぞありがたき
九州大学 平井健一

楽しきは見知らぬ友と語り合ひひとつの書ふみに心寄するとき
九州大学 広木 寧

窓ガラスをたたき音して振り向けば笑みをたたへし先輩います
富山大学 深田 哲郎

手を握る先輩の目の輝きは何にもまして我を励ます

西南学院大学 安部 博之

友どちと湯ぶねにつかり語らへば心なごみて疲れとれゆく

亜細亜大学 鹿島 洋一郎

語れどもとぎれがちなる我によする友の言葉のありがたきかな

早稲田大学 森 永有三

寝静まりたる部屋にて友と二人語り合ふ

暗き中に輝く友の瞳見つつ語りてゆけば声のふるへつ

九州大学 長深 一成

熱気さめ静まりかへる講義室に白き灯りのかうかうとつく

何一つ物音もせぬ真夜中に人いますとは思はざりしを
名も知らぬ友はひとりで黙々と明日の演題かきつけてをり
疲れたる身体のことゝ顧みず打ち込む姿に頭のさがる

玉川大学 加藤 詩麻音

床につきまなこつむらず我が思ひ友と語りて夜もふけにけり

鹿児島大学 前園 由美子

同じ班の上岡さんが講義中に倒れしを思ひ

顔色のまだよくなけれど友どちは師の君の話聞きたしといふ
できるだけがまんしますと友どちは笑みて座席につきけるものを
ドサツといふ音を聞きてふりむけば友は氣失ひて倒れてありき
なぜ早く気づかなかつたと友どちに申しわけなき思ひのやまず

○

入海の面を友らと船に語りつつ行くひとときたのし
熊本大学 折田 豊生

島と島のはざまを船の行く程にあたりしづけし人影もなく

早稲田大学 庄野直之
静かなる沖あひとほく横たはる五島の上に日は傾ぶきぬ

亜細亜大学 須田清文
荒波にけづられしとふ岩はだの奇しきかたちのおもしろきかな

福岡教育大学 平山尚美
九十九島めぐり

さはやかな風に吹かれつ島々を友らあまたとめぐりゆきけり
潮風に吹かれつ海をながむればおのづと心のやすらぎてゆく
青々と広がる海をながめをれば故郷の海のおもひださるる
幼き日友らと遊びし故郷の青く澄みける海のなつかし

亜細亜大学学生部 佐々木友三

美しき九十九島の眺めをば見せてやりたし故郷の母に
母と子のたはむる姿ながめつつ病ひにふせる我が母思ほゆ

○

西南学院大学 酒村聡一郎
一言も聞きもらさじと思ひつつレジメ手にして講義へと急ぐ

小田村寅二郎先生の御講義を聴きて

九州大学 加藤 多夏詩

力こめ力説なさるお言葉にただぐいぐいとひきこまれけり
お言葉は祖国のことを思ひてか一言一言強まりてゆく

亜細亜大学 佐藤 晴章

民族のいのちにつづけと導かるる師の言の葉は突きささるごと
広やかな世界に友と放たるる身のうれしさはたとふるすべなし

鹿児島大学 村田 研史

青山先輩の講義をお聞きして伯父上のことを思ふ

伯父上も御楯となりて征かれしてふ母のことばの思ひ出さるる
御戦に征で発つ前に家族らと写真撮りける姿浮びく

軍服の肩に残りし雨あとのありありと見ゆ三十年過ぎれど

夜更けまで机に向かひてをられしてふ姿思へば我が身ふるひぬ

老父母を残しゆかれし伯父上の御心慰べば胸のつまりぬ

九州大学 笠 晋一朗

はじめて御製を拝誦して

この日まで御歌を拝誦せざりしがただひたすらにくちをしかりけり
御身棄て唯民思ひ降伏を選びたまひし御心たふとし

早稲田大学 阿川 信次

黒上先生の御歌によせて

若き血の燃ゆるがごとく生きられしその御姿に我おどろきぬ

福岡教育大学 谷口 敏子

志賀先生の御講義を聞きて

しみじみと祖先を思ふ心をば育てませよと語り給ひぬ

全身をぶつくるごとく語らるる師の御言葉に胸うちふるふ

○

慶応大学 廣岡 成則

早朝の澄みわたりたる大空にかかげられゆく日の丸美し
大空にひるがへりたる日の丸に人の心もかくあれと思ふ

長崎大学 藤谷 京子

早朝行事に向ふ際に

朝もやのたちこめるなか友どちと広場に向かふ心すがしき

慰霊祭

大阪芸術大学 小川俊彦

国の為命をすてし人々の御霊むかへむ我らが上に

我ら唄ふ「海ゆかば」の歌たからかに慰霊の庭にひびきわたれり

天がける御霊をむかへ奉らむと慰霊の庭に我ら集へり

今まさに御霊の降り来られたり我が全身にふるへ走りき

慰霊祭にて

福岡大学 山口道生

黙禱の静寂の中に虫の声御霊の声かとしばし聞き入る

「海征かば」歌ふに想ふますらをが国を守りて散りし姿を

「海征かば」歌ひて散りしますらをの強き心を我は学びたし

福岡教育大学 河永真由美

御霊呼ぶお声を聞きて御霊らが我の前にも現はるるこちす

国のため命をすてし人々にやすらかにませと手を合はせたり

最後の夜の集ひにて

鹿児島大学 橋口丈志

友皆と肩くみあひて歌ひゆけばしらず体に力こみあぐ

我もまた声はりあげて歌ひたり肩くむ両手に力こめつつ

○

全体意見発表にて

西南学院大学 古賀直司

壇上に登りし君は手術日を延ばしてまでも参加せしとふ
今までは口べたといふ君なれど堂々として壇上に立つ

青山学院大学 高土裕二

女子学生の意見発表を聞きて

病床の障害者らにかけられし天皇の御言葉ただにやさしも
天皇のあつき御言葉この胸にいついつまでも残しゆきなむ

西南学院大学 中村公明

最後の班別懇談にて

友達は最後に歌をと立ち上がり「ああ江田島」を歌ひてくれたり
友達のコもれる歌聞きつゝ手拍子の音のひろがりてゆく

熊本大学 原田保

合宿の終はりておのおの離さかるともさらに励めや学びの道に

もろともに力合はせて進みゆかむ学びの道は険しかれども
いやさらに多くの友ともろともに集ひてしがなまたの夏にも

亜細亜大学 中村明彦

窓辺よりなじみし緑の島々にけふは別れを告げて帰らむ
だんだんと親しみ合ひし友どちとはや別れゆくことぞさびしき

鹿児島経済大学 神野辰郎

弓張の山の頂にともどちとともに過ごせるときもけふまでか
ともどちはこの合宿にて得たるものを書きつづりをり思ひ思ひに
各地より集ひきたりしともどちと別るときは間近になりぬ
合宿に集ひきたりしともどちをいつになりてもわれは忘れじ

鹿児島大学 鎌田浩次郎

み友らと握手を交はし別れゆくふたたび会ふ日を堅く契りて

福岡女子大学 光山香奈子

合宿終りて友を見送る

あわただしく帰らむとする友どちを玄関まではと見送りてゆく
バスを待つ短き時間に友どちと最後の語らひ楽しかりけり

バスに乗り窓より身を出し語りかくる友の笑顔を我忘るまじ
友の乗るバス見送ればはりつめし我の心もほぐれゆくなり

○

高崎経済大学 教授 高木尚一

みどりこき弓張岳のいただきにつどふ友らの力づよきかな
声高くはげまし合ひつきはめゆく言の葉のみちけはしかりけり
法師蟬しきなく夕べひたすらにうたよみをれば心しづけし
今宵はもみたま和めのみ祭りに心をこめてつとめまつらむ

慰霊祭

亜細亜大学 教授・教養部長 夜久正雄

まどかなる月なかぞらにのぼりゐてしづかにまつりのひろにはてらす
雲晴れてもち月出でし不思議さを語りあひつつ並み立つひろまへ
ひろまへを吹きわたる風の何といふこのすがしさよ言ひたへぬただ
神々をまつるひろには月照りてすず吹く風もたへなるひととき
月かげのただよふそらにみたまいま天がけります心ちせらるる
師の君のみうたしづかにわが友が誦ししまつればいよよかしこし
海ゆかば水漬くかばねともろごゑにうたひまつりぬみたまのみまへに

磯の香のただよふ岸におりたちて船出をまちぬ若き友らと
さまさまの形おもしろき島ありて見つしゆけば心楽しも
信仰を守り通ししキリスト者の住むといふ島かこの黒島は
真夏日にきらきら映ゆるさざなみをけたてて船はめぐりゆくなり

玉造温泉・こんや別館館主 青砥宏一
昭和十八年御軍に召されしとき海軍施設部にて鶴の浦貯木場工事に従軍せしことあり。

ホテルに帰りて

友どちとひるまめぐりし九十九島ホテルの窓ゆみはるかすかも
船着場みるがうちにもうかびくるいにしへあまた丸太浮びし
いにしへのひたに思へて見おぼえの岸壁広場ひたになつかし
浦めぐりしつも心いにしへを思ひくさぐさ思ひつきずも
昔みし家は変れど見おぼえの山の姿よあゝなつかしき
再びもみはるかすかも夕なづむ夏日のてれる九十九島を
まさ目にて今一度と思ひ居し貯木場跡今日見つるかも

福岡県立修猷館高校 教諭 小 柳 陽太郎

五島の方を見やりて今上陛下の大御歌「久しくも五島を觀てんと思ひるしがつひに
けふわたる波光る灘を」をお偲びして

大御歌偲びまつればはろかなる五島の方のなつかしくして

おどるときおもひを胸にかの島にいでましにけむその日しのばゆ

大君のいでましし日も今日のごと海原遠くきらめきにけむ

かたはらの友もなつかしげに大みうた誦しまつれり海見放きけつつ

福岡県立三池高校 教頭 小 林 国 男

最後の班別懇談の際に友の感想発表を聞きて

かたくなと思ひし君は胸内の思ひもらせり合宿最後の日に

かたくなと思ひし君はくさぐさの思ひ胸にひめこもりてありしか

九月からよき先生になりたしと君語りをへ涙ながせり

合宿に心つくして励みゆく友の姿に心動きしか

かよわなる姿に見ゆる君が身のつとめ思へば心いたむも

心しる友とたづさへくるしかるつとめの道をすすみたまへや

慰霊祭にて

魂呼びのおごそかな声聞えくる夜のしじまのいつきの庭に
うるはしきみ国のいのち護らむとたふれし友のみ魂はここに
すぐる日の大軍にささげたる友のいさをし偲ぶこの夜
われもまた残れるいのちつくるまであとつきゆかむと誓ひをろがむ
安らげく天かけりませとひた祈る合宿の地での慰霊の庭に

小山さよ子さんの研究発表を聞きて

戸田建設建築設計第一部 青山直幸

母はなく酒乱の父をもつといふ少女の上を聞けばかなしも
幾日も学び舎に来ぬ教へ子の身を案じつつただ待ち給ふ
余りにも来ぬ日続けばいやつひに君はその子を訪ね給ひぬ
学び舎にとまれ来たまへと幾度も心尽してさとしたまひぬ
つぶらなるまなこに涙たたへつつ少女は何度もうなづきしとふ
学び舎にいくとふ契りを君と子は涙ながらに結びたまひぬ
契りにも反して少女は学び舎に姿を見せず幾日経ても

耐へがたき思ひに君は子の父に訴へたまふか我を忘れて
君の思ひ伝はりたるかある朝に少女は姿を現はしたりき

住友電機工業 布 瀬 雅 義

青山先輩の和歌導入講義で小泉信吉海軍主計大尉御遺族の歌にふれて

壇上の先輩のよまるる歌聞けば思はず目頭熱くなりくる
戦死の報もちてひた泣く妹君のなげきの様のしのばれくるかも
生きの世にかかる歎きのありやとふ妹君の歌胸に迫り来
かくのごとかなしき思ひ積み重ねつづききたるか大和島根は

鹿児島県高尾野町立小学校 教諭 内 山 なな子

いよいよに発表の時せまり来て友の面わは白く見えたり
わが友を紹介し行く後輩の声もさやかにひびきわたりぬ
語りゆく友の姿に思はずも熱き思ひのこみあげて来ぬ
発表は日ごろの友の生き方のあらはるることつたはりて来ぬ

(小柳左門 選)

あ と が き

例年になくきびしい寒さの冬も漸く過ぎて、校正が終る頃には、ここ九州の地では梅も満開になった。

すでに三月の五日から女子学生四十名が熊本ユースホテルに第五回目の春季合宿を開催したし、三月二十五日からは全国の男子幹部学生による合宿が福岡市北郊、宮地嶽神社に予定されて、リーダーの学生たちはいま、その準備に忙殺されてゐる。

日本にふさはしい学問の世界を樹立するために、大学の学風の中に記紀万葉以来の日本人のみづ／＼しいところを蘇らしめるために、たゞその一つの願ひにすべてをこめて、今年もまた全国の同志のきびしい研鑽とあた／＼かな交流がつゞけられてゆく。

今年の合宿教室は八月六日から十日まで四泊五日、雲仙のファミリーホテルにおいて開催されることになってゐるが、講師には木内信胤先生のほか、東京大学の国際政治学の衛藤藩吉先生に御登壇いたゞくことになった。青葉燃ゆる雲仙の中腹に集ふ全国の友らのその日の姿を偲びつゝ編集の筆を措く。

昭和五十二年三月

山 田 輝 彦
小 柳 陽 太 郎

社団法人 国民文化研究会関係図書目録

A 先師・先輩の遺著

書名	著者・編者	発行年月日	版・頁数	頒価
聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業 (増補再版本)	黒上正一郎	四四・一〇・一五 (現在四版)	A5判 三〇四頁	〒一、〇〇〇円
要国の 光と影 ―田所広泰遺稿集―	小田村寅二郎編	四五・三・一〇 (在庫ナシ)	B6判 五〇一頁	非売品

B 国文研叢書(新書判)

No. 2	No. 1	No.	書名	著者・編者	発行年月日	頁数	頒価
日本精神史鈔 ―親鸞と実朝の系譜―	古事記のいのち ―改訂版―			桑原 暁一	四一・一一・二五 (在庫ナシ)	二七九頁	非売品
				夜久正雄	四一・三・二五 (原・版) 四八・一一・一 (改訂版)	三〇七頁	〒七〇〇円 一巻円

No.11	No.10	No. 9	No. 8	No. 7	No. 6	No. 5	No. 4	No. 3
続 — 日本精神史鈔 — 花山院とその系譜 —	歐米名著邦訳 (明治) 集 — 文献資料集 —	歴史と人生観 — マルクス主義の超克 —	日本思想の系譜 — 文献資料集 (近代その二)	日本思想の系譜 — 文献資料集 (近代その一)	日本思想の系譜 — 文献資料集 (近世その二)	日本思想の系譜 — 文献資料集 (近世その一)	日本思想の系譜 — 文献資料集 (古代・中世)	弁証法批判の歴史
桑原 暁一	小田村寅二郎編	川井 修治	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	高木 尚一
四五・一二・二五	四五・三・二〇	四三・三・一五	四四・三・二五	四四・三・二五	四三・一〇・一	四三・二・一	四二・三・二五	四二・二・二五
三一〇頁	四八三頁	二八三頁	三八一頁	四〇三頁	四〇九頁	三一七頁	三〇九頁	二四一頁
非売品	〒五〇〇円 一〇〇円	〒六〇〇円 一〇〇円	〒七二〇円 一〇〇円	〒七八〇円 一〇〇円	〒七八〇円 一〇〇円	〒六二〇円 一〇〇円	〒六〇〇円 一〇〇円	〒五〇〇円 一〇〇円

C 「合宿教室」レポート

No.18	No.17	No.16	No.15	No.14	No.13	No.12
明治天皇御集研究	日本における —マルクス主義批判論集—	国史の地熱 —聖徳太子と楠氏の精神—	白村江の戦 —七世紀・東アジアの動乱—	ヨーロッパにおける マルクス主義批判論集	短歌のあゆみ —続「短歌のすすめ」—	短歌のすすめ
三井甲之著	戸田義雄編	桑原暁一	夜久正雄	桑原暁一編	山夜田久輝彦雄	山夜田久輝彦雄
五二・二・一〇	五一・三・一〇	四九・一〇・二五	四九・一・一〇	四八・二・一〇	四六・二二・一	四六・四・一
三五四頁	三二〇頁	二七九頁	二八九頁	三二八頁	三一六頁	三〇九頁
非売品	非売品	非売品	〒五〇〇円 一〇〇円	〒五〇〇円 一〇〇円	〒三五〇円 一〇〇円	〒六〇〇円 一〇〇円

回数	開催地 (人員)	年	書	名	主要講師	版・頁数	定価
----	-------------	---	---	---	------	------	----

8	7	6	5	4	3	(2)	2	1
雲 (二〇二名) 仙	阿蘇 (二一五名) 蘇	雲 (二〇八名) 仙	雲 (二〇〇名) 仙	阿蘇 (一六〇名) 蘇	佐賀 (七二名) 賀	岡 山	福岡 (二七名) 岡	霧島 (九二名) 島
38	37	36	35	34	33	32	32	31
新しい学風を興すために —第二集—	新しい学風を興すために —第一集—	続々国民同胞感の探求	続国民同胞感の探求	国民同胞感の探求	民族の明日を求めて	民族復興の根底を培うもの	民族自立のために	混迷の時代に指標を求めて
竹山 道雄・木内 信胤	福田 恆存・木内 信胤	小林 秀雄・木内 信胤	木内 信胤・花田大五郎	花田大五郎・中山 優	勝部 真長・木下 彪	高木 尚一・石村暢五郎	竹山 道雄・高山 岩男	広田 洋二・日下 藤吾
新書判 二九八頁	新書判 二四八頁	B6判 三三五頁	B6判 四三三頁	B6判 三六五頁	新書判 二五〇頁	新書判 一三三頁	A5判 五三三頁	A5判 八八頁
〒三〇〇円 一〇八円	〒二〇〇円 一〇八円	〒五〇〇円 一〇八円	〒五六〇円 二〇八円	〒五〇〇円 一〇八円	〒二〇〇円 二〇八円	〒一〇〇円 二〇八円	〒五〇〇円 二〇八円	〒一五〇円 二〇八円

D 「合宿教室」感想文集（非売品）

（国民同胞感の探求三部作は「理想社」より刊行）

20 阿蘇 （四三五名）	19 霧島 （五二八名）	18 雲仙 （四三三名）
50	49	48
日本への回帰——第十一集——	日本への回帰——第十集——	日本への回帰——第九集——
木内 信胤・福田恆存	小林 秀雄・木内 信胤	木内 信胤・村松 剛
新書判 三二五頁	新書判 三〇六頁	新書判 二八九頁
〒五〇〇円 一八〇円	〒五〇〇円 一八〇円	〒五〇〇円 一八〇円

書名	編者	発行年月日	版・頁数
第十回 「合宿教室」参加者感想文集 三一五名	国民文化研究会編	四〇・一〇・二〇	A 5判 八〇頁
第十一回 「合宿教室」参加者感想文集 二四〇名	国民文化研究会編	四一・一〇・五	A 5判 一〇四頁
第十二回 「合宿教室」参加者感想文集 三三六名	国民文化研究会編	四二・一一・五	A 5判 一二〇頁
第十三回 「合宿教室」参加者感想文集 三五三名	国民文化研究会編	四三・一〇・一〇	A 5判 一八頁

第十四回 「合宿教室」 参加者感想文集 四〇三名	国民文化研究会編	四四・一〇・二〇	A5判 一三六頁
第十五回 「合宿教室」 参加者感想文集 —現代知性への警鐘— 四九一名	国民文化研究会編	四五・一〇・三〇	A5判 二一八頁
第十六回 「合宿教室」 参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて— 三〇二名	国民文化研究会編	四六・一一・一〇	A5判 一二六頁
第十七回 「合宿教室」 参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて— 四〇二名	国民文化研究会編	四七・一〇・三〇	A5判 一六四頁
第十八回 「合宿教室」 参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて— 四三三名	国民文化研究会編	四八・一〇・二〇	A5判 一七七頁
第十九回 「合宿教室」 参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて— 五二八名	国民文化研究会編	四九・一〇・三〇	A5判 二〇〇頁
第二十回 「合宿教室」 参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて— 四三三名	国民文化研究会編	五〇・一〇・二〇	A5判 一六七頁
第二十一回 「合宿教室」 参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて— 三七二名	国民文化研究会編	五一・一〇・二〇	A5判 一五一頁

E 海外派遣レポート（非売品）

書名	編者	発行年月日	版・頁数
日韓・海と河の交流（日韓交流レポート）	浜田 収二郎	四三・六・一	A5判 一二二頁
香港・マニラ・ミンダナオ巡訪団 レポート	浜川 田修 田 収二郎	四四・一一・二九	A5判 八〇頁

F その他

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
（資料）九州地区国立大学紛争の体験記録 —教官側の発言—	（昭和四十六年十月） （国民文化研究会発行）	A5判 三三二頁	非売品
歌よみに与ふる書・他四編	正岡子規 （国民文化研究会発行）	新書判 一二二頁	（品切）
天皇と天皇制についての基本的思考	小田村寅二郎・夜久正雄 （斑鳩会発行）	新書判 一〇七頁	（品切）
今上天皇御歌解説（附）万葉集論	三井 甲之 （斑鳩会発行）	新書判 一五七頁	（品切）

明治・大正・昭和 「謹選 詔勅集」	(斑鳩会発行)	新書判 八五頁	〒二二〇〇円
式典曲「神州不滅」 行進曲「進めこのみち」	三井甲之作詞 信時潔作曲 —日本学生協会の歌—	各四五頁判	〒各一〇〇円 一〇〇円

G 関係図書

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
新輯 日本思想の系譜(上・下) —文献資料集—	小田村寅二郎編 (時事通信社)	A 5判 (上)八五七頁 (下)九一二頁	上・下各 三、〇〇〇円
日本思想の源流 —歴代天皇を中心に—	小田村 寅二郎 (日本教文社)	四六判 三〇五頁	八五〇円
THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN (国文研叢書 No.1 「古事記の56ち」の翻訳)	(訳者)G. W. ROBINSON [THE CENTRE FOR EAST ASIAN CULTU- RAL STUDIES]	B 6判 二〇八頁	
歴代天皇の御歌 —初代から今上陛下まで二千首—	小田村 寅二郎 柳 陽太郎 (日本教文社)	四六判 四三八頁	一、七〇〇円
歌人・今上天皇 △増補改訂△	夜久正雄 (日本教文社)	四六判 三三三頁	一、五〇〇円

H 月 刊 誌

誌 名	創 刊 ・ 号 数	版 ・ 頁 数	定 価
月刊「国民同胞」	昭和三十六年十一月創刊 昭和五十二年三月現在一八五号	B 5 八頁判	年間一、〇〇円 共 卅 共
「国民同胞」合本 第一卷	第一号〜第五〇号	各卷四〇〇頁	三卷揃 四〇〇〇円 別冊 (残部僅少)
同 第二卷	第五一号〜第一〇〇号		
同 第三卷	第一〇一号〜第一五〇号		

I (分科会) ・ 教育内容は正促進委員会編著

書 名	発 行 年	版 ・ 頁 数
現下の学校教育の内容を正すために急務を要する問題点	四十七年十二月	B 5判・二五頁

— 日本への回帰 —
(第 12 集)

昭和五十二年三月二十三日発行 定価 五〇〇円

〒 一六〇円

編 者 大学教官有志協議会

社団法人 国民文化研究会

編集委員代表 小 田 村 寅 二 郎

発 行 所 社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇一八柳瀬ビル

振替 東京六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします

